

**りぶ・らぶ・あにまるず国際シンポジウム記録集**

『子ども達へ与える動物の影響』－身体的視点と精神的視点より－  
『子どもたちと犬たちのふれあいフェスティバル in ひがしなだ』併催

Being Held in Conjunction with -  
The Festival for Children & Dogs in Higashinada-ku

**LIVE LOVE ANIMALS - AN INTERNATIONAL SYMPOSIUM**

The Influence of Animals on Children: from both  
Physiological and Psychological Perspectives



神戸市 / NPO法人Knots  
Kobe City , NPO Knots

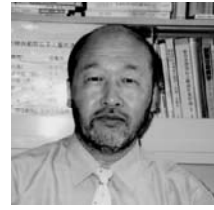
## 目 次

座長ご挨拶	p. 2
概 要	p. 3
りぶ・らぶ・あにまらず国際シンポジウム 『子ども達へ与える動物の影響 Part I - 身体的影響の視点より - 』	
『乳幼児期の動物への接触とアレルギー発症について』 ビル・ヘッセルマー クイーン・シルビア子ども病院、イエーテボリ、スウェーデン、 小児アレルギーユニットコンサルタント	p. 4
『我が国における動物由来感染症とその対策』 中嶋 建介 厚生労働省健康局結核感染症課 課長補佐	p. 13
『動物飼育による感染症とアレルギー発症』 藤田 紘一郎 東京医科歯科大学大学院国際環境寄生虫病学 教授	p. 22
山岡 幸司 神戸市立中央市民病院小児科	p. 26
パネルディスカッション	p. 29
座長 植村 興 大阪府立大学大学院農学生命科学研究科 獣医公衆衛生学研究室 教授	
パネリスト ビル・ヘッセルマー 中嶋 建介 藤田 紘一郎 山岡 幸司	
りぶ・らぶ・あにまらず国際シンポジウム 『子ども達へ与える動物の影響 Part II - 精神的影響の視点より - 』	
『子ども、動物、人道教育』 ジュリー・バンク 米国マリコパ郡動物保護・管理施設 公衆プログラム&開発部 部長	p. 35
『子ども、動物そして感情移入（エンパシー）・感情の共有～虐待、暴力防止につながるか』 フランク・R・アシオン 米国ユタ州立大学心理学部 教授	p. 43
『心を育てる動物飼育体験』 宮川 八岐 文部科学省初等中等教育局 視学官	p. 55
『子ども達へ与える動物の影響』 飯倉 洋治 昭和大学医学部小児科 教授	p. 58
パネルディスカッション	p. 63
座長 山崎 恵子 ペット研究者	
パネリスト ジュリー・バンク フランク・R・アシオン 宮川 八岐 飯倉 洋治	

シンポジウム Part IIIにパネリストの一人としてご参加されました、昭和大学医学部小児科教授 飯倉洋治先生が平成15年2月18日に胃癌の為、お亡くなりになりました。  
シンポジウムの場で貴重なお話を頂き、また、一緒に考える機会が持てましたことは、子ども達にとっても私共にとりまして有意義な時間であったと思います。  
子ども達のことを大変気にかけておられた飯倉先生のお気持ちに応えられる様、子ども達や動物達が安心して暮らせる社会の為に出来ることを、各人が考えていければと存じます。  
謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 座長ご挨拶

『子ども達へ与える動物の影響 part I』- 身体的影響の視点より - 座長  
植村 興 大阪府立大学大学院農学生命科学研究科  
獣医公衆衛生学研究室教授



### 動物の見える幸福社会

この小さな地球の上に 60 億余の人が生を営んでいる。  
暑い国、寒い地方、雨の中、砂漠のオアシスで、・・・、今、人々は何をしているのだろうか。  
当たり前だけれども、何をしているのか分からない。

人々が暮らしている所を、先進国、発展途上国と乱暴に区別されることがある。先進国に住む人の所得は発展途上国のその 100 倍もあるということだ。それでは、先進国の人は発展途上国に暮らす人より 100 倍幸せであろうか？ これにも返答のしようがない。しかし、多分、それは事実ではないだろう。

ひとつだけ、断言できることがある。  
それは、幸せに見える人々の傍（かたわら）、あるいは満足げな人々の背景には必ず動物がいる。これは事実だ。そこにいる子どもたち各人の個性に富んだ豊かな顔がそれを証明している。

動物が身近にいない人々が、何かさびしうに、そして冷たく見えるのは、私の思い過ごしだけではなさそうだ。この不幸な現象は、動物を排除し、鉄とコンクリートとプラスチックに囲まれた「清潔環境」で生活する「中途半端」な先進国によく見られる。

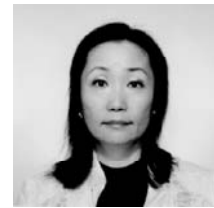
動物が教えてくれる、暖かさ、やさしさ、生きることの厳しさ、そして何よりも、動物の正直さ、これらをもう一度私たちの生活の場に取り戻したい。これが私の願いである。

人ほどではないにしても、動物は怖くて、おそろしい。病気を運ぶし、時には咬んだりする。においや鳴き声で不愉快な思いをすることもある。動物と人が共生する社会をつくるには動物をよく知り、動物がもたらす危害や迷惑な要素は取り除かなければならない。動物好きな人も動物嫌いな人もともに幸せに暮らすためにも、これは解決しなければならない大事な仕事だ。

内外の識者が神戸に相寄った今回のシンポジウムは、その意味で、多数の方の興味を引いた。今まで知らなかった、動物のもつ子ども達の健康に対するプラス効果を披露していただけたし、病気の予防に対する注意事項も学んだ。会場からも有意義なコメントをいただいた。

それらをまとめた記録集が、子ども達の身体的健康増進に役立ち、人と動物が共生できる「動物の見える幸福社会」の実現による「真の先進国」への歩みに少しでもお役に立てば幸せである。

『子ども達へ与える動物の影響 part II』- 精神的影響の視点より - 座長  
山崎 恵子 ペット研究家



子ども達は我々人間社会の未来を担う重要な存在である。その子ども達を教育するのは周囲の大人の義務であり、その義務をはたすためには我々は真剣に努力をしていかなければならぬのである。その中においても特に現代社会において必要とされているのは「共存教育」である。1884 米国マサチューセッツ州の動物愛護協会の創設者がこう語っている、「子ども達に動物に親切に接することを教えれば、人間に対しても親切になれるよう育つに違いない」。正にその通りであり、共存教育とは単に動物や地球上の自然と調和した生活を営ませるためだけのものではなく、人間社会全体の調和、平和を促す成人を育てるためのものでもある。子どもは皆自分以外の生物に対する感受性を持って生まれてくるものであるが今の社会、そして教育の中ではその感受性が少しづつ削られとられてしまっているようである。全ての子どもが持っているはずであるこの感受性を取り上げることなく育み、教育して行くことによって、子ども達は皆身近な小動物と正しく接し、野生動物の尊厳を守り、そして周囲の人間の心を理解することができるようになって行くのである。動物と子ども、と言うとすぐに人々は「愛護教育」と思いこんでしまうようであるが、子ども達を動物とともに育てることは単なる「愛護教育」の手段ではなく、むしろ「人間教育」なのである。

子ども達は自分と限りなく近い、かつ異なる、「生命」に正しく接することで己の人間としての心、そして英知をさらにみがいて行くのである。

このシンポジウムは正にこの「人間教育」の根底にあるべきものを探る格好の機会であり、またそれがいかに今の世界にとってなものであるか、と言うメッセージを発信する役割をも担ったものである。

## 概 要

りぶ・らぶ・あにまるず国際シンポジウム  
『子ども達へ与える動物の影響』－身体的視点と精神的視点より－  
『子どもたちと犬たちのふれあいフェスティバル in ひがしなだ』 併催

開 催 期 間 『子ども達へ与える動物の影響 Part I』 - 身体的影響の視点より -  
2002年9月19日(木)  
『子ども達へ与える動物の影響 Part II』 - 精神的影響の視点より -  
2002年10月18日(金)  
『子どもたちと犬たちのふれあいフェスティバル in ひがしなだ』  
2002年10月19日(土)

目 的 子ども達への動物の影響についての正確な情報と議論の場を提供することにより、一般の方々及び子ども達に関わる方々の理解を深め、人と動物のより良い共生社会構築の一助とする。

主 催 神戸市／特定非営利活動法人 Knots

参加協力団体 (社)神戸市獣医師会／(社)兵庫県盲導犬協会／介助犬協会／  
日本障害者乗馬協会・明石乗馬協会／  
アシスタントドッグ育成普及委員会／  
JFA 日本フリスビードッグ協会 兵庫支部

特 別 協 賛 ネスレピュリナペットケア株式会社

助 成 (財)中内力コンベンション振興財団／ポートピア 81 記念基金

後 援 環境省／厚生労働省／文部科学省／  
兵庫県／兵庫県教育委員会／神戸市教育委員会／神戸市 PTA 協議会／  
(社)神戸市医師会／(社)日本獣医師会／(社)兵庫県獣医師会／  
(社)神戸市獣医師会／(社)日本動物福祉協会 阪神支部／  
スウェーデン大使館／  
駐大阪・神戸アメリカ合衆国総領事館 関西アメリカン・センター

話題提供

『乳幼児期の動物への接触とアレルギー発症について』

ビル・ヘッセルマー キーン・シルビア子ども病院、イエーテボリ、スウェーデン  
小児アレルギーユニットコンサルタント



有り難うございます。まず最初に私を招待してくれましたことをお礼申し上げます。乳幼児期の動物への接触とアレルギー発症についてお話をさせていただきます。まず、最初にこの写真をお見せしたいと思います(図1)。

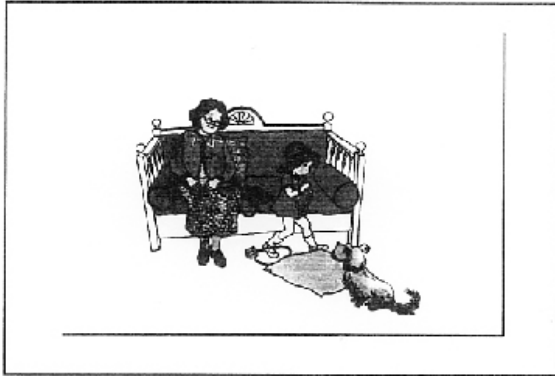


図 1

これは、子どもの絵本なのですが、よく知られている著者ヒンデグレン (Astrid Hindgren) さんの本です。ほとんどの子どもなら読んでいる、特別な本でみんな誰でも持っている本です。動物というのは、子どもにとりましてとても重要なものであり、これは、絵本の中だけではなく動物というのは子どもにとって大事なものです。科学的な観点からも重要です。

色々なスタディーがありますけれども、動物というのは子どもの社会的なネットワークの中で大事なものです。これは、

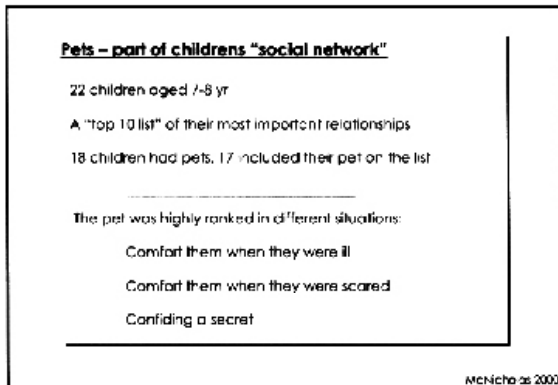


図 2

ジュン・ニコラス (Mc Nicholas) とその同僚によって行われたスタディーであって(図2)、動物と子どもたちの関係はとても重要であると言ってあります。ほとんどの子どもが家にペットを持っておりまして、大事な物のリストの中でペットはトップテンに入っております。このトップテンのリストにおいて色々違うストーリーを言っております。これは、小さな子どもたちにとっては、非常に重要なものでありまして子ども、女の子でも男の子でもこういった状況の下で誰に連絡

を取りたいかと言いますと、子どもたちは犬や猫だと言います。勿論、問題を解決してもらうためではないのですけれども、友達として慰めということですね。例えば、怖いとき、病気のときそういった時に慰めになるということです。



図 3

又、新聞にもこの夏ですけれどもこういった記事が載っております(図3)。ペットを飼っているということは非常にプラスの効果があることでありますが、ペットを飼っている子どもの場合には、学校を病気で休むということが少ないということです。それは、子どもがペットが居ることによって、免疫システムが丈夫になるということです。勿論、他の説明もあるでしょうけれども、プラスの効果が示唆されているのです。一方、動物と一緒に家で暮らすということには、アレルギー学者などのアドバイスでは、アレルギーを起こすので、子どもの居る家では動物を飼ってはいけないと言ってあります。一般的な意味において、またアレルギーの家族歴があるような家庭においてはペットを飼わない方が良いというアドバイスがあるわけです。勿論、こういった事は認識されているのですが、アレルギー疾患の罹患率は先進国では増えている訳なのですが、特に3~40年の間にアレルギーの罹患率が増えております。スウェーデンにおける研究の結果ですが、30%のスウェーデンの子どもはこの年齢の

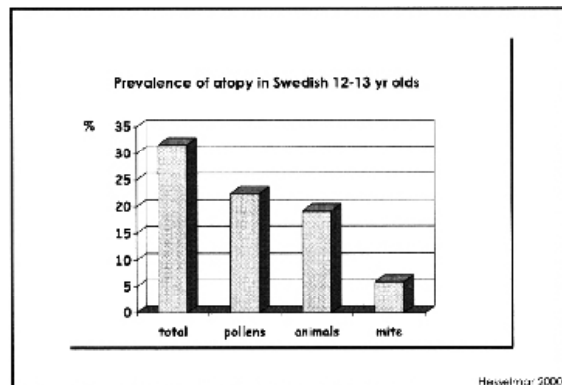


図 4

グループでは、アレルギーテストでプラスになっております(図4)。また少なくとも、20%の子どもが動物に対してアレルギーを持っております。ダニへのアレルギーというのは、スウェーデンでは低くなっております。北の国ですので、あまりダニは発生しないのです。動物のアレルギーに比べて、ダニのアレルギーは少なくなっております。次に喘息

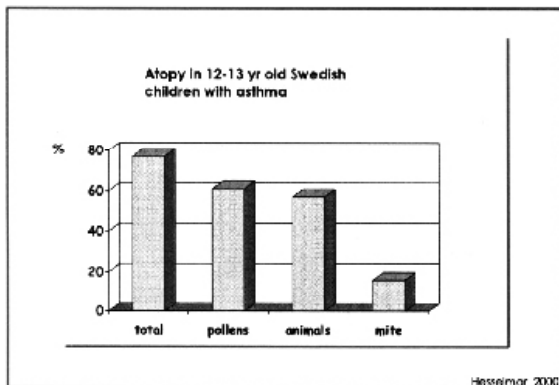


図 5

の研究において、喘息の子どもを診た場合ほとんどの子どもがアレルギーを持っておりますして60%が動物に対してアレルギーを持っております(図5)。

このような背景から、このようなアドバイスをするのはどうかと考えますと、もし動物のアレルギーを持っている場合、感作されてそして簡単にアレルギー疾患を発症してしまったということですから、アレルギーのある子どもには動物を飼わない方が良いというアドバイスをする訳なのです。しかしこのようなアドバイスというのは、正しいのでしょうか(図6)。ペットを避けることで、喘息やアレルギーを発症することから守ることが出来るのでしょうか。私の話を続けます前に、まず最初に話したいと思いますのは、一次予防と二次予防という事です。

一次予防ということ考えた場合、患者さんがこういったアレルギー疾患を発症しないようにということが一次予防です。アレルギーを持っている子どもでも、その症状を出来る

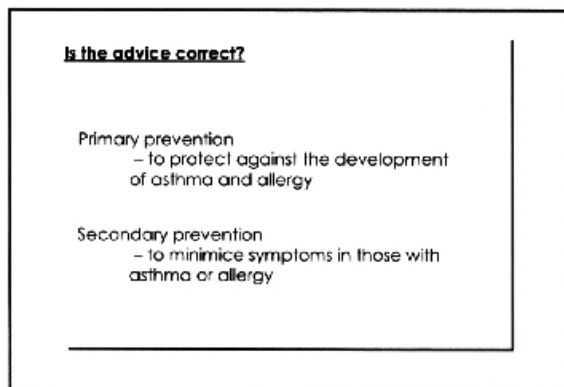


図 6

だけ少なくしようということが二次予防であります。二次予防ということで、医師の観点からお話を進めたいと思います。喘息のある人というのは、子どもは、猫とか動物と接触してはいけないのかどうか。プラシャック(Plaschke)の研究結果を見ていただきますと、これは大人も含めておりますが、喘息、

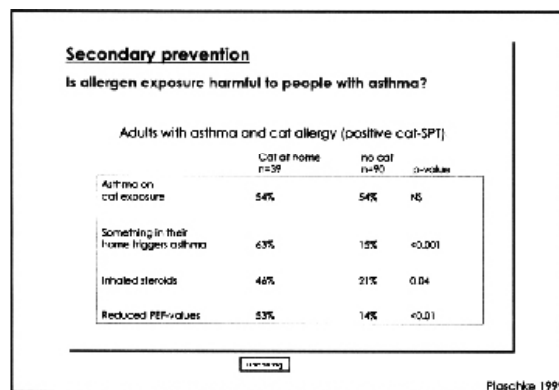


表 1

また猫アレルギーを持っている患者さんの状態が明らかです(表1)。

猫アレルギーにポジティブな患者さんを見ていきます。一つのグループは家に猫が居るグループ、もう一つのグループは猫が居ないグループです。50%が猫のアレルギーがあるということで、猫のアレルギーと喘息を罹患している大人では、猫が居た場合には喘息を発症していません。猫がアレルギー源ではありません。例えば、建物の中のゴミとかダニとかが喘息の原因となっているということがあり、家自身が何か問題がある訳なのです。家に猫が居る場合の喘息の患者は猫アレルギーもあります。家に猫を飼っている場合喘息の治療のための薬を与えます。こういった患者さんのグループを家に猫が居る場合と居ない場合を比較してみます。アレルギーがある場合には、犠牲を払わなければなりません。しかし、ここでも同様な結果が出ております。

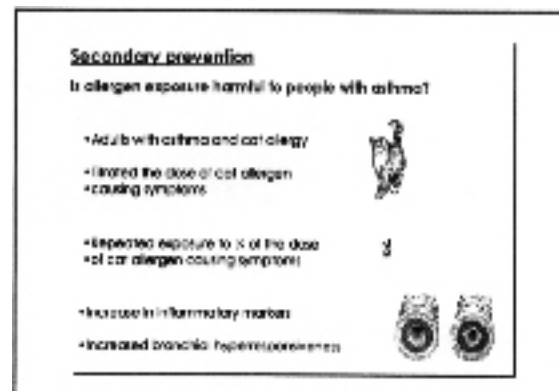


図 7

それでは、二次的な予防について医師の観点からもう少し話をすすめて行きたいと思えます。パルクビスト(Palmqvist)によって行われた研究でございます(図7)。猫アレルギーのある喘息患者の場合です。猫アレルギーと喘息の大人に対して猫アレルギーの用量を滴定致しました。そして一週間、経時的な形で滴定致しました。この場合には喘息を発症していません。喘息の症状というのは、出ておりません。しかしながら、その間繰り返しこの猫アレルギーを滴定した場合には、この炎症マーカーはこのように変わっております。また気管支過敏症であります。このように出ております。猫アレルギーの投与によってこの様に変化していることが判ります。ですから、この様

な患者さんの場合には、非特異的な刺激に対して過敏になっているということでもあります。

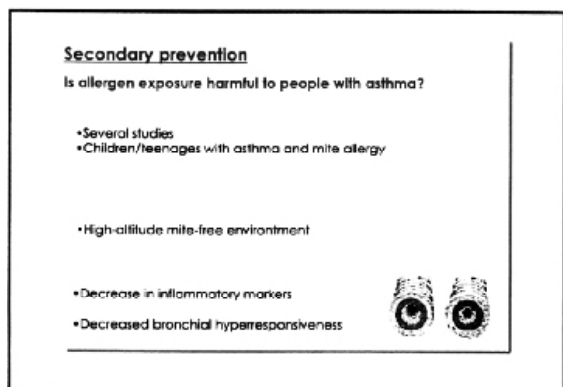


図 8

例えば、寒い時などには簡単に喘息の発作を起こしてしまうようです。

尚、同じようなスタディーが行われております(図8)。南ヨーロッパで、スタディーが行われております。ダニのアレルギーとそして喘息を持っているティーンエイジャーを対象にスタディーを行ったものでありますが、こういった子どもたちをイタリアの山の高い所に連れて行きまして、そしてダニのいない環境の中で暮らせます。数週間、または数ヶ月そこに暮らしますと、喘息の炎症マーカーが減り、そして気管支過敏症も減るという事が分りました。医師の観点から、アレルギーのことだけから言いますと、喘息のある子ども、そして動物にアレルギーがある場合には(動物のフケなどにアレルギーがある場合には)動物と接触しない方が良いでしょう。しかし、アレルギーのクリニックにおいて例外もあります。孤独状態の場合です。友人がいないということになりますと、喘息になったりあるいは犬のアレルギーになったりします。そういう場合には、犬や猫をコンパニオンアニマルとして飼う場合があります。そうすることによって、ふれあいを持つことが出来るのであります。色々な症例を色々な方法でもって治療を行うということですが、まさに上手くいく治療でもって行っていくということが必要ですが、いつもバランスの取れた、ベストな形での子どもさんへの治療が必要となってくるでしょう。成人の研究ということで先程お見せ致しましたけれども、この様な喘息の場合には、勿論薬物治療を行っていくということも必要になってくるということです。

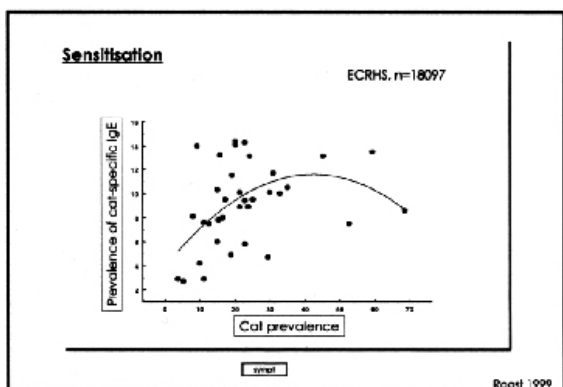


図 9

以上、二次的予防についてお話して参りました。医師の立場からいわゆるどの様に予防していけばよいかを申し上げましたけれども、さて、次ですけれども、一次的な予防ということで、乳幼児に対してはどうかということを考えていきたいと思えます。それでは、このスライドから始めていきましょう。ヨーロッパにおける研究です(図9)。ヨーロッパのコミュニティの中で、18,097人を対象に行われました。多くのヨーロッパの国々が参画されました。オーストラリアにも参画してもらいました。ここに、ご覧になれますように、X軸ですけれども、いわゆるコミュニティの中での猫の存在ということになります。猫が少なければ、猫に対するアレルギーやアレルギーになる人も少ない。猫が多ければ勿論アレルギーになる人も多いということです。これは、驚くべき結果でもないと思えます。少なくとも、この低用量の反応の中ではこの様になってきていると。しかしながらここがだんだん下がってきているということは特視するべきところですね。アレルギーに関して感受性のある人は勿論、動物に対してアレルギーになりやすいということになります。この環境においてそのようになってくる、この様なパターンがあっても珍しくない訳ですね。そしてこのサンプルの中では、全くスウェーデンではラクダに対してのアレルギーの人はいなかったのです。スウェーデンには、勿論ラクダはいませんから。ですから、アレルギーの存在があればアレルギーの人が増えるということは事実です。同じような結果が出ました。この中では、ドイツでのスタディーを行った訳です。ワーン(Wahn)によって行われました(図10)。ここでは、猫のアレルギーということで、猫に焦点をあてました。そしてハウスダストの中の猫のアレルゲンをX軸、

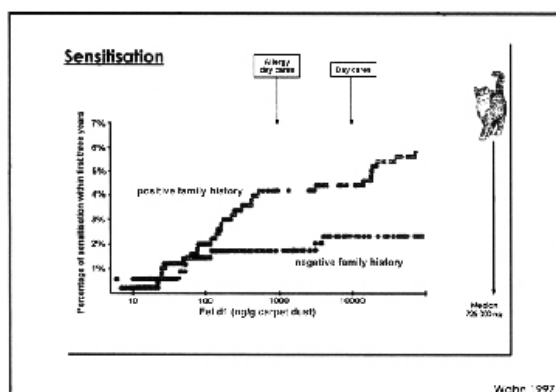


図 10

そしてY軸がアレルギーの陽性反応です。この様に見てみますと、かなり家の中のハウスダストの中の猫のアレルゲンに対して子どもたちは感作してアレルギー反応を起こしてしまうということになります。非常に直線的な用量反応カーブを描いているわけですが、しかしながらそこで陰性の家族層の方と陽性の家族とを比べてみることを行いました。ここで見てみますと、この数字は少し変わっているのです。私が申し上げたいのは、これらの同数・用量ですけれども1万といっても高いように見えますけれど、しかしながらこれは低用量なのです。実際にこの値、猫のアレルギーを実際に家で起こしてしまうような用量は、例えば子どもが家でペットを持つということになりますと、この様

なカーブは全く見当たらないのです。これぐらいの、100万位の高用量が実際ハウスダストにはあるということなのです。実際に、猫アレルギーを起こすには非常に高い用量であるということになります。ですから、実際このカーブが高用量になっていくと、どの様になっていくかということはまだ判明されていません。勿論上がっていくのか、もしくはフラット=平らな線なのか、あるいはカーブなのかということはまだ判明されてない訳であります。さらに、ここで申し上げたいと思いますけれども、この同数、用量はかなり低いものです。ディ・ケアがスウェーデンで行われていますが、大体約1万位の用量です。ここで、ご覧になりますように、かなりここは安定しているカーブと平らなカーブを描いているのが分かります。

それからアレルギーを持っている子どもに対してのディ・ケアを行うということですが、こういった子ども達は全くペットを持ってはいけなと言われてます。しかしながら、たとえ猫アレルギーをかなり高くしても、このカーブというものは大体は非常に低い用量となっている訳であります。すなわち、高用量では実際に研究がなされていないということです。それは、陽性でも陰性でもそうです。ですから、この部分を私たちは研究したかったのです。スウェーデンでもって、実際に出生から1歳児までの0歳児を対象に、ペットを持つとどの様になって行くかということを見てきたかったのです。

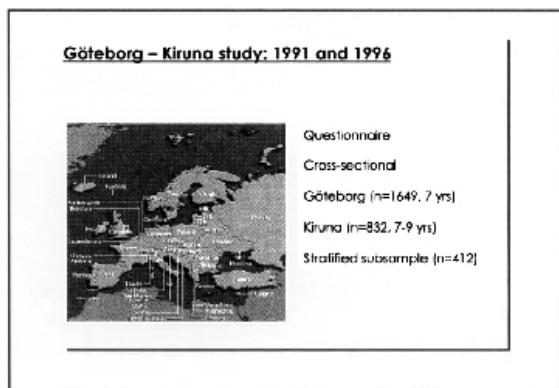


図 11

さて、1991年に大きなアンケート調査から始めました(図11)。アンケート調査は、2,500人の子ども達に対して行われました。西南部のイエーテボリから始まりまして、そしてキエナでも行いました。このサンプルの他に、412人のサブサンプルでも研究を行いました。アレルギーテストやダストや採血などを行って調べたわけでありまして。そして1996年にフォローアップの研究も行いました。1991年の研究ですけれども、7歳から8歳の子ども達のアレルギーを調べた訳です。即ち0歳児に猫や犬を飼っていた子ども達が7~8歳に成長した時どうなったかということです。幼少時に動物を飼っていた子ども達の方が飼っていなかった子ども達よりもアレルギー・例えば鼻炎や結膜炎などを発症しにくいということでした(図12)。

それから、0歳児に犬や猫を飼っていた子ども達の方が猫アレルギーに罹りにくかったということなのです。これは、7歳児と8歳児での研究です。それから勿論、これは犬

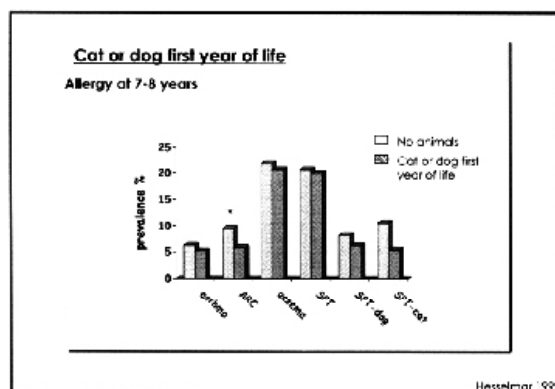


図 12

や猫を実際に飼うということが非常に有効であると、0歳児から幼少時に飼うと良いのだということが判りました。

しかしながら、ここでセレクションバイアスのことを考えなければなりません。選択的なバイアスということですが、このようなスタディーを行う時には注意しなければならない訳です。即ち、親のアレルギーの家族歴があるとか、兄弟の家族歴があるとか、単なる複合的な要因なども考えてみなければなりません。そして実際に我々としては、これらのセレクションバイアスを出来るだけ除去したかったのです。このセレクションバイアス・選択的なバイアスですけれども、例えばアレルギーの家族歴がある、父親・母親・兄弟・親戚にアレルギー歴があると、そうすると遺伝してしまうということで、この子どもはもってアレルギーになりやすいのではないかとということで、こういった家族はどちらかと言うとペットを飼いたくないということなのです。そのグループをいわゆる選択バイアスと考えているわけです。1996年にフォローアップのスタディーを行いました時に、幼少時に犬や猫を飼っているそのグループの中からこの選択バイアスのグループを外して考えた訳です。そして室内で、即ちハンティング犬ではなくて室内の犬・猫に関して、そのバイアスを持っている人達のグループの分析も行った訳です。それから、ペットを飼っていない人々は、どうしてペットを持たないかという理由についても分析しました。ペットを飼っていないほとんどの人は、その70%は色々な理由からペットを持たないということでした。家が小さすぎるから、或いは仕事で働いて外にいるから、また子ども達が沢山居すぎて世話を見るのが出来ないからという理由でした。しかし、持たない理由の3分の1がペットを持たない理由は家族にアレルギー歴があるからと答え

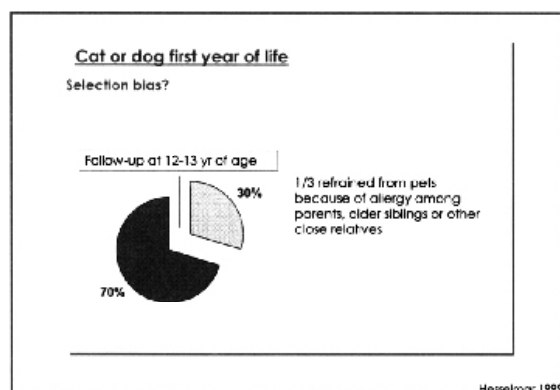


図 13



たのです ( 図 13)。親や兄弟や親戚にアレルギー歴があるからということ、これが3分の1の答えでした。さて、12歳から13歳のアレルギーを見てみますと、もう一度同じようなパターンがここでも見られます ( 図 14)。

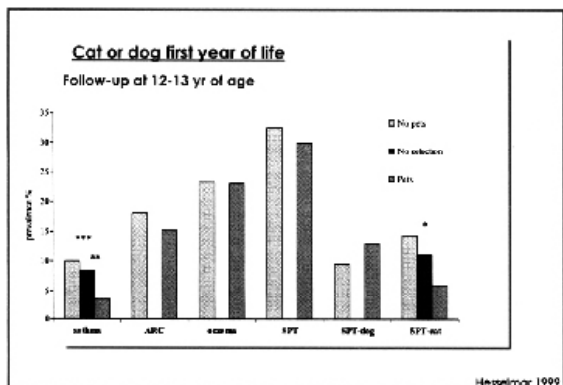


図 14

0歳児に犬や猫などペットを持っているということは、喘息に罹りにくいということだったのです。即ち、ペットを持つことによってアレルギーへの有病率が低くなっている、減少しているということになっています。同じような傾向が猫を0歳児に持つということにも表れています。即ち、猫に対するアレルギーも起こりにくいという傾向が表れてきたわけですが、同じような例が、鳥に対してのアレルギーにも表れています。それから親の病歴や複合要因も全て調整してこの様な結果を得ることが出来ました。様々な要因を考慮してもこの結果が生まれてきた訳です。実際に我々は先程お話を致しましたこれらのバイアスを持っているグループを除去しても、調査をしてみようとなった訳です。これらの全人口の25%がバイアスを持っている訳ですが、こういったバイアスを持ったグループも除去したとしても、同じような例が出て来たということが非常に顕著な例であります。この結果から致しますと、セレクションバイアスは勿論ペットを飼う上で何らかの影響はあるけれども、しかしながらこのメカニズムを見ますと、ペットを持つことによって寧ろアレルギーの発症率を少なくするという結果が出てきているという事がわかります。さらにスタディーが続けられました。全てのスタディーを全部お見せする訳ではありませんが、最近のものをお見せしたいと思います。

まずその1つは、隣接する国・ノルウェーからのスタディーです ( 表 2)。ナスタード(Nafsta/ヘッセルマー氏の同僚)

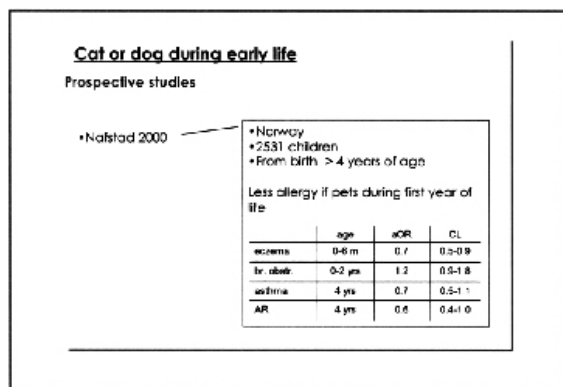


表 2

によって、2,531人の子供たちに対して行われました。これは、出生時から、0歳児から4歳児までを対象としています。

これらの子ども達が、0歳児にペットを持つことによって、アレルギーを発症しにくかった、即ち喘息や気管支狭窄そしてアレルギー鼻炎の発症が少なかったということです。統計に関しては、よく判らないですけれども、このように統計的優勢であるかということがこの数字に表されています。この気管支狭窄ですけれども、これらの子ども達は守っていかなければならないということです。即ち、気管支狭窄を持つ子ども達はやはりペットから外した方が良い訳ですが、喘息が発症するメカニズムも考慮に入れても、この様に非常に良い結果が出ているということが判ります。

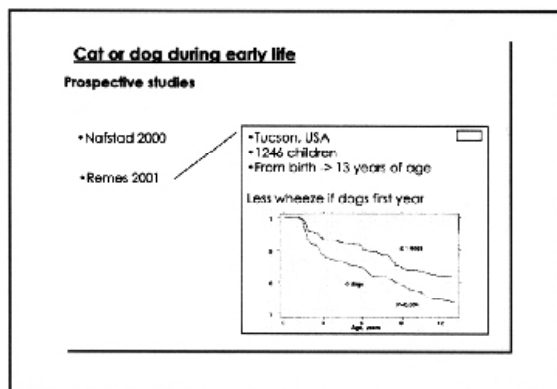


図 15

それでは次に、私の同僚であるレメス (Remes) によって行われたスタディーです ( 図 15)。ここでは、1,246人を対象に、0歳児から13歳まで行われました。ここでは、0歳児の時に犬を飼っているということで、そうすれば喘鳴(ぜいぜいという音)が少ないと判りました。すなわち、図の上の方がむしろ良いということなのですが、0歳児に犬を飼っていると犬を飼っていないグループよりも喘鳴が少なくなっていることが判りました。Y軸は上に行くほど喘鳴が少なくなっています。

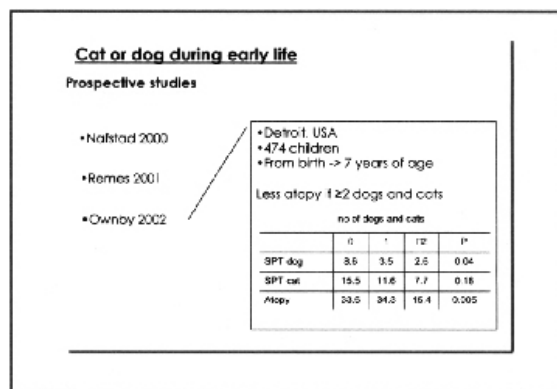


表 3

さて次も米国のもので私の同僚オービー (Ownby) が行ったものであります ( 表 3)。こちらは7歳までのコンフォートグループによって行われています。474人を対象にしております。1匹以上の犬や猫を飼った場合の方がむしろ良いという結果も出ているのです。ここに、犬や猫の数が示

されています。ここは、犬や猫などのアレルギーの陽性反応が示されています。犬が居ない場合スキンプリックテスト(SPT)で8.6%でした。1匹いるところは3.5%となっております。2匹以上になりますと2.6%になっています。この様な結果が猫に対するアレルギーでも行われています。かなり、統計的に優勢に示されています。アトピーでも同じです。ですから、この様に犬や猫を0歳児に飼っているということ、これによりましてアレルギーが後に発症しにくいという結果が出ています。

次に、メカニズムは何かということを考えなければなりません(図16)。これらの関連であります。そこでまた、選択的なバイアスを考えてみましょう。これは、大きな問題であります。これらの研究に関しても大きな問題となります。先程、様々な選択があると言いました。家族にアレルギー

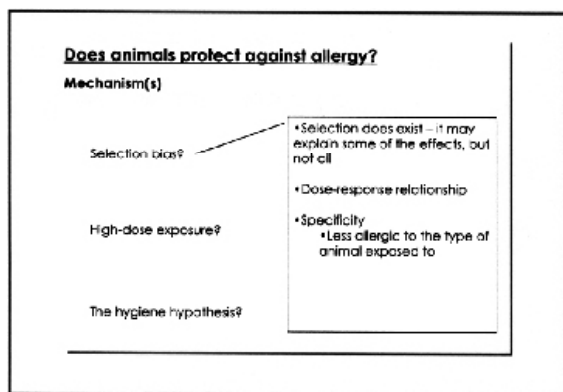


図 16

があるという場合、おそらくそういう場合はペットを飼うのはやめようとするでしょう。しかし、実際にそれらのケースは省きました。アレルギーがあるからペットを飼うのはやめようという様な人たちは省いてそして研究を行いました。約30%ではありますが、非常に大きな数です。最初のスライドでは約30%のスウェーデンの子どもがアトピー性の問題を抱えている、これは非常に大きな数であります。しかし、それにもかかわらずこの様な表が結果として出てきております。それからもう一点、選択的なバイアスとは又違うと考えられる人ということがあります。それは、用量関係というものであります。用量との比例関係がよく見られているということです。1匹よりもたくさん飼っている方がよりアレルギーが少ないということもありますが、全く持っていない、あるいは1匹だけ飼っているというよりも沢山飼っているという方が違うのです。例えば、2匹の犬は大丈夫だけれど、3匹は飼えないとか、或いは全く飼えないということで区別がついてくるのだと思います。さらに、もう一つ選択的なバイアスということを考えますと、特異性も考えてみなければなりません。犬に猫が居る場合は、猫に対してはアレルギーが無いかもしれない、しかし他のノミやダニなどにアレルギーがあるかも知れないということが判ってきています。これらの要因を考えますと、必ずしも選択的なバイアスだけが全てであるとは限らないということです。

又別に考えて見なければならぬことがあります。一体このメカニズムがどうなっているかという事です。二つのお話をしたいと思います。まず、高用量の暴露についてです。

先程お話ししましたけれど、勿論用量との比例関係がみられます。直線的な比例関係であります。しかし実際に本当に高用量に暴露された時はどうなるのか、それは判らないわけです。そこで、この研究を見て下さい。これは、プラッツミルス(Platts Mills)が行ったものです(図17)。

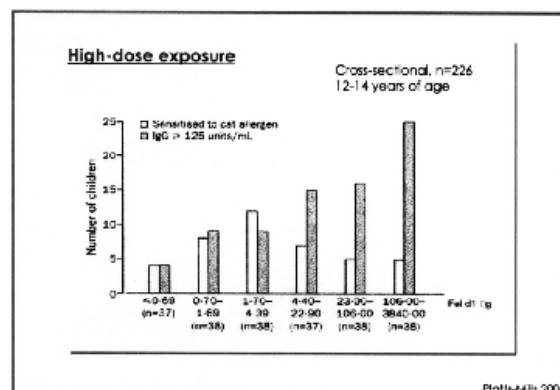


図 17

約200名の10代の子ども達を対象に行われました。このFel d1といいますハウスダストにおける猫アレルギーを測定しました。そして、感作されたかどうかということであります。この白い棒グラフは猫のアレルゲンに対して感作がどうなっているかということです。ここの猫のアレルゲンが少ないという時はアレルギーではないのです。しかしアレルギーが多い時はよりアレルギーが起り易いのではないかと思います、本当は高用量になりますと(例えば、家の中で猫を飼っている、しかし必ずしもそこで多くのアレルギーが起っているわけではない)ベル型のカーブになっております。次にIgE抗体はどうなっているのか。本当に高用量になるとIgE抗体が増えているのかということです。それが、黒い方の棒グラフです。ここで申し上げたいことは、黒い棒はベル型であります。ただ直線に延びているわけではありませんでした。

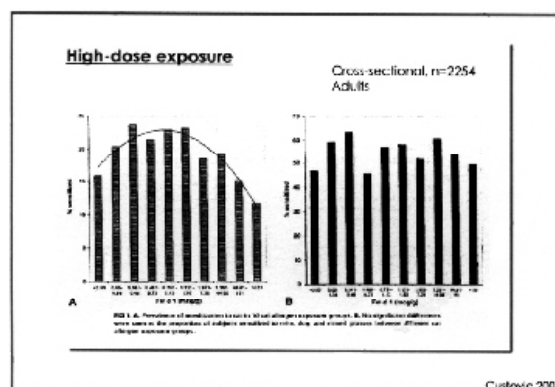


図 18

他にも、研究があります。これは、クストオービック(Custovic)であります(図18)。約2,200例の大人を対象にしました。ここでも、まずわかりますのは次のことあります。まずハウスダストにおける猫のアレルゲンを調査したものであります。その測定を行いまして、そして感作を行い、ここでも同じ様なパターンになりました。やはり容量が増えると、アレルギーも増えてきております。しかしなが

らある時点に到達すると減ってきております。ということは、非常に高用量になると猫に感作されてもアレルギーは減ってきているということです。ですからベル型になっています。非常に低用量と高用量のところでアレルギーが少ないということです。こちらの猫のアレルゲンとそして感作、様々なアレルギーに対しての結果が右の表であります。これは、ベル型ではありません。やや直線的になっております。ダニや犬や雑草などに対する感作であります。そこで、言うことは猫に対するアレルゲンで、猫によって感作されたということは、猫にのみおそらくアレルギーを防ぐことが出来るのであろうと考えられます。

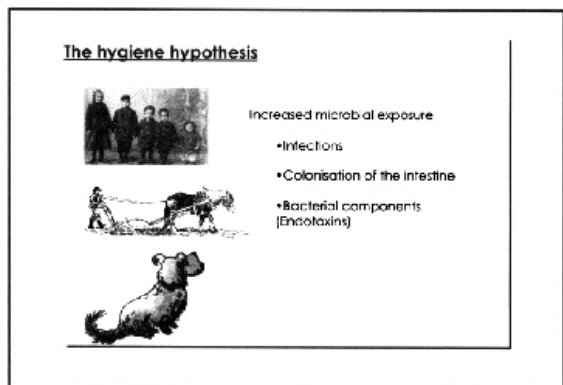


図 19

その次にお話したいことは、衛生についての仮説であります。これは最近様々なところでよく考えられてきた問題であります。デイビッド・ストウラッチャー (David Stratchar) さんが 1980 年代の後半にこの様な研究を行いました (図 19)。兄弟の多い子ども達を考えたのであります。子どもが多い方がアレルギーが少ないということがわかりました。何故なのかわかりません。男の子の方が女の子よりアレルギーが多いという話も出てきておりますが、しかし必ずしもそこでの説明は十分ではありません。しかし兄弟が多いほどアレルギーが少ないということが判ってきております。そして一人っ子であり兄弟がいないという場合、その様な場合は、生まれて 6 ヶ月ぐらいの前に既に保育所などのディ・ケアをスタートした方が良いという風に考えられてきております。即ち、沢山の兄弟がいる代わりに、ディ・ケアあるいは保育所等に早くから連れて行きますと、アレルギー的には子どもを守ってあげることが出来るというわけです。又、もう一つ衛生上の仮説、これがさらに拡大されてきました。今日では、兄弟の数ということだけではなく、例えば農場などに住んでいると良いのではないかとということあります。多くの研究が既に行われており、農場に住んでいる子ども達は、農場に住んでいない子ども達よりもアレルギーが少ないということです。ペットに暴露されている=ペットを飼っているということ、あるいは途上国の方が少ないのではないかとことです。おそらく、微生物への暴露が多い方が一番アレルギーに罹りにくいのではないかとことが、これらを総合して言えることです。色々な事がこれに対して議論されてきました。幾つかの感染が子どもを守るのか、或いはそうではないのか、或いはアレルギーに対して何か防いでくれる感染があるのではないかと、まだまだそこところはわかりません。感染だけではなく、微生物への暴露、

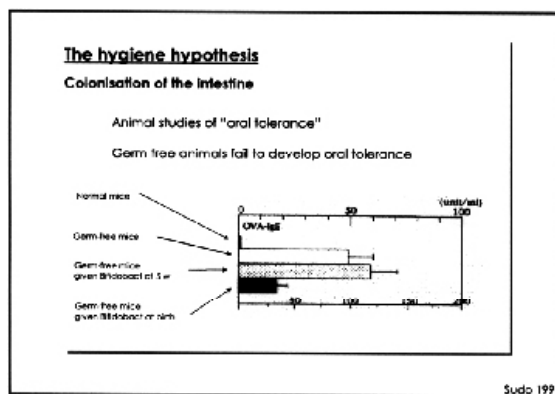


図 20

例えば腸などに対して様々な細菌のコロニーが出来る、そしてバクテリアの一部であるエンドキシンなどが何らかの良い作用をしてきてアレルギーから守ってくれるのではないかと話も出てきております。

動物の研究からわかってきていることがあります。スード (Sudo) という人が行いました (図 20)。少なくとも動物におきましては、腸に細菌があった方が良いということです。無ければ、経口耐性をつけてあげた方が良いでしょう。これは動物実験でありますけれど感作することが出来ます。例えば、抗原を注射をすることによって感作してアレルゲンが出てきます。しかし、経口で抗原を与えると経口耐性ということでアレルギー抗体が出来ない、そしてアレルギーから守れるということです。次に一番上の正常なマウスですが、そして腸に十分な細菌がいるような場合、そのような時は感作されてもアレルギーにはなりません。アレルギー抗体は出来なかったということです。しかし次に菌が無い環境でマウスを育てた場合、その様な経口耐性が出来ません。そして IgE 抗体が沢山出来てしまいます。アレルギーになってしまいます。そこで、その様な場合は、産まれたばかりの時に少しだけバクテリアを経口で与える、細菌を経口で与えると経口耐性が出来るということです。産まれてすぐのタイミングで行わなければなりません。例えばこのマウスが 5 週間位経つまで待ちますと、遅すぎるわけです。動物たちはバクテリアを腸に持って、そしてアレルギーから身を守るということです。十分早い時期にバクテリアの経口耐性・あるいはバクテリアによって身を守ることが大切です。しかし、人間においては同じことが言えません。人間では同じ様な実験がしたいということです。

さて人の腸という環境、人間におきましてはずっと後になってコロニーが出来ます。パキスタンに比べてスウェーデンやノルウェーにおきましては、腸に細菌が入ってくるのが遅いわけでありまして。ですからアレルギーを防ぐという意味でしたら、パキスタンに産まれた方が良いでしょう。しかし、パキスタンにおきましては、かなり多くの出生時の死亡などありますのでやはりアレルギーとしてはパキスタンの方が良いが、全体的な衛生・安全状態から考えれば、スウェーデンの病院、或いはノルウェーの病院で産まれた方が安心ということになります。次に腸のコロニー化 (腸にコロニーが出来るという事) が大切なポイントです。これは、フィンランドにおき

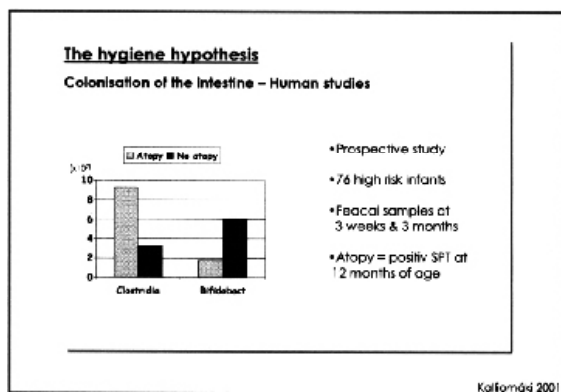


図 21

まして、カリモイキ (Kalliomaki) が行ったものです ( 図 21)。子ども達が対象です。アトピーの子ども達、そしてそうでない子ども達で、それぞれ異なった細菌が便のサンプルで見られました。実際に介入研究も行っており、これは 132 例の高いアレルギーなどのリスクのある ( 図 22)、また片親がアレルギーである子ども達に対して行われました。まず、細菌を少し与えました。

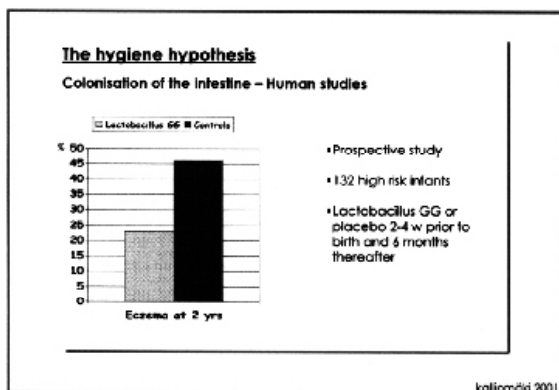


図 22

これは、ラクトバチラスでありましたが、産まれる少し前に母親に与えました。そしてそれから 6 ヶ月後に母子に与えました。ラクトバチラスを投与された子ども達は 2 歳のときに湿疹が少なかったわけであり、ラクトバチラスを与えなかった子ども達と比べて湿疹が少なかったのです。これは、おそらくラクトバチラスにより腸にコロニーが出来てそしてアレルギーを予防することが出来たのではないかと思います。これは、私が知っている限りたった一つの介入的研究です。必ずしも細菌だけではなく、細菌よりもその中の一部であるエンドトキシンなどが、守る働きをしているのかもしれない。

多くの研究で判ってきていることですが、農場に住んでいる子ども達というのは、アレルギーが起りにくいということです。少なくとも、アレルギーの症状が少ないです。そしてエンドトキシンというものが非常に高いレベルで見られてきております。おそらくエンドトキシンがアレルギーから守ってくれているのだと思います。しかしエンドトキシンに暴露される為に農場に住む必要はありません。犬を飼っていれば犬によってかなりエンドトキシンに暴露することが出来ます。飼わないより飼った方がエンドトキシンが増えるとい

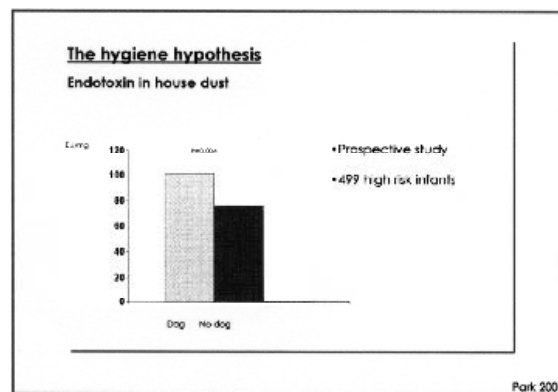


図 23

うことです ( 図 23)。それでは、アレルギーに陰性の子ども達はかなり高いレベルのエンドトキシンが家庭で見られました。アレルギーが陽性の子ども達に比べてエンドトキシンが環境に多いということがわかりました。エンドトキシンのレベルが免疫系に影響を及ぼすのではないかと思います。エンドトキシンが家庭で低ければ免疫系はよりアレルギー的に反応してしまうと思います。そしてインターフェロン  $\gamma$  などが出来にくいということです。

しかしエンドトキシンがそこそこ高ければ、免疫系がおそらくはより多くインターフェロン  $\gamma$  を作ってくれて、耐性も効いてあまりアレルギー反応を起こしにくいということです。

それでは、このスライドで私の結論としたいと思います。子どもがアレルギーに罹っている様な場合動物は飼わない方が良いと思います。勿論幾つかの例外はありますが、しかし一般的に申しましてやはりアレルギーがあるとわかっている子どもが居れば、ペットは飼わない方が良いということです。しかし幼少期にペットを飼うということは、アレルギーを起こしにくい、又少なくともアレルギーのリスクを高めないということです。又ますます次のような仮説が裏付けられています。幼少期に動物を飼うと喘息やアレルギーが予防出来るのではないかとこのような考え方が広がってきております。勿論、高い容量のアレルゲンに暴露されるということ、あるいは微生物に暴露されること、あるいは腸の中に入りコロニーが出来るとか、あるいはエンドトキシンに対して暴露されるなど、一体何が一番良いのかその様なところはまだ明確ではありません。しかし動物に対して暴露される、あるいは動物を飼うということが、それなりのメリットがあるということがわかってきております。

どうも、御静聴有り難うございました。

#### 植村

ヘッセルマー先生、どうも有り難うございました。

私も始めて知ったような事もございますし、学問的に高度な内容を含んだ先生の 10 年来のご研究、そして世界中におけるこの分野の色々な例をお示し頂けたと思います。その中で、やはりペットを飼えないような気管支狭窄の子どもさんの家ではペットを飼わない方が良いというような現実のことも紹介して頂きました。

#### 質問者

大阪の堀上と申します。学校でドッグトレーニングを学ん

でいて、私は中学生時代からアレルギーがすごくひどいのです。今の学校に行き始めてから益々ひどくなり、医者には動物は絶対に飼わない方が良いといわれました。しかし、犬が好きなのでどうしても犬を飼いたいのですが、このような情報を提供してくれる場所が日本には無く、どうしても良いのかわからなくて、本当は動物を飼いたいのです。

#### 植村

自分はペットに対するアレルギーを持っていて、でもそういう場合でもペットを飼いたいと。どうしても良いかということですが。

#### ヘッセルマー

はい、非常に難しい問題だと思います。残念な事だとは思いますが、たいいていの場合、犬は飼わない方が良いと思います。しかし色々な例外はあります。ですから、必ずしもこれに対してこれが正しくてこれが駄目だという明確な答えは無いわけです。ペットを飼いたい人がいるでしょう。それでは喘息を治して安定した状態になれば、アレルギー的に対しても大丈夫ということになれば、飼えるかも知れません。しかしそれはベストな方法ではないかも知れません。やはりアレルギーにおいては、アレルギーに対して暴露しない方が良いということがアレルギーの療法であります。しかし、例外がほしいということであれば、例えば治療していく。そしてその治療法で自分も満足している、しかし状況が不安定であればペットは飼えないです。このような問題というのは、やはり我々アレルギーの部門でもよくある問題です。ですから、一般的なアドバイスは出来ません。それぞれの個々の状態に応じて、この場合はこう、この場合はこう、このお子さんはこう、といった感じでアドバイスをしています。農場などにおきましては、子どものアレルギーは少ないです。しかし農場におきましても、子どものアレルギーはあります。そういう人達に、どのように治療をしていけばよいのか難しい時もあります。治療と動物に対する暴露のバランスの問題です。簡単に答えられる問題ではありません。ですから、それぞれの個々によって考えていかなければならないと思います。

#### 植村

これは非常に難しい問題です。お医者さんとあなたの様な色々なレベルの方が居られますから、学問の進歩に期待すると同時に、お医者さんとそれぞれの患者さんとの話し合いの中からベストな方法を示していくことだと存じます。これでヘッセルマー先生の話提供をひとまず終了させていただきます。

先生、どうも有り難うございました。

## 話題提供

## 『我が国における動物由来感染症とその対策』

中嶋 建介 厚生労働省健康局結核感染症課 課長補佐



今ご紹介に預かりました厚生労働省結核感染症課の課長補佐をしております中嶋と申します。これから1時間程度動物由来感染症と対策について説明をさせていただきます。

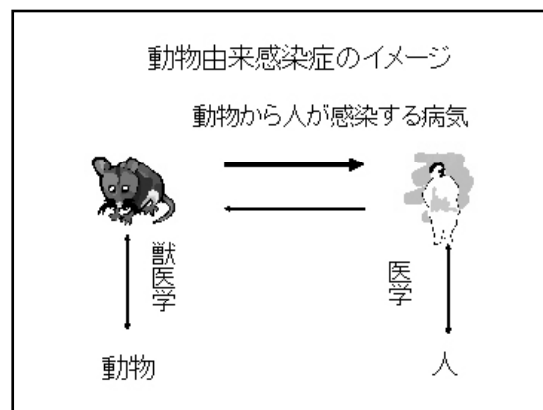
どうして結核感染症課というところに獣医の私が勤務しているかと疑問に思われる方もいらっしゃると思いますが、結核感染症課というところはインフルエンザとか肝炎とか、性病、ほとんどの感染症を担当する課です。ここで日本の感染症対策を企画・立案するようなポジションです。この課に、昨年1月厚生省が労働省と一緒に、厚生労働省というものが出来た時に獣医衛生係という新しいポストが出来ました。私は、その獣医衛生の方を担当する補佐として勤務致しております。BSEの問題とか、今は動物由来感染症でいうと、食品由来のものが多くを占めているのですが、やはり医学と獣医学が連携をしてこういった感染症の対策の課で動物由来感染症についても検討していかなければいけないということで、出来た訳でございます。私の紹介はさておきまして、今日の私の話すポイントとしては、結論から申しますと、動物由来感染症とは何でしょうか。それから、皆さんが家庭の中でそれから家庭の外でも、どうやって動物と向き合えば良いんだろうということを一緒にこの場で考えていきたいと思っております。

今日のポイント。これ、心構えなのですが、「不安がらず、でも油断なく」。あくまでも心構えて、この病気があるということは避けられない事実です。では、こういったことに対して過剰に怖がることなく、どういうふうしたら動物と触れ合っていけるのだろう。この答えは、私は、何がリスクであるのかと、何が危険であるのかという事を自分で判断出来るようになることが一番大事なポイントではないかと考えています。ここにお集まりの皆様方は、こういった動物とどうやって向き合うのだろうという意識をお持ちの方々だと思います。なかなか日本では、自分はどの様にして判断していくのかと、今非常に難しいところなのです。危険情報というものはいっぱい出回っていますし、それからテレビでも色々な情報が氾濫しています。ここで、「どういうふう自分で判断していけば良いのだろう。」それが今一番求められている事だと思います。そういったことを少しずつ国民の中に広げていくというのが、私どもの仕事ではないかと考えている次第であります。今日のポイント、心構えですが、「不安がらず、でも油断なく」ということで話を進めたいと思います。(心構えというと、こういったことを皆さんにお話すると同時に、今日わたしは東京から参りましたので、関西の皆さんへ笑いの1つぐらいは取れるかなというのが、今日の心構えで来ているので、笑って頂ける事があれば幸いです。)

それでは、動物由来感染症とは何でしょうか?それから、動物由来感染症を取り巻く世界と日本の状況はどのような

状況にあるのでしょうか。それから、動物由来感染症のリスクとは何でしょうか。特に、子ども達に対するリスクとそして最後は我々がやっていることのPRになるかもしれませんが、今現在行っている対応に絞って話をさせていただきます。

動物由来感染症という名前を初めて聞いたという方がいらっしゃるかもしれませんが、人獣共通感染症と言ったり、ズーノーシス・こういうふうな言葉と同じなのですが、これは人の健康の視点から捉え、人を主体として考えたものです。そういった言い方で、現在我々の方は動物由来感染症という言葉を使っています。悪く考えているわけではなくて、あくまでも人の健康問題ということで、使わせて頂いております。絵で説明をしますと、(図表1)動物由来感染症のイメージということで、動物から人が感染する



図表 1

病気、ただ色々な病気の中には動物だけしか感染しない病気【動物間同士でこういった病気が成立しているもの】・人との間でしか感染が成立しない病気もあります。インフルエンザをとってみても、人に移るインフルエンザは人の中だけ出回っていました。これは、鳥や豚になるのですが、動物のインフルエンザの場合、動物間の中でぐるぐる回っていました。1997年の香港のインフルエンザが人に来たという例のように、動物から人に来るといった病気もあります。こういうものを動物由来感染症といいます。逆に人から動物に移ってしまうという病気も多くあります。赤痢や結核などこの様な病気は人からサル、例えば猫などにも結核が移ると知られています。少ない例ではございますが、こういったものが動物由来感染症というものです。ちょっとこんな感じでイメージを持って頂けたらと思います。難しい言葉、世界保健機関(WHO)の定義で言いますと、脊椎動物とヒトとの間で自然に移行する全ての病気ということです。私も良くわからない位の言葉なので、先程の図で理解を頂ければと思います。ただ、ここで病気とか感染とかありますが、ウイルスもあれば、細菌もあれば、寄生虫もある。それから、動物から直接感染する病気もあれば、動物の

食品から、例えば肉や卵そういったものを介して移るもの、あと今アメリカで騒がれているウエストナイル感染症のように蚊が人を媒介する、鳥から直接人に媒介するのではなく蚊が仲立ちして入るような病気も多くございます。どういう種類があるか表でしてみました、(図表 2) ポイントとしては、ここに示したものは動物由来感染症といわれるものを網羅したもので、感染症法という法律で規定されている

人の感染症の多くが動物由来 (27/55)	
感染症の種類	感染症名
1類感染症	エボラ出血熱、マールブルク病、クリミア・コンゴ出血熱、ペスト、ラッサ熱 (5/5)
2類感染症	細菌性赤痢 (1/6)
3類感染症	腸管出血性大腸菌 (1/1)
4類感染症	アメーバ赤痢、エキノコックス症、黄熱、回帰熱、急性脳炎、Q熱、狂犬病、クラミジア肺炎(オウム病)、クリプトスポリジウム症、ジアルジア症、腎臓候性出血熱、炭疽、ツツガムシ病、デング熱、日本紅斑熱、ハンタウイルス肺症候群、Bウイルス病、ブルセラ症、発疹チフス、マラリア、ライム病 (20/33)

図表 2

ものの半分ぐらいが動物から来る病気という位置付けにされています。皆さんも意識しないで、ただ赤痢と言ったりしていますが、元々その病気も動物から来るといわれているものです。人が罹る多くの病気は、元々動物から来る病気だったと言えると思います。ここの1類・2類・3類・4類とは簡単に言いますと、怖い順から1類からなっています。例えばエボラ出血熱などは、アウトブレイクという映画でもありましたが、アフリカでサルから人に移るとい病気でして、あの辺りから我々厚生労働省の方も動物由来感染症というものに力を入れたところでもあります。今後、益々色々な病気が増えてくれば、そういった科学の進歩に応じて病気が増えてくるかと思えます。

では、その次に動物由来感染症とはどのような動物から来るのでしょうか。カテゴリということから考えれば、整理しやすいのではと考えましてペット・野生動物・都市型野生動物(例えばネズミとかカラス)・家畜・魚介類(牛・豚・羊・鳥といったもの)・展示動物(動物園にいるようなゾウ・シカ・サイなど)・実験動物(マウス・ラットの類)・学校動物(ウサギ・ニワトリ)などこういった動物群で動物由来感染症を考えていったらどうかと。原因になる動物は動物の種類に分けるとこれだけしかありません。こういったものが原因となることがあるということです。このカテゴリを又後で考えてみますので頭に記憶しておいて下さい。

次は世界と日本の動物由来感染症についてどのような状況にあるのでしょうか。概観について見てみようと思います。

1. ペットからの感染が日本では特に増えているという報告は無い。

最近テレビで色々な病気の事、特にQ熱という病気の事を、娯楽番組のように面白おかしく宣伝している形がござりますが、我々が把握している限りでは感染がどんどん増えているということはありません。動物由来感染症とは氷山の一角とも例えられましてその実態を把握することは

大変難しいことは確かです。しかしここ数年で増えているということは無いと考えています。ただ何故この様に騒がれるようになったかと背景を考えてみますと、やはりペット動物と我々飼う側の距離が近くなってきたからかなと考えられる訳です。

2.O-157などの動物性食品由来の食中毒については近年増加。

世界的にも同様の傾向。これは間違いありません。1990年代O-157が相当な猛威を振りました。例えば、アメリカのジュースや果実など、またハンバーカーなどで広がったもの、日本でも5年ぐらい前に非常に大きな問題になったことは記憶に新しいところです。動物性食品の摂取量が増えるにしたがって、こういった病気がどんどん増えている、日本だけではなく世界的にも同じ傾向にあるということです。

3. BSE・炭疽菌・テロ騒動。

昨年アメリカで死者も出ましたが、生物テロ・細菌の悪用で騒動以来、動物から来る病気があるということも、日本の国民の方々も知る機会となり健康危害に関心が集まっているということにあるようです。また新聞記者の方々と話をしていると『動物』という言葉があると新聞の売れ行きが良いということで、取り上げさせて欲しいという声も、無責任に聞こえてきます。

この様なことを考えてみますと、何故動物由来感染症は本当に問題になってきたのかと、この人間社会の変化と人間の行動の多様化、今まで話してきた事とだぶのですが、例えば膨大な物と人の移動、日本の食料自給率が相当低下している、例えば四割を切ってしまったことなど、皆さん新聞でご存知かもしれませんが、非常に大量な食品、それから後で話をしますが動物がどんどん日本だけではなく世界各国間を巡っています。人の方も簡単に今まで熱帯と言われているような所にも、例えばサバイバルレースのような形で参加をしてしまう事が出来る様になってしまったことです。それから自然環境・住環境の変化。例えば温度環境が変化すれば蚊の生息域は広がるわけですし、住環境も今まで一戸建てで暮らしていた所がマンションになってしまえば、もしかしてそこで何らかの変化があるかも知れません。それから生活様式の変化、今まで家で食べていたものを外食に頼るようになる、これも大きな変化ではないでしょうか。人口の都市集中、例えば日本の国土は限られていますから住める平野部分に人口が集中してしまう。これは日本だけではなく世界各地で起こっている事でもあります。それから高齢人口の変化、1週間ぐらい前の新聞では、日本の65歳以上のお年寄りの人の比率が20%以上になってしまったこと、数年後には25%になり4人に1人がお年寄りになってしまうという様な非常な社会の変化がおきています。これは決して日本だけの事ではなくて、特にここについては日本はトップについていますが、こういった変化が起きているということです。

先程の、どんどんと人が今まで入らなかった自然環境の中に入ることによって、又科学技術の進歩に従って、こういった今まで知らなかった様な病気が出てきます。その多くが新興・再興感染症と言いますが、動物由来のもので

新興感染症の出現	
1990年代	ニパウイルス、インフルエンザA型H5N1、オーストラリア・バット・リッサウイルス、ヘンドラウイルス、ハンタウイルス(ジンノンブレウイルス)
1980年代	病原性大腸菌O157、ライム・ボレリア
1970年代	カンピロバクター・ジェジュニ、エボラウイルス
1960年代	ラッサウイルス、マールブルクウイルス

図表 3

あります。(図表 3) 先程例にとりましたエボラ出血熱などの新興感染症は、ご存じないかと思いますが、げっ歯類から南米・北米で多くの死者を出しているハンタウイルス肺症候群、数年前マレーシアでコウモリが持っているウイルスが豚に移ってそのウイルスが村を全滅させてしまったというニパウイルス感染症などが新興感染症と言われていて、従来知られていなかった感染症です。感染力が強く、重症化し、治療法が無いものも確かに世界にはあるということです。この様なことから、動物由来感染症は注目をされている一因ではないかと考えるところであります。今のところをまとめてみますと、古くはラッサ熱やマールブルグ病とかそしてエボラなどこういった年代を追ってどんどん出てきています。1980年代になってO-157など出てきています。1990年代には先程説明をしたような病気が出てきています。この様な傾向は止むことは無く、歴史と共にどんどんと分かってくるところであります。

今まで見てきた世界の状況から日本の状況を見てみますと、海外旅行者の増加、誰でもどこにでも簡単に行けるようになりました。日本円とドルの関係が大きく変わってきてから、1980年代から著しいところなのですが、同じ様に農産物輸入の自由化ということで色々入ってきています。この様なことと歩調を合わせるように、少し硬い言い方なのですが、ノーチェックの検査をされていない、管理の届いていない動物が大量に輸入をされている。家畜に関しては管理されていますが、されていない動物がどんどん来ているということです。そういったものの中には、エキゾチックアニマル、野生の輸入の動物が入りそれがペットとして飼われている。アライグマもおそらくそういった類になるでしょう。アライグマ・ラスカルのテレビの番組で1980年代から毎年相当な数が輸入されています。幸いなことに、アライグマは狂犬病のチェックを義務付けましたので、昨年は輸入は0となりました。その様なペット化も進んできています。

それから、ペットの飼育形態の変化です。昔はペットは、私も3匹の犬を飼った時そうだったのですが、屋外に小屋に入れて飼っていました。それが今はマンションで飼われるようになってきました。そういった形態の変化があるのではないかと。

また、これは私の意見も含まれてきますが、飼い主の感

染症に対する認識不足です。自分が飼っている動物なのに、自分の動物の事をあまり感染症の観点からは見て頂いていないのではないかと。可愛ければ良いというだけでなく、自分のパートナーの例えば恋人でも奥さんでも良いのですが、病気になるれば、具合が悪ければ非常に気にしますが、それは日頃の管理がとても大事ではないかと。動物にもそういう意識を持ってもらえたらどうかなと思っております。それから危険情報の氾濫とゼロリスクの追求です。これもゼロリスクが無いという事を理解頂くことは難しいところですが、危険情報が出れば、行政のほうに管理(危険情報が出ても、リスクゼロ。)を寄せられるのですが、リスクというのは世界にもあるものです。その様なことを今の世の中少し忘れられているところがあるのかと、わが国の事情ということでお話させて頂きました。

それを世界と日本の比較ということに話していきますと、動物由来感染症は世界に比べて日本はどうなんだろうということで、種類としてはWHOで10年前に出たデータを見てみますと、大体150種類以上あります。日本はどうだろう。日本はぐっと少なくても数十種類しかありません。何故そんなに日本は少ないのでしょうか。色々と学者の先生が考えた理由としてこの3つがあります。

①地理的要因。島国で比較的温暖な気候である。  
 ②家畜衛生対策の徹底。農林水産省を擁護するわけではありませんが、非常に日本の家畜衛生対策は行き届いたものです。例えば3年前に宮崎で口蹄疫と言う非常に怖くイギリスで昨年大変な問題になりましたけれど、そういった病気が日本にも入りました。しかしたいした被害も無くそれを瞬間に封じ込めてしまいました。これは大変な能力だと私は感じます。一頭を見つけた獣医さん、大変な風圧にさらされたらしいですが、それでも封じ込めることが出来ました。

狂犬病についても、例えば江戸時代の初期の頃から戦後まで長らくに渡って、日本でも猛威を振った病気ですが、昭和26年に狂犬病予防法という法律が出来て、6年後には根絶。日本から1匹も狂犬病の犬が出ないようにしてしまいました。こういった過去の獣医師達の努力というものが非常に大きいのではないのでしょうか。だからこの様な病気も日本ではありません。

③それから皆さん方の衛生観念が非常に強いのではないかと。手を洗うとか、体を清めるなど、そういったところで衛生観念が非常に強い国民性があるのではないかと推察されています。あと日本の状況の参考までに、大体少しおかしくて困っているのですが、厚生省の統計では600万頭の登録が、ペットフード工業会では1,000万頭で、登録されていない数を思えば大体この様な数だろうということです。大体これが日本のペットのベースの数です。

先程言いました日本の状況の懸念することですが、動物輸入状況です。(図表4次ページ)はしっかり申しまして昨年までこの輸入統計というものは、どこから何が何匹入ってきたか全くわからない状況でした。これだと対策を考える糸口も見つかりません。やはり何が危ないのか。そして何が何匹来ているのか。状況が分かって初めて対策が

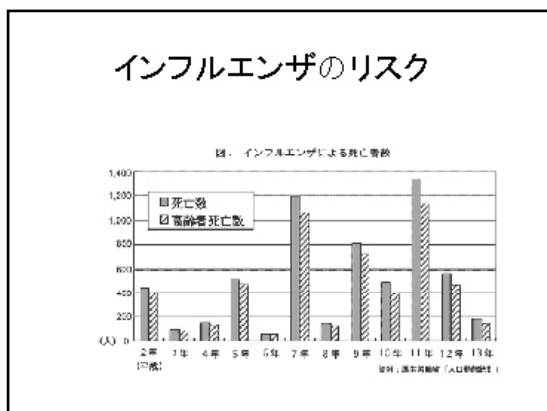


動物輸入状況 (2001年より輸入統計開始)	
ほ乳類	118万9053頭 (家畜除く)
サル	6941頭
犬	1万2097頭
フェレット	3万1583頭
ハムスター	100万5488頭
プレーリードッグ	1万3407頭
リス	6万7066頭
その他のげっ歯類	5万1706頭

図表 4

取れるのではないかと。ですから昨年から統計をきちんと取れるようにしました。表で見ても見ますと、昨年はまだ哺乳類しか調べていないのですが、家畜を除く種類として118万頭、大体120万頭が来ているということです。その殆どがハムスターで100万頭位です。その他にも、この夏問題になったプレーリードッグ、これはミニマムな数字なのですが13,407頭。それから野生のリスも来ています。フェレットも含まれます。この中でハムスターなどはもしかすると繁殖を経たものと思われていますが、これだけのものが、毎年最低は輸入されています。種類としてはもっと沢山あるのですが、表の都合の関係でこれだけにしました。その他に鳥も来ています。カメも、沢山の数が輸入されています。今年の1月からカメと鳥の統計を取るように致しました。なかなか苦しくて、我々の方が必要性を申し立てて、昔の大蔵省の財務省の税関の方へ統計を取ってもらうように要望して、半年ぐらいの折衝を経てコードとして入れてもらうのですが、この様なことを始めたことでだんだんと日本への動物輸入状況が分かるようになってきています。

次に、動物由来感染症とは何でしょう。世界、それから日本の動物由来感染症を取り巻くベースを皆さんにお伝えしなければいけません。この辺りから私の今日の本題なのですが、リスクです。動物由来感染症のリスクとはどの様に考えたらよいのでしょうか。リスクと言うと皆さんお分かりだと



図表 5

と思いますが、健康危害です。どの位の危険性があるのかという事をリスクと言っておりますが、そのリスクをどの様に考えたらよいかと私は考えまして、比較をしようかとまず考えまして、他の分野との相対的比較です。動物由来感染

症のリスクを考えるのに他の分野と比較してみようかと思いましたが。例えば、インフルエンザ。インフルエンザとは感染症ですよ。インフルエンザで毎年何人位の方が亡くなっているかはわかりますでしょうか。(図表 5)一つ進めて、これはインフルエンザの死亡者数なのですが平成11年には1,400人近

い人がインフルエンザで亡くなっています。これは人口動態統計といわれ、我々の役所の数字を出してみました、多くが60歳以上のお年寄りの方が亡くなっています。これも氷山の一角かもしれませんが、毎年分かっているだけで相当な数の人が亡くなっています。ここでぐっと減っておりますが、本当にこれだけ減って亡くなった方が200人だけだったかというのは、感染症はなかなかそんなに分かるものではないのですが、これぐらいの危険性・リスクがある病気だと、恐ろしい病気だと考えております。

また次にタバコの危険性について比較してみようと思います。私の友人のお医者さんが、タバコの問題について厚生省で担当しておりまして、タバコで大体何人位の日本人が亡くなっているかということに話が及んだ時に、驚く数字をその方が言われてびっくりしたのですが、タバコで毎年亡くなっている方は何人位だと考えますでしょうか。100人とか1千人とか1万人とかいう数字ではなくて、10万人位の人がタバコの喫煙で亡くなっているということが、厚生省が主催している検討会の報告書でまとまっています。様々な死亡原因の11%位をタバコによる死亡があるとされています。スウェーデンの数も比較で占めさせていただきますと、8%とされています。米国や英国は21%位とされています。日本では交通事故による死亡者が全体の1.8%位占めていますが、それよりも相当高いところにタバコの喫煙で亡くなっているといえます。そういったところで、相対的なリスクというのは世の中にあるわけです。インフルエンザが流行っていても、映画館に行ったりどこかに遊びに行ったりとか自分の都合でしてしまえば、自分はタバコは吸いませんが友達がタバコを吸っていても、居酒屋で3時間でも4時間でも一緒に煙草を吸う友達といて、私も受動喫煙をしているということで、あまりリスクを毎日の生活の中で意識していないのですが、動物由来感染症分野でどうやってリスクを見ていこうかなということでもちょっと考えたのですが、さっきの動物のカテゴリーごとにリスクをみたらどうか。ペット、野生動物、動物園の動物、家畜、そんな風にしてリスクの大きさを今度はこの中で比較したらいいんじゃないかと。

ペットの動物の特徴からリスクを見てみますと、人と非常に緊密な接触があると、家族と同化する直接接触で感染する疾病に要注意と書いてある。こういう密接な繋がりがあるので、そういったところがリスクになるんじゃないかと言われて考えられております。ではそういった密接な関係のある動物と、例えば本来ペットと呼ばれている犬とか猫とか小鳥、こういったものについては、例えば犬なんかについていえば有史以前から人間との共生の歴史がありますね。共に生きてきた歴史があって、そのリスクっていうのはもう、知られている訳です。もういろんな新しい寄生虫や病気が見つかってきていますけれどもでも、それでもこれだけ長い

間人間と共に生きてきた訳ですから、リスクの程度というのも皆分かっている訳ですよね。ゼロじゃないんですけどもリスクは小さい、じゃあエキゾチックアニマルっていう外国から輸入される野生動物のリスクはどうなのか、はっきり言って未知、分からない事だらけです。どこまでリスクがあるのかも私はここで明確に言うことが出来ない。言ってしまうと明確に言うことができないのであれば、リスクは大きいだろうと。実際外国で色々な野生動物から感染があるわけですから、リスクが大きいというふうには考えざるべきではないかと考えます。そういったペット、家族と同化するようなものについて今日は我々は考えるところだと思いますので、そこを頭の中に入れて頂けないかなと思っています。

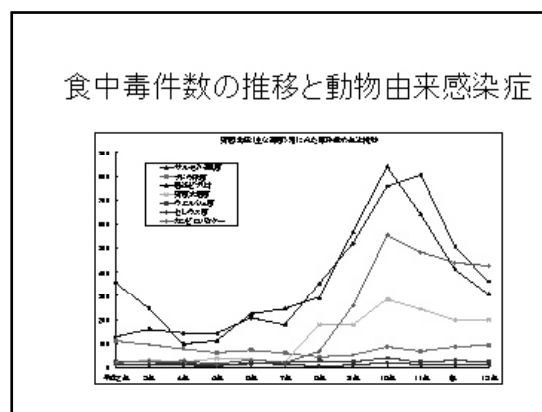
ちなみに私、幼稚園の頃から犬を飼いはじめまして、小学校二年の時に父親が1匹の犬を近くの獣医師さんから貰ってきて、「お前がこの犬をずっと面倒見なさい。餌を毎日あげて、毎日散歩に行きなさい。」で、私は高校を卒業するまで毎日それを続けまして、高校を卒業して獣医の大学に入る時にその犬が死んでしまったんですけども、それまでずっと密接な関係がありまして、先程先生がおっしゃったように何か悩み事があると犬と一緒にいるなんていうことも自分でも体験をしています。自分の個人的なことなんですけれども自分の父親が自分にやってくれたことの非常に大きな部分が「お前はこの犬の面倒を見る」といった仕事を与えてくれたことかなと考えております。ただ、父親はそういうことを私に言うてくれたんですけども、私の母親はお前は一人で生きられるように食事を自分で作れるようにしろ、洗濯を自分で出来るようにしろと、そういう仕事を私に与えてくれまして、もしかすると私の今の家族の中での生活で、私がそれで非常に被害を被っているんじゃないかと何で私が日曜日に朝から食事を作らなくちゃいけないんだらうかとちょっと話があれなんですけれども、犬というものととの関係が私非常に一杯あるんです。

ちょっとこれは犬じゃなくて今年の夏話題になったプレーリードッグの野兎病というやつなんですけれども、結論から言いますと幸いにもアメリカから約一ヶ月、私ともう一人の係長で調査をした結果、とりあえずアメリカで今年の夏問題となったプレーリードッグからは野兎病が疑われるものはなかった。他の国では野兎病の発生があったようですが、なかったと。プレーリードッグが野兎病のB型という弱いタイプの菌に感染して、アメリカで相当数死んだりとか、それから輸出された国チェコスロバキアらしいですけども死んだりとかしていますけれども日本ではそういったものはなかった。ただそういった事態っていうのは幸運だけだったのじゃないかと。やはりそのプレーリードッグについては野兎病のAというものも（これはもっと強いものですけども）あるし、それからベストというような本当に怖いような病気も媒介するということに言われてまして、昨年のデータからプレーリードッグが相当1万5千匹位入っているというのが分かりましたので、私共、今、リスク評価のための研究班というのを組織しまして今後どういった規制をかけていったらいいかというのを大急ぎで作っているところです。ちょっとそんなようなものが実際に問題となっていることを紹

介しました。

野生動物の特徴としてみれば例えば、キツネリスザル、本来は人と触れ合わない動物、本当に地域の風土病的なもので人に感染症が起きている。それから、猟師さん、ウサギとか獲る方に野兎病みたいなものが今まで発生していた。それが、ペットで野生のものを家庭に持ち込むので、いきなりそこで家の中に野性が入るので、そこで、大きなリスクがあるんじゃないかなということを、今、そのリスクの大きさを各動物各輸出地域に応じて検討を進めています。都市型野生動物というのがあります。例えばネズミとかカラス、人と生活圏が重なっている食べ物とか住む所は時に人に依存している。集団の生息密度が高くて都市型、人と同じですよね。動物の感染症、それから人の感染症をどんどん広げるリスクがある。

それから、家畜、魚介類の特徴として食べ物で利用されて食品由来の感染症の原因となる可能性もある。でもこれについては家畜衛生とか食品衛生で管理されている。ただ、動物の飼育形態、大量に一箇所で飼うとか流通の変化、国際的な流通がどんどん進んでいくとかして、一つの施設への問題が世界的にも起きてしまう。例えばベルギーの一つの農場の鳥に与えた餌に悪い重金属などが入っていたためにその鶏が世界に輸出されて世界で問題を起したというようなことが4年位前に起こりました。そういったものが起こり易くなっているグローバル化の影響かも知れないんですけども、食中毒と動物由来症という関係でどういった位のカーブかなと思ってみたところ、(図表6)例えばこういったサルモネラとか、それからカンピロバクターとか、そういった動物由来のものが食中毒がドーンと増えて、ぐっとこう頑張って落としたんですけどもぐっとこう増えた。従来は黄色ブドウ球菌とかオニギリとかそういったものだったんですけどもそれに代わって動物由来の食品



図表 6

の原因とするものが増えているというような状況もあります。

それから、展示動物。展示動物というのは動物園や水族館の動物なんですけれども人と人の接触は限られていますし、健康管理はある程度行なわれている。ただ、ふれあい動物園というところがやはりございまして、そういった動物園では十分な対策を立てているとは思いますが、やはり動物に触れた後には手を洗ったりとか、そういった基礎的なところは大事じゃないかなということで、この管理なんかに関するガイドラインを今やっばり研究班を立ち上

げてまとめているところです。去年、二つ大きな動物園を舞台にした人への感染症発生がございまして、一つは川崎の動物園のヘラジカが原因となって(図表7)一時はブ

### シベリアヘラジカ

- ・ 偶蹄目シカ科
- ・ 体高170~235cm
- ・ 体重300~800kg
- ・ 食べ物: ヤナギ、水草
- ・ 住まい: 森林、水辺
- ・ 当該ヘラジカは、国内で生まれたもの



図表 7

ルセラとかQ熱というのが原因として言われてたんですけども結局はオウム病という病気で飼育係の方5人が病気になるということが分かりました。それから、鳥根県の鳥の大きな展示施設で20名位のオウム病の集団発生があったのも、ふれあいという形態の展示の仕方でも感染があったということのようです。しかも全て60歳以上の方が患者さんでした。

学校動物の特徴として、今言ったような展示動物それからペットとの中間的な性格にある。ただ、動物の種類は限定的でウサギとかニワトリというものにある程度限られている。抵抗力が弱い人達がいれば、接触の機会がある時には健康管理に留意が必要といわれています。アニマルセラピーみたいな形で米国でもそういったいろんな施設で動物を飼うということが進んでいますけれども、やっぱり免疫不全の方とかですね、お年寄りの老人ホームみたいな所での飼育というのは一定のガイドラインみたいなものが示されているところです。

今まで動物ごとのリスクを見てきた訳ですけども、国内に限定してみると、管理されている動物これは程度には差がありますけれども、家畜とか展示動物とか学校動物とか本来のペット、こういったものについてはリスクは小さいんじゃないかと考えていいんじゃないかと。これに反して管理されていない動物、輸入されるような野生動物についてはこれはリスクが大きいと考えていいんじゃないかと思えます。で、リスクの高い動物由来感染症の定義としてどんなことを定義したらいいかなということ考えてみますと、特に公衆衛生上ひとりひとりの病気というよりも社会の病気としての怖さというので見てみますと人から人に感染するような病気、インフルエンザとか、ペストとか、出血熱こういったものは、ばつと広がってしまいますので、非常に対策をきちり立てる必要があるんじゃないかと。それから治療法がない病気、狂犬病等も日本では忘れられてしまっている部分があるんですけども狂犬病というのは御承知のように1回症状が出てしまうともう死以外の道はないと言われていまして、そういったものに対しても対策は必要だろうと。それから治療法が無いという他に重症化する疾病、ハンタウイルス肺症候群みたいなものですね、治療法がよく

分からなくて対症療法しかないもの、こういった重症化する疾病、感染力が強いものなんか怖い病気と考えられます。公衆衛生上ですけれども、それからよく分かっていない未知の疾病というのも対応が取れないだけにこういったものに対しては公衆衛生上のリスクが高いというふうな考えて対策をとっていくということを我々考えています。

では、個人レベルではどうだろうと。これは程度は不明だというのは一人一人のレベルの話なので考えてみると、例えば免疫が低下しているというのはやっぱりリスクが高い人ではないか。職業的に動物との接触が多い人さっき言いましたような、狩猟、狩りをする人とか、畜産業に従事する人やはりそういう人はリスクが高い人だと。海外旅行で流行地域に行く人、例えば日本は狂犬病がないですけども、タイとかフィリピンとか多くの国が狂犬病の流行地ですので、そういったところで犬に咬まれた場合にはもう間違いなく狂犬病の治療をしなくちゃいけない。そういったところに行く人はどれだけそういうことを知っているのか、そういう人はどれだけ危ないかというようなことを分かっていたら、リスクがないんでしょうけれども、分かっているといリスクは高いんじゃないかと。それから節度を越えて動物と接触するような人。一緒に皿でご飯食べちゃう人もいるかも知れないんですけども、やっぱり動物の口っていうのは犬はどこでも舐めちゃってお尻も舐めるし足の裏も舐めるしそういったものが口にある訳ですから、そういうことも考えて節度あるものが必要じゃないかな、越えちゃうとちょっとリスク高くなっちゃうよと。あと、輸入動物。アレルギーこれは感染症じゃないので私の分野ではないんですけども、こんなものが個人レベルのリスクかなと。

それで、家庭等での子どものリスクへの対応についてということで考えてみますと、今日私最初に冒頭で言いましたように何がリスクであるかを知って自分で判断できることが大切じゃないかなと。これまで、話して来たことからすると「あれは危ないのかしら」というのがもっと分かれば、判断出来るということになるんじゃないかなと思うんですけども、それには基礎知識、科学情報、病気のこととか行政情報、行政が何をしているのかというようなことを知って頂いて、「あ。そうしたら慌てなくて良いんだわ」、と思っ頂けるように我々は必要な情報を提供しなくちゃいけないんじゃないか、情報提供というのは非常に重要というふうな考えているところです。

個人レベルの感染症対策として考えればやっぱり基本的につきてしまう訳で、日常生活での注意とさっき言った過剰なふれあいは避けるとか、手洗いか糞便処理とか動物の身の回りを清潔にということが基本的なものになっていく訳で、特にペットについては本来のペットについてはそれで十分じゃないかと私は考えています。それから、輸入エキゾチックアニマルの飼育は避けるといったこととか基礎的なところで対応がとれるんじゃないかなと思います。犬では登録と予防注射というのがあってはいるんですけども、そんなのもう必要ないんじゃないかと思われる方もいらっしゃるかも知れないんですけども、一言言わせて頂きますと、やっぱり、外国では非常に多く出ている病気で、万が一、一匹でも一匹の犬でも狂犬病に日本であれば新

間に狂犬病という字が踊っちゃうわけで、なかなか「狂う」という字がある病気というのは今、狂牛病なくなっちゃいましたから狂犬病しか残っていませんのでパニックになると思います。パニックになった時に多分一番心配されるのは自分で自分の犬に注射を打っていない方じゃないかなと。その時にパニックにならないようにするためにもやっぱりそれは一番何が大事かという自分で出来ることを自分でしておくということではないかなと考えています。

後、最近話題のQ熱についてちょっとどいんですけれど説明させていただきますと、(図表8)どんなリスクがあるのか。

### 最近話題のQ熱について

どんなリスク？

- ・人から人に感染せず、重症化はまれ
- ・世界中で見られる病気、先進国で毎年数百例発生(日本では毎年20名~40名程度感染)
- ・家畜(牛、羊等)からの感染多く、多くは職業病
- ・最近ではペットからの感染の報告もある
- ・不顕性感染で終わることも多く、急性Q熱の場合多くが2週間程度で自然治癒。まれに急性から慢性Q熱に移行。抗生物質が有効。

リスク回避は？

- ・一般家庭では基本的な対応が重要

図表 8

人から人に感染しない、重症化は本当に稀です。それから、世界中で見られる病気、先進国では毎年数百例発生、一番多いのはオーストラリアで700例とかイタリアも900例位。日本では毎年20名から40名程度が感染している。家畜からの感染が多くてですね。多くは職業病、外国では、職業病という認識で通っています。最近もシャモニーの方で流行があったというふうにProMEDというところで出ました。最近ではペットからの感染の報告もあるということで、これが全てじゃない、報告もあるということです。猫とか犬から罹ったという報告もこれはあります。ただ、罹ったとしても症状が出ないで終わっちゃうことが多くて、急性Q熱というものの場合には2週間程度で普通は治っちゃうんですね。何もしなくても治っちゃう。ただ稀に急性から慢性に移行することがあると、これは、外国では患者さんが多いですからそういった慢性の人も中にはいらっしゃる、で、合併症があれば予後があんまり良くない場合もあると。ただ、抗生物質が有効で効くということです。では、日本で犬を飼っている猫を飼っている方のリスク回避はさっき言ったような基本的な対応で十分です。あの、「怖い怖い怖い」という様な形で、テレビで報道された度にですね、私ともう一人の係長の2本の電話が朝から鳴りつばなしになっちゃうんです。そんなに怖がらなくて結構ということを1日十何人に説明をして自分は一体何をしているんだろうというふうに思っちゃうんですけれども、その位の病気だということで認識して下さい。先程言いましたようなインフルエンザとかそういったことの方が、リスクとしてはなかなか比較は出来ないんですけれども高い病気というふうに考えられます。

それからちょっと我々がやっているところで、動物とペットの犬と違ったところの категория が今後出てきますので、ご

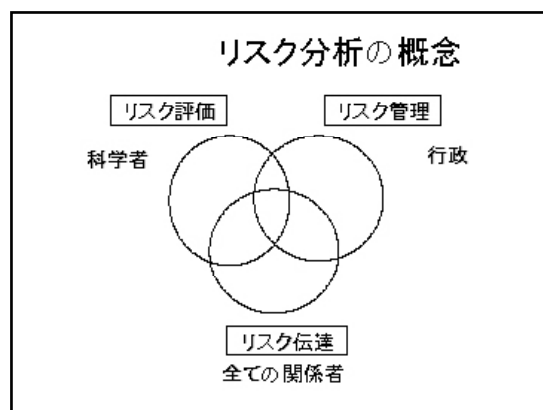
紹介したいです。身体障害者補助犬に関する法律が今年のあと1週間位したら施行されます。(図表9)補助犬と

### 「身体障害者補助犬法」と 動物由来感染症

- ・今年10月1日より施行
- ・補助犬: ①盲導犬 ②介助犬 ③聴導犬
- ・目的: 障害者の社会参加推進
- ・補助犬に特別のステータスを付与  
交通機関、レストラン、ホテル等に同伴可能
- ・条件: ①優秀な犬を育てる基準  
②公衆衛生対策

図表 9

というのは盲導犬、介助犬、聴導犬この三種類です。何でこういう法律が出来たかという障害者の社会参加を推進するというのが目的です。で、どういふことをこの法律でするかという補助犬に特別のステータスを与えると。ステータスって何でしょうか。交通機関、レストラン、ホテルに同伴可能、拒むということは基本的に出来ない、連れて行きたい所に連れて行けるようになるということがこの法律でうたわれる訳です。ただ、どんな犬もという訳にはいきませんので、条件として優秀な犬でなくてはいけない、それから、公衆衛生上の対策もなくてはいけない、というのが条件になっている訳です。ここのところが今日私の話に関係してくるところなんですけれども、公衆衛生の対策はどういう風にしましょうと、また、これも研究によりまして補助犬の衛生確保のための健康管理ガイドラインというものを作りました。ポイントとして、これもまったく基本的なところなんですけれども使用者が身体障害者の方ですね。行う犬の毎日の健康管理、これをきっちり記録をする。それから、獣医師が定期的に健康診断をして必要な治療とか予防注射をして健康管理をしていくと。専門家の目ですね。そして、この使用者と獣医師の衛生管理の記録をきっちり残していく。この3つがポイントで衛生管理というのがされているというふうに考えて特別なステータスを与える、つまり、衛生管理をきっちり普通の犬よりもしているから入りたい人はそれを連れて例えばレストランにも行けるようにもする。受け入れる側は半ば義務として受け入れなく




図表 10

てはならない、ということでこの法律は作られています。私の獣医衛生係の方もこの管理ガイドラインを作るのに、この法律に関係した訳です。

今日の話の最後になるんですけれどもリスクの分析の概念ということで、考えてみまして、(図表 10)我々行政の役割としては、わかったリスクをどうやってコントロールしていきましょうかと。科学者さん、専門家達のところでは本当にそのリスクが高いのか、低いのか、大きいのか、小さいのかを考えて頂く。そこで、わかったものを国民の方、それから例えば輸入業者の方とか動物を取り扱う人達一杯いますけれどもそういった方にもリスクを伝えて、これだったら、あなたどういう選択をしますかと、先程の補助犬についてもそうですけれども障害者の方が社会に参加できるのがいいのか、それとも犬はやっぱりどんなに管理されているといてもリスクはゼロじゃないでしょうと、そのリスクがゼロじゃないということと障害者の方が社会参加できるとベネフィットというんですか、得、リスク&ベネフィットというのを天秤にかけて判断して頂くことをやって頂くのがリスク伝達ということだと思います。この3つが揃ってリスクというものに対して我々が国全体として対応出来るのではないかなと考えているところです。こんなことを考えて我々行政に取り組んでおります。そういったところからすると、我々どうやって皆さんにリスクのことを伝えていったらいいのかというのをこれからますます考えていかなきゃいかなくてはいけない時代になるのではないかなと。それから皆様方におかれましてはそのリスクを踏まえて自分はどういう風に判断したらよいかということをよく検討して頂く時

**動物由来感染症対策事業**  
(その1: 情報提供体制の整備)

ホームページ「動物由来感染症を知っていますか？」を開設(昨年8月)




対象: 一般の人(専門家向けページも含む)  
内容: 感染症の紹介、ペットを飼う場合の注意

図表 11

**動物由来感染症対策事業**  
(その1: 情報提供体制の整備)

- ・ハンドブック「動物由来感染症」を作成(本年6月)



対象: 一般の人  
内容: 感染症の紹介、ペットを飼う場合の注意

図表 12

代になってくるんじゃないか。そんなようなことで考えた次第です。

色々スライドはあったんですけども、我々リスク伝達的手段として、こんなようなホームページを作ってます(図表 11)というようなちょっとPRをさせて頂いたりとか。こんなようなハンドブックというのも作っています。(図表 12)これも人と動物の共通感染症研究会のホームページにも全部載せていますとかお示ししたりとかしてですね。感染症法の見直しというのを平成16年くらいに予定しておりました、今ここで見直し案の検討をしているところです。来年には国会に出したりして審議を進めていきます。今日話したようなことの中の少しでもですね、ここの中に盛り込めればというふうに考えているところです。私の今日のプレゼンテーションはここで終わらせて頂きます。どうも、ご静聴有り難うございました。

**植村**

中嶋先生、どうも有り難うございました。最初の出だしが、「不安がらず、でも油断なく」ということでございましたが、フロアの皆様方いかがでございましたでしょうか。若干、私自身は不安も少しは残っているんですけれども、今のように色々な話題をきちっと整理して頂いて、そして、最後にお話がありましたように、その情報は市民、国民に的確に伝達するといわゆるリスクコミュニケーション、ということだと思います。今年、中嶋先生よりご紹介がありましたように、ゴールデンアワーでQ熱のテレビ番組が流れたりしたことで、いわゆる過剰反応も起こっているのが事実でございます。あるいは、あまり一般の方はご存知なかったかも知れませんが、いわゆるプレーリードッグの野兎病、「のうさぎびょう」ですね。これは、もし、侵入しますと被害がどうなるかということで、やっぱり危険な病気でございます。きちっと整理して頂いているという話の内容であったと思います。

**質問者**

学校で、動物の飼い方とか考え方を指導している者です。文部省と一緒に。一つお伺いしたいのは、私達も人に一番怖いのは人から移る病気だと説明しておりますが、インフルエンザの死亡率とかタバコの喫煙の死亡率が出てますけれども、直接に動物から感染を受けて死んだという例が年間どの位あるのか教えて頂きたいと思います。

**中嶋**

分かっているだけなんです。先程の説明の中で感染症法という法律を説明しましたけれども、その中で1類から4類に感染症法の病気が全部あり、その中でどれだけの患者さんがその病気に罹ったかという数字は全部公表しております。例えば、オウム病で亡くなった方はいるかとそういった形も全部出せるようになっています。私、正確な数字を全部覚えていませんけれども、死因として挙がっている数字はですね。全部の感染症法でサーベイランスをしている病気、動物由来といわれているもので10名いなかったというふうに記憶しております。非常にこういった

言い方はあまり良くないんですけども、何が何名というふうには本当は言いたいところなんですけれども、非常に少ない。ただ、非常に少ないというのはなかなか分かりにくいので、どの位?というところ10名いなかった位です。その死因としても、それが直接の死因なのか、他の病気とのあれなのかというの、お医者さんの死因のところの判断になってきますので、そこところは分からない部分なんですけれども一応、そういったところを踏まえてもそれ位のところです。

#### 質問者

私達が学校で、ズーノーシスの説明ですが、人間も動物の一部だから一緒に罹るのよ、というふうに説明してるんです。人間も動物の一部ですから、「人間も動物に移すこともあるし動物からもらう時もあるのだから、動物を触る時は手を洗って触りなさい。触り終わったら手を洗いなさい。」という風に言っているんですけども、人畜共通感染症の方々いつも、動物から来る、そういうふうに説明なさるので、それが、ちょっと改めて頂けたらなと、これお願いですけれども。

#### 中嶋

分かりました。なかなか私も言わなくちゃいけない時があつてですね。言わさして頂く時があるかも知れないですけども、十分に動物の尊厳があるというの理解しておりますので。

#### 質問者

あるところの小学校でカンピロバクターの食中毒が飼育の子どもに出たということで、すぐに新聞に動物から移ったというふうにされたんですね。でも、それは獣医師会が調べてみた時、衛生局と一緒に調べたんですが、学校の動物は全くマイナスだったんです。だから、カンピロという動物っていう、先ほど動物由来とおっしゃったけれども、実は人間由来の方が今は多いんじゃないかと、そういう常識を変えて頂かないと動物はいつまでも怖いという風に一般市民にとられかねないということです。

#### 中嶋

分かりました。我々全部の報道についてですね。チェックを全部入れることは、出来ないんで、新聞の報道がどういふふうな事になっていたのか、私は分からないんですけども、ただ、カンピロバクターっていうのは、どこにでもあるというものじゃないというところがあつて、やはり、動物性食品の方にそれはあるというのは言われています。ただ、動物性食品が、なんで犬に結びつくのかなと。先程カテゴリーで私が説明した中でペットのカテゴリー、それから、家畜のカテゴリーというふうに説明しましたがけれども家畜のカテゴリーの方の話ですね。普通は常識的にはカンピロバクターの食中毒は起こるものですから、そちらの学校の中で十分な衛生管理をされていれば、なんら心配されることなく、頂けるんじゃないかなと。ただ、過剰な行動というのはどうしても、どうやっても妨げられないところですので、そんなふう考えております。

#### 植村

この議論も深く大きな問題があると思いますけれども、動物も、以前は人間と敵対関係という捉え方をしていた。そういう過去から21世紀は動物も人間も共にこの地球であるいは、生活圏の中で共生していくと、こういう過程の中で若干問題の食い違い、あるいは考え方の食い違いということもあります。けれども、これは、我々にとって重要なテーマでございますので、少しずつでも改善、そして正確に市民の皆さん方に理解して頂くように進めていくことだと思います。

中嶋先生、どうも有り難うございました。

パネラスピーチ

『動物飼育による感染症とアレルギー発症』

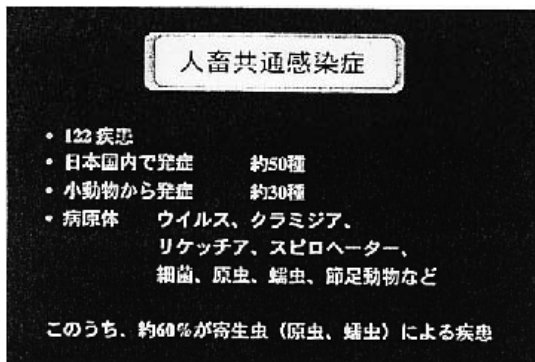
藤田 紘一郎 東京医科歯科大学大学院

国際環境寄生虫病学 教授



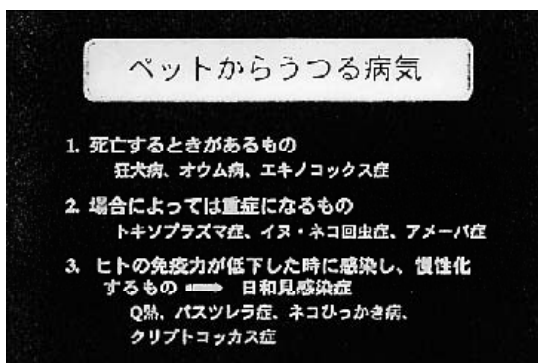
パネラーとしてプレゼンテーションを簡単にしたいと思えます。で、私、植村先生よりご紹介頂いたように国際環境寄生虫病学という変な教室をやっておりますけれども、以前は医動物学という学問をやっておりました。医動物学というのは動物から罹る病気でありまして、今日の国際シンポジウムのテーマそのものでございます。私共の研究室では、いわゆる人畜共通感染症、それからアレルギーの基礎的な研究をしています。人畜共通感染症では、特に犬回虫、人の犬回虫症を研究しております、アレルギーでは、ご承知のように寄生虫がアレルギーを抑えるとかそれから、色々な微生物がアレルギーを抑える、さつきドクターヘッセルマーがおっしゃっていましたように我々も寄生虫や色々な細菌がアレルギーを抑えるという研究をしております。もう一つは、うちの教室に高柳友子というのがあります、彼女がペットを使ったアニマルセラピーというようなことをやっています。要するにペットを取り巻く医学的な問題を研究しております。アレルギーのことは、ヘッセルマー博士と山岡先生がお話になりますので、ペット感染症についてごく簡単にプレゼンテーションさせていただきます。

りますけれども、約60%が寄生虫による疾患です。この、ペットから移る病気を分けてみますと、大きく3つに分けられます。(図表2)死亡する時があるもの、狂犬病、オウム病、エキノコックスです。場合によっては重症になるもの、これがトキソプラズマ、犬猫回虫、アメーバという原虫寄生虫疾患です。3番目に人の免疫力が低下した時に感染し、慢性化するもの、これを日和見感染といいます。Q熱、パストツレラ、猫ひっかき病などありまして、実は、感染ということから考えたら3番目が一番多い訳です。オウム病は先程お話があったように日本で死亡例が出ております。(図表3)これは、セキセイインコなんかの鳥を飼って

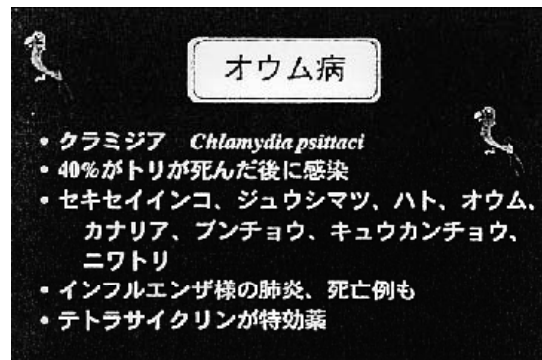


図表 1

人畜共通感染症と申しますと WHO では 122 疾患挙げておられて、(図表 1)日本国内で発症するのは約50種、そのうちから、小動物から発症するのは約30種と言われております。病原体はウイルス、クラミジア、リケッチアいっぱいあ

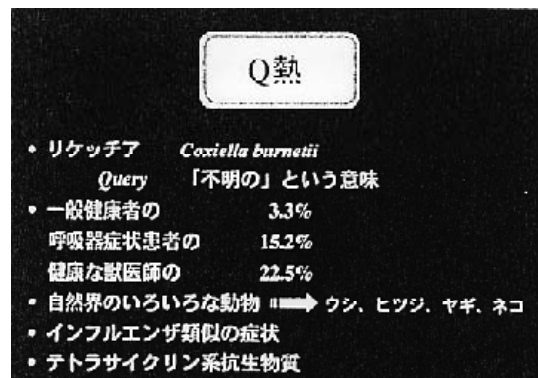


図表 2



図表 3

しかもそれが風邪を引いて死んだ後に扱っていた人が罹る訳ですけれども、インフルエンザ様の肺炎と同じような症状です。何故死亡例が出るかといいますと、これは普通の肺炎の治療では効かないんです。テトラサイクリンじゃないと効かないということであって、殆どこういった鳥を飼っていたという情報がないために死亡している訳です。Q熱というのは、先程Q熱で高知医大で亡くなりましたけれども、これは、ごく一般的にそこら辺にあるウイルス「リケッチア」でありまして、一般健康者を調べてみますと3.3%が罹っている。(図表4)で、健康な獣医さんの22.5%が罹っている訳ですけれども、これはさっき言いましたように日和見感染と申しまして、罹っているけれども症状が出ません。



図表 4

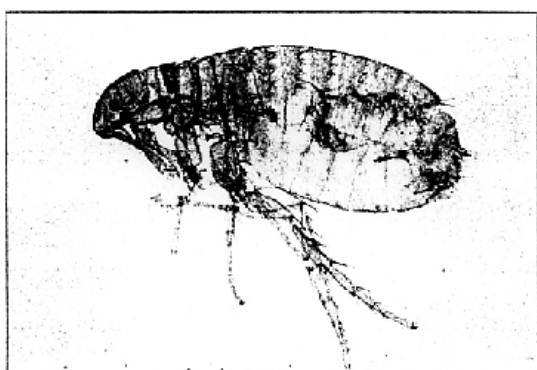
症状が出るのは、非常に免疫機能が落ちた時にかかる病気なんです。ですから、どこまでを感染とっていいか、症状が出たのを感染とっていいか、罹ってれば感染とっていいかによって患者数が非常に違ってきますけれども一般健康者の3.3%もある普通のリケッチアであります。自然界の色々な動物が持っている、これもインフルエンザ様の症状を起しまして、厄介なのは普通の抗生物質じゃ効かない、昔使ったテトラサイクリンしか効かないということで、なかなか長引いて死亡例が出るような場合があります。

**パスツレラ症**

- ネコ、イヌの口腔内常在菌  
ネコ 100%、イヌ 50%
- なめられる、咬まれる、ひっかかれる、空気感染
- 子ども、高齢者、慢性病の人
- 呼吸器症状、髄膜炎、骨髄炎
- ペニシリン系、セファロスポリン系の抗生物質が有効

図表 5

パスツレラというのはこれは常在菌です。(図表 5) 猫 100%、犬 50%ですから、すぐチュッチュしたり舐められたりすると罹る訳ですけれども、先程から申しておりますように罹っても発症する人が殆んどいません。免疫機能の落ちている人が罹りますと髄膜炎みたいな症状を起す訳です。猫引っかき病でございましてけれどもこれも昔から猫から引っかかれて罹るといわれておりましたけれども、実は犬からでも罹っております。犬とも猫とも付き合わないで罹る場合があります、原因は猫ノミがバルトネラヘンセラ菌という菌を持って来ているということが分かっておりました。この病気の媒介に猫ノミが非常に大きな力を持っている、媒介しているということが分かってまいりました。



図表 6

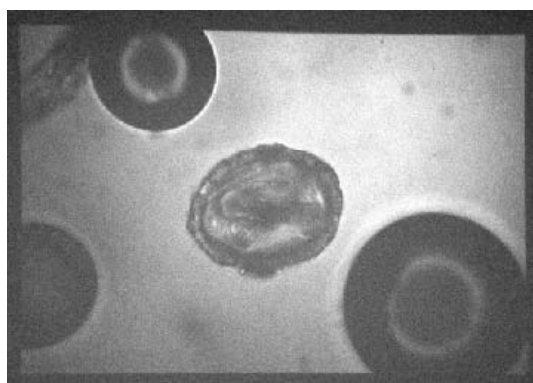
これは猫ノミですけれども、(図表 6) ノミは人ノミ、猫ノミ、犬ノミと宿主特異性が強い訳ですけれども今、日本にいるノミは全て猫ノミです。ですから、犬についているのも猫ノミ、人にも食いつくということで猫ノミをどういうふうに変らすか、それはやっぱり野良猫をちゃんと管理しなくちゃいけないということになってきます。こういう人間でも猫ノミに刺された例が増えております。

今まで、申し上げましたのは、主な日和見感染症を

く簡単にまとめた訳ですけれどもこれは先程言いました様に人の免疫機能が落ちている時に重症化する訳です。ですから、動物を飼っている人も免疫機能をきちんと保って入れさえすれば大丈夫な病気であります。ところが、今から申し上げます寄生虫病は、これは人が元気であろうが弱っておろうが、菌が入ってきたら発症する、ということなんで「曲者の」と言っております。もう一つ、この病気が「曲者」という理由は動物の寄生虫が人に入りますから人の体内では親虫にならないで幼虫のまま移行する、いわゆる幼虫移行症と言っておりますけれども、そういう非常に複雑な病経をとるものであります。それらは沢山ありますけれども時間の関係で「犬猫回虫症」の話をしたと思います。砂場を糞害から守れということで、十数年前非常に問題になりました。公園の砂場には犬とか猫のウンチがあって、犬とか猫の回虫がある。公園で遊んでいたらそれを飲み込んで罹るということでこういうドーナツを作って犬猫を入れないような公園をしようと、砂場の砂を全部殺菌しようというような話があった訳です。(図表 7)



図表 7



図表 8

これが犬回虫の卵です。(図表 8) 公園の砂をひっくり返しますと必ず犬回虫の卵があります。こういうふうに変形した卵ですけれども、実験してみますとこれは感染能力があります。ですから、日本のどの砂場のものも犬猫回虫の卵があります。ところが、それが、子どもに罹る例というのは非常に少ない、計算しますとバケツ3杯分の砂を飲み込まないと感染しないということになります。ですから、公園の砂場はですね、犬とか猫の回虫の卵はありますけれども、だから、公園で遊ぶなどというのはこれは間違いでありまして、実は回虫症に一番罹るのはレバ刺しを食べるおっちゃん



ん達が一番高くなっている訳です。ですから、ペットから移る病気はあるけれどもその確率を考えなくちゃならない、非常に低い確率なんです。

ご承知のように成犬では犬回虫に罹っている例は非常に少ないんです。持っているのが殆んどが6ヶ月未満の幼犬です。ですから、幼犬を飼った時には獣医さんに行って駆虫をしてやれば危険がないということになります。子どもさんが犬回虫、あるいは猫回虫の卵を飲みますと、卵は腸で孵化しまして肝臓にまいます。殆んどが肝臓に行きます。ここで、一過性に腫れまして殆んど自然に治ってしまいます。ですから問題はありません。殆んど肝臓へ行くところが、元気の良いのがですね、肝臓から肺に行きます。肺も一過性の肺炎を起して治ってしまいます。ですから、犬回虫症に罹る割合は日本人の1.6%位ですけれども、殆んど一過性の肺炎で治ってしまいます。ところが、ごくごく稀に元気の良いのがですね、網膜に行きます。こういった網膜に行きまして、網膜芽細胞腫とよく似た腫瘍みたいな形をとります。昔はこれは悪性のガンということで、眼球を取られたんですけども、摘出した目の中から、犬回虫の幼虫が出てきたということで、問題になった訳です。しかし、このような病状を示したのはですね、日本で過去3例位しかありません。ですから、何度も言いますがけれど犬から罹る犬とか猫の回虫は人に罹りますけれども、その発症の度合いは非常に少ないという、それから予防策をちゃんと講じれば一つも怖くないということになります。

報告者(年)	Snyder (1961)	Beaver (1962)	Strand (1964)	Huntley & (1965)
例数	30	50	40	51
異食症	100%	99%	100%	90%
熱	20	22	37	20
咳嗽	35	—	57	—
蛋白	5	—	—	28
好酸球増多(30%以上)	100	100	100	100
白血球増多	100	100	100	100
肝腫大	85	88	87	—
肺動脈炎(X線)	40	44	32	—
皮膚病変	5	—	—	22
網膜病変	5	—	—	7
高γグロブリン血症	32	78	30	40

図表 9

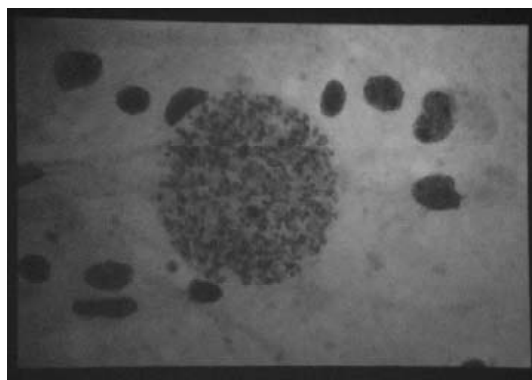
犬猫回虫に罹った子供さんの症状を見てみると、(図表 9)100%異食症というのがあります。泥とか砂とか変なものを食べるのが100%です。それから、好酸球が非常に増えてくるというのが特徴ですけれども、これは一過性に治ってしまう訳です。ちょっと問題になるのは、網膜に行って虫が腫瘍を作った部分が視力低下を起こすことが問題です。その割合は罹った人の全体からいうと非常に少ないということです。少ないといってもこのように犬を飼う人達が非常に増えてきて、診断が迫られておりますので我々はトキシカラーチェックテストという簡便なテストを考案しております。ここに血清を垂らせば陽性か陰性が分かるキッドを作っております。陽性の場合にはこういう風にピンクの色が付くようになっております。但し、陽性だからといって犬回虫症に罹ったとは言えません。何故かという寄生虫の感染は非常に共通抗原というのを持ってまして、確定するには犬回虫か人回虫かあるいはアニサキス

か、これはこの反応によって決められません。犬回虫でも豚回虫でも鯨の回虫でも、アニサキスでも陽性になります。その場合の鑑別診断として、こういった「イミノディフュージョン法」という方法で鑑別しておりますけれども、この方法は非常に込み入った方法ですので、一般化は無理だろうと思います。

トキソプラズマ症	
• ネコの糞(オーシスト)、ブタ肉(シスト)	
• わが国成人の20~30%に感染	
• 妊娠時の初感染 → 胎児に感染	
年間出産数	120万人
初感染妊婦の割合	0.25%
虫体の胎児への移行率	40%
感染児数	年間1000人
出産児	1500人に1人の割合
• ピリメサミン、サルファ剤、アセチルスピラマイシン	

図表 10

猫から罹る病気一杯ありますけれども、この中でトキソプラズマ症を簡単にご紹介しようと思います。(図表 10)トキソプラズマは我が国の成人の20~30%が感染しております。これは大人が感染してもなんら症状はございません。私も強陽性でございますけれども見ての通り元気であります。ところが、問題なのは妊娠時に初めてお母さんに罹った時にですね。お母さんは平気なんですけれども胎児に感染します。でも、全て胎児に行くかという40%の移行率でありまして、計算しますと年間感染者数が1,000人位です。1,000人ですけれども、これを早めに治療してピリメサミンとか、サルファ剤で治療致しますと症状が出ません。治療しないとこの子どもが青年期になりますと、視力障害を起こします。猫がオーシストという卵みたいなものを出しまして猫が終宿主です。ですから、猫が悪者とされる訳ですけれども実際はこのオーシストを食べた鳥とか豚とか羊の肉を熱をあまり加えないで食べるということで罹る率のほうが非常に多い訳です。ですから、猫が犯人にされるのは、猫も迷惑だと思っております。しかし、猫が終宿主であることには変わりはありません。問題は妊娠時に初めてお母さんが罹ると、胎児に虫が移行してこの胎児が青年期になると視力障害が起きることです。これが猫の糞から出てきたオーシスト、卵みたいなものです。これは、普通私達の体に入っているトキソプラズマですけれども筋肉中に膜に包まれてじっとしております。(図表 11)



図表 11

ですから、病原性はありません。病原性があるとすると、私もこういう状態でトキソプラズマを持っておりますけれども、私がトキソプラズマにやられる時はエイズみたいな強力な免疫低下の病気に罹ると、このトキソプラズマが破裂しまして全身にトキソプラズマが出てトキソプラズマ性脳症ということで、私が死んでしまうということになります。胎児に移行しても生まれた時にはなんら異常がないんですけども、10歳以上になりますとこういう風な網膜炎を起こしまして、視力障害を起こすということです。猫から感染する寄生虫病のトキソプラズマは妊娠中の感染に注意ということです。

私はペットから移る病気を研究しておりまして、これをお話しますとペット愛好家の人達に非常にバッシングを何度か受けています。あなたがこういうことを言ってペットを飼う人が少なくなるんじゃないか、とおっしゃってですね。攻撃される方がいる訳ですけども、私もコロちゃんという犬をずっと飼って溺愛しております。私は動物を飼うことが大好きであります。でも、動物を飼ったら、それから罹る病気があるということも知らなくちゃいけないです。それが本当の人と動物の正しい付き合いだと思います。動物から移る病気もあるし、人から移す病気もあることを知ってそれをどうやって予防するか、予防は簡単なんです。そして、ペットから移る病気はあるけれどもそれは、人側がきちっと健康であれば殆ど移らない、そういうことを知って頂きたいと思えます。そして、最後にペットは心のお医者さんということで、ペットで癒される人達が非常に増えています。今、こういった複雑な社会になってペットを飼わない生活がもう困難であります。ペットはコンパニオンアニマルとして我々の生活には欠くことのない動物になってきました。だからこそ、ペットから移る病気がある、ペットと付き合いとアレルギーになったりそれを予防したりすることがある、そういうことを的確に知ってから、我々は動物と正しく付き合っ頂きたいと思えます。有り難うございました。

## パネラスピーチ

山岡 幸司 神戸市立中央市民病院小児科



この島の中の神戸市の病院で子どもの医者をしております、山岡と申します。本日は、お招き頂いて有難うございます。このお話を頂きました時に、一瞬ではありましたが、私は悪役と呼ばれたのかな、というふうに思っておりましたが、本日のディスカッションを聞かせて頂きまして、その心配が取り越し苦労であったことを非常に喜んでおります。私も子どもの頃に犬を飼ったことがありますが、高校を出てからは残念ながら、ペットを飼う幸運には恵まれてきませんでした。そうは申ししても、獣医の先生方が多いところで恐縮ですが、私は「動物のお医者さん」という漫画を愛読しております、大変楽しい漫画で比較的動物に関してはファミリアな方の人間の医者ではないかなという風に思っております。現在、ペットとアレルギーということは非常に親御さんの心配の大きいところですが、残念ながら、一律にですね、ペットと人間の関係はこうであると今までのお話からでもそうでありましたように、なかなか割り切れないものがあります。幾つかの個別例にあたって私を感じてまいりましたことをお話して、皆様の今回のディスカッションの助けにさせて頂きたいと思っております。

私は喘息の子を主に診ておりますので、既に喘息である子どもから、ペットを眺めるというふうな視点になります。そこで、一人、象徴的な色々な示唆に富む一人の子どもに登場して頂きまして、参考にして頂きたいと思っております。この子はですね、生後1歳で喘息を発症致しまして、これはスウェーデン北部のような非常に寒いところではなく関東以南の某県でありますけれども、某県で入院したりすることが何度もありました。喘息のために入院しております。アレルギー性鼻炎も合併しています。以前住んでいたところで、原因のアレルゲンを血液によって調べられておましてダニ、ハウスダスト、猫などが原因アレルゲンだという風に指摘されております。ヘッセルマー先生の為にちょっと申し上げますけれども日本では、ここ5,6年前まで非常に吸入性ステロイドの導入が遅れておまして、子どもは比較的重症でも内服薬などで治療される傾向にありました。この子もそのような状態でありまして、6歳になって初めて何度も入院した後で、初めて吸入性のステロイド、その時は商品名をベコタイドといまして、そういうもので治療をされております。

BDPですね。そこから、発作は減少しまして、入院はしなくなりました。が、時々ぜいぜいいておりました。その時の状況ですが、この子はおばあちゃんの家で猫がおりまして、学校から帰ると母親が働いておりましたので、毎日そこで、過ごしておりました。猫が原因なのに毎日猫と一緒にいたのでは、具合が悪いだろうということで、猫を何とかしなさいという話はあったのですが、何とも出来ずに病院の方でフルチカゾンこれは、フルチカゾンというのですが、

を始めましてその他に飲む薬も足しまして、咳をする状態は残っていたんですけども、発作や入院はなくなりました。つまり、薬物療法である程度改善したという状況です。母親の仕事が転勤になりまして、神戸市に最近引っ越してきました。勿論住居ごと変わった訳で猫はもう既におりません。で、コントロールが非常に良くなりまして、飲んでいた薬、気管支拡張薬なども中止しまして、フルチカゾンも半分になりましたが、全く症状が出ておりません。咳も出ません。今後更にこういうふうなフルチカゾンも量を減らす予定でおります。ただ、今年の夏におばあちゃんのところへ帰った時には、当然なんですけども、薬物療法が減っていた為でしょうか、喘息発作が見られました。この例で私達が感じたことは、自分の家に猫がいなくても、猫と日常的に接するというだけでも、そういう症状は起き得る。それから、猫というふうなアレルギーの元がなくなれば、アレルゲンがなくなれば、コントロールは良くなる、薬も減らすことが出来る、けれども、再びアレルゲンに接した場合は発作がまた起こる、つまり、喘息は治った訳ではないというようなことだろうと思っております。

ペットは日本の状況は、これは、喘息児の方から眺めた話なんですけれども、これ位飼われている様だと、猫は主に室内で飼われておまして、神戸市の様な所では家が狭いとか、マンションだとかいう理由で室内で犬が飼われることも増えております。ハムスターに関しましては、「とっこハム太郎」というアニメーションの影響でこの5年間で急速に飼われる率が広まっております。非常に多くなっている。ただ、ハムスターはケージの中等で飼われておまして、非常に限局したところで飼われているようです。

猫アレルギーなんですけれども、先程の子どもも猫アレルギーだった訳ですが、猫を飼育していない喘息の子どもの大体9%位で猫を触ることによって、喘息とか様々な症状が誘発されるというデータが日本にあります。これは全部日本のデータなんですけども、飼育歴がない患者、猫を飼ったことがない患者の感作されているIgEの抗体陽性率とこのを見るんですが、年齢と共に上昇して6歳以降には、喘息の子どもに関していえば40～50%が猫に対する抗体を持っているということが報告されています。また、猫を飼ったことがある喘息の子どもに関しては、70%ということなんです。非常に高い率なんですけども、逆に猫を飼っていても感作されていない喘息の子どももいるということのようです。猫のアレルギーの元になる猫アレルゲンについては、ヘッセルマー先生からもご指摘がございましたが、色々研究されております。(図表1)で、Fel d1というのが猫アレルゲンとして、最も主なものなんですけれども、皮脂腺から分泌されておまして、オスの方がメスよりも4倍分泌量が多いといわれています。オスを可哀そうですが、去勢し



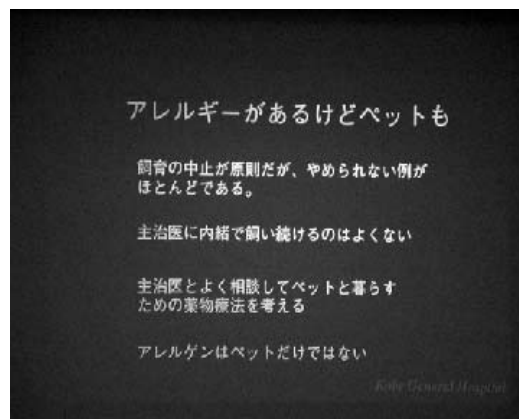
図表 1

まずとメス並みになるという報告もあります。ダニアレルギーよりも粒子が小さいので、長時間空中に漂い続けます。ダニアレルギーでは天井や壁にはあまり見られませんが、猫アレルギーは壁とか衣服にもたっぶり付着しております。掃除機等で掃除して2時間以上経っても空中に漂い続けているという報告があります。それから、これはあまり知られていないことですが、病院の待合室のソファとか学校で子どもが座る椅子、あるいは保育園、電車のシート、バスのシート、そういったものにも、そんなところで猫を飼っている訳ではないのですが、そういったところにも幅広く分布している。これは恐らく猫を飼っている人が、そこにやって来て座ったり、衣服を置いたりするために起こることじゃないかと思われます。飼育を中止しても5～6ヶ月は大量のアレルギーが残っているといわれまして、少なくとも半年、場合によっては1年位アレルギー症状が消えないこともあります。これが、猫のアレルギーの特徴だと思います。

犬アレルギーについては、猫アレルギーほどあまり日本では研究が進んでおりませんが、犬を飼ったことがある喘息の子どもの感作率は、30%で猫よりは大幅低くなっております。犬を飼ったことがない患者の感作率は、年齢とあまり関係がない、つまり犬を飼いつけてもあまり増えていかないんですね。約10%位だと言われています。ただ、これも猫アレルギーと一緒に、自分で飼ってなくてもですね。田舎に帰って広い家で飼われている犬によって感作されたと思われる例もあります。犬アレルギーは猫アレルギーとちょっと違うと思われるんですね。猫アレルギーというのはどの猫でも一緒なんですね。ところが、科学的に証明されてるかどうか、私ちょっと分からないんですが、実際に診療しておりまして、犬の種類によってアレルギー症状が出る犬と、それから、誘発されない犬があるような感じがあります。

近年ですね。やはり先程の質問にもありましたが、アレルギーがあってもそういうペットを飼いたいという人結構沢山おられます。実際に患者さんと接しておりますと、そういう希望というのは切実なものがあります。そこで、日本の小児アレルギー学会とか、医者を集まりでは、決して公に文書にしたりすることは出来ない状況なんですけれども、実際では、こういうふうな方向が望ましいんじゃないかと個人的には思っております。飼育の中止が原則なんですけれども、実際にはですね、あなた猫を何とかしなさいといっ

ても、猫と別れられる人は殆どいないですね。アレルギーがあるから、この猫捨てようですかあるいは誰かにあげようと思う人はいません。実際にそうした人がいない訳ではないけれども、殆どいない、これが現実です。そういう現実なのに病院に行って医者に聞くとそれは猫が原因だから、猫を何とかしなさいと一言で終わってしまう、というのが今の日本の現状じゃないかなと思います。一番悪いのがですね。「はい、分かりました」と言って「猫を何とかしました」と外来で適当なことを言って実は、飼っているという例がありますね。(図表2)私もそういう例に何度かあったことがあります。猫はやめた筈の人が、医者にはやめた



図表 2

と言っておいて看護婦さんに「猫の餌は何かいいの?」と聞いている。と言うような激しい例もありました。まず、主治医に内緒で飼いつけると医者の方はもう猫はいなくなつて何年も経っているのにおかしいなど、別の原因があるんだろうかと色々なことを考えますので、それは良くないと思います。主治医とよく相談した上で、ペットと暮らすための薬物療法を考えるというのは、さしあたっての現実的な方法ではないのかなと思います。先程の例ではありませんが、例えば、吸入性のステロイドでありますとか、最近はその他にも、非常に長く効くタイプの気管支拡張薬の吸入薬であるとか、あるいは、内服薬でもですね抗ロイコトリエン薬といわれるような非常に良く効く薬も出てきております。喘息は管理できる病気だというふう言われるようになって来ました。ですから、なかなか公言出来ないことではあります。こういうことを考えると、それについては薬の副作用とかいろいろな情報も得て納得した上で、主治医と相談して決めるということが必要なことではないかなと思います。それから、アレルギーの元になっているのは何もペットだけではなくあります。ペットを飼う際にも色々なハウスダストとか、あるいはダニとかそういったものへのケアも必要、ペットさえやめれば良いというものではないです。

病院の医者が動物嫌いでもなんとしてくれないというようなケースもあると思います。なかなか理解のある医者にめぐり会えないというような実態もあります。ここで、自分で出来ることを幾つか考えて見ますと、少なくとも一緒に寝るのはまずいんじゃないか、アレルギーがある場合ですよ。それから、ペットこれは、猫なんか洗われるの嫌だと思わなければ洗うことがペットの皮膚に悪影響を及ぼすこと

があると思うんですけど、理想的には週に2回位ペットを洗うと、それから、猫のアレルゲンなどが付きやすいザラザラした素材のものとか、あるいは毛足の長い素材のそういう家具、ソファとかじゅうたんですね。そういったものは、あまりペットを飼うんだったら好ましくないですね。それから、ウールとか最近流行のフリースよりも綿素材の方が良いんじゃないかと。ペットの世話をしますと衣服にはかなりペットのアレルゲンが付着しますので、そういったものは特別にしておいた方がいいかも知れません。もし、可能ならペットはあまり増やさない、既にアレルギーがある場合には増やさない方がいいだろうと。

アレルギーは関係ないやと思っておられる方も大勢おられると思うのですが、大体日本の特に子どもの気管支喘息の有病率、喘息というのは大体20人に1人位喘息があるといわれています。大雑把に考えてその20人に1人の喘息の子の半分位が猫に感作されているとしましたら、大体40人に1人位は電車に乗ったらその電車の中の1人、2人は猫アレルギーがあるんだということを知って頂きたいと思います。従ってペットの世話をする衣服はですね。それを色々な所に撒き散らさないためにも外出着とは別に頂いた方がいいんじゃないかと、飼育係とかそういうふうな動物と接する機会がある、そういう学校生活でも、アレルギーのない子がアレルギーのある子に色々なことを強要するというようなことがあると悲しいことが起こることがあります。最後に、家族に喘息の患者さんがいる場合は、室内でペットを飼い始めると、新たに飼い始めるということについては、ケースバイケースですけども主治医の先生とよく相談してから決めて頂きたいというふうに思います。以上で、プレゼンテーションを終わります。有り難うございました

## パネルディスカッション

座長

植村 興

大阪府立大学大学院農学生命科学研究科

獣医公衆衛生学研究室 教授

パネリスト

ビル・ヘッセルマー

中嶋 建介

藤田 紘一郎

山岡 幸司

植村

ただ今からパネルディスカッションを始めさせて頂きたいと思えます。4人の先生方それぞれご専門の話を紹介させて頂きまして、そして、色々な話題を提供させて頂きました。それで私、本日のこのテーマを見ていた訳ではありますが、子ども達へ与える動物の影響ということで、本日は特に身体的影響ということでございます。いわゆるプラスとマイナスの両方が存在し、そして、プラスは伸ばしマイナスにはそれに対する対策を立てるということかと思えます。先程、ヘッセルマー先生からお話がありましたように、子どもはまず第一に触る大事なものととしてペットがあるということです。子どもの人生は、ちょっとペットという言葉は引っかけられるんですけども、時々簡潔なペットという言葉を使わせて頂きます。お叱りは後で受けたいと思えますが、人の社会生活はペットと触れ合うことから始まるというのが先生のお話でした。それに対して私は100%同意したいと思えます。ところが、ペットを飼うと色々な害が生ずるから、病気が起こるから、アレルギーが起こるから、ということでペットを子どもから離す。これにつきましては、また、来月のシンポジウムで心の問題として議論をして頂きます。本日私共は、病気の話っていいですか、身体の健全性の話題に絞らせて頂きますので、皆さん方御了承をお願いしたいと思えます。ここでまず最初に話題提供をして頂きました先生方からコメントを簡単をお願いします。



ヘッセルマー

はい。有り難うございます。非常に興味深いお話を頂きました。勿論、ドクターとしてはやはり臨床のお話をして頂く方がいらっちゃって下さるということは有り難いことでありま

すし、そして常に患者さんと会っていらっしやる、そのような先生もいらっしやいました。そしてアレルギーでペットを飼いたいという人達もいる、それをどうしたらいいかという問題にも直面している訳であります。それからまた、この様々なデータがあります。そして臨床のデータというのはどこでも共通のものがあります。また、この動物由来感染症であります。これに関しまして、アレルギーとはあまり関係がないという側面もありますが、しかしこれもまた、非常に重要なものであります。そして、病院ではそういう患者さんの手当ても致します。そして、アレルギー部門に起きましては、実際にそういう患者さんは少ない訳ではありませんが、更に少なくとも重症の患者さん、スウェーデンではカンピロバクターがおります。勿論、稀であります。例えばケッチアとかあるいは他のQ熱とかそういうものも、スウェーデンでは時々は見えております。そういう話も出てきて非常に良かったと思えます。

中嶋

私アレルギーの方は全然担当しておりませんで、今回この両先生の話聞くことが出来まして、ペットを飼うということについてですね、考える、私の現在の仕事の立場からちょっと外れるんですけども、色んなことを考えさせられることになりました。印象に残っている話は、ヘッセルマー先生の大人数の家族の写真を使ったプレゼンテーションで、色々な比較をされてましたけれども、人間の病気とかアレルギーというものを考えるのに色々示唆に富んだ写真だったんじゃないかなと印象に残った次第です。

植村

はい。有り難うございます。最後の話にありましたように、中嶋先生はいわゆるゼロリスクはないんだというお話、それがまた藤田先生のお話の中にもかなり出てきたかと思えます。そういうことが、やはり市民に対する正確な情報を提供するということが非常に大切だと思います。引き続きまして、藤田先生でございますが、私、実は藤田先生の今日のテーマから、日頃先生が色々な著作等で述べられておられますように「ペット沢山飼いなさい。泥だらけの泥んこの猫を家の中で飼いなさい」というお話が少しあるのかなということ少し期待してたんですが、ちょっとその辺の話でなく、非常に難しい専門的なお話になったように思えます。藤田先生コメントをよろしくお願い致します。

藤田

子ども達に及ぼす動物の身体的影響と申しますと、ペット由来の感染症とアレルギーがあると思えます。ペット由来の感染症はこれはわりと簡単に予防できると思えます。即ち、病気はあるけれども飼う人側の態度によって極端な言い方をすると100%位感染の予防ができると思えます。中嶋先生がおっしゃったようにリスクはあるけれども、ペット由来の感染症は抑えられる。ところがアレルギーの問題はですね、ペットと人だけの影響ではなくて非常に社会的な影響があると思えます。我々が進めている清潔社会がアレルギーを作っている訳ですね。40年前は私達やっばり猫

とか犬を飼っていたけれど喘息は殆んどなかった、これは事実であります。

それが、こういう世の中になった、ですから、猫を飼っているとアレルギーになりますよ、と山岡先生はおっしゃってましたけれども、では、猫を飼ってはいけないのかということになります。それでは、どうしたら良いのかというと、我々の生活態度を直さなくちゃいけない、考え方を。私は沖縄の那覇市に行って子ども達を集めてどういう私生活をしているとアトピーにならないのか、喘息にならないのかという調査をしました。そうしますと泥んこ遊びをしている子がアレルギーになる確率は非常に少ないです。一人遊びで室内でコンピューターゲームしてる子の方がずっとアレルギーになっているんです。それから、第一子と第二子と第三子、どっちがアレルギーになるか、第一子が滅茶苦茶アレルギーになりやすいんです。遺伝的な確率から言いますと、アレルギーになる率は第一子でも第二子でも第三子でも同じ筈ですよ。でも第一子だけがものすごく多い。これは何故かというとお母さんの育て方です。お母さんが第一子は大事だから、哺乳瓶は全部煮沸しておっぱいは消毒して飲ませる。2番目3番目になるともう面倒臭くなって哺乳瓶は洗いまし、おっぱいは出しっぱなしということでやると、子どもはアレルギーにならないですね。それから、もう一つお母さんが働いていると子どもはアレルギーになっていないですよ。これは、専業主婦でお母さんがじっと子どもを見ているとアレルギーになってる。ですからそういうですね社会的な清潔が、綺麗にすることが何でも良いんだというそういう社会を直さないとペットとアレルギーは私は解決出来ないんじゃないかと。飼うのは原則としてまずいけどもしゃあないわというようなことじゃなくて、もっと生活態度を変えてですね。もっと子どもを泥んこ遊びさせて、そして、ヘッセルマー先生のお話にもあつたけれども、子どもさん達にばい菌を飲ませるような研究をやっている訳ですよ。日本だけが、ばい菌はダメだダメだとやっている、そういう社会を直さないといけないんじゃないかと思えます。

### 植村

藤田先生、有り難うございました。今のお話を聞きまして、私も実は、ホッとしたような訳でございます。話はそこから深めていきたいと思うんです。それで、藤田先生も、それこそ満州生まれでインドネシアでしたですかね、世界各国走り回っておられて、色んな社会環境の違う場を体験されておられます。ヘッセルマー先生も先程お話ありましたように、パキスタンの子どものことも含まれておりました。動物飼育と子どもの健康との係わりについて、おぼろげながら、あるいは感覚的には分かるんですけども、やれ実際にそれをサイエンスの土俵に上げるというのが非常に難しい。特にアレルギー問題は、先程藤田先生からお話がありましたように、感染症と違ってなかなか難しいというようなことであつたかと思えます。山岡先生は現場で本当に子ども達が悩んでいる、その相談相手になっておられて、的確に指示を出される訳でございますけれども、コメントをお願いしたいと思えます。

### 山岡

私は、もうアレルギーになってしまった人を相手にしていますので自然とどちらかというと批判的な立場になってしまふ訳なんですけれども、確かに都市部、神戸市でもそうなんですが、アレルギーが発生し易い密室で綺麗な生活をしている子ども達は多いです。ただ、それは子ども達が好んでやっているというよりは、元々子どもというのは泥団子も好きだし、外で遊ぶのも好きなんですけれども、親、我々の世代です、むしろそういう清潔志向があるためにそういうふうになってきている面はあろうかと思えます。アレルギー疾患は勿論それ自体、気管支喘息のような生命を脅かすような病気もある訳ですが、何とかコントロール出来れば生活の質、いわゆるQOLを保つことが出来る病気だろつと思えます。一つ私が最後に印象に残りましたのは、ヘッセルマー先生のお話で1歳までに非常に沢山の量のアレルギーと接した場合にアレルギーにならずに済む子ども達がいるということです。それは事実として大変重いことだろつと思えます。そのために、自分の子どもをアレルギーにしないために動物をわざとその為飼うとかですね、あるいは、それに失敗した場合にはすぐに捨ててしまうという様な事があると動物にとっても人間にとっても幸せなことではないのじゃないのかなというふうに思えます。データはデータとして、確かに存在するものですが、そのデータを受け取る側が誤解のないように受け取らなければいけないんじゃないかなというふうに感じました。



### 植村

はい。どうも有り難うございました。只今、山岡先生の最後のお話にございましたように、結局、私共は、まずサイエンスでもって理論を組み立てていくということ、そしてそれを消化して分かりやすく一般の市民の方に正しく伝えるという、こういう作業の繰り返しだと思えます。それで私、実は、ヘッセルマー先生のお話をお聞きしまして、本当にアレルギーの問題は非常に難しいことですが、世界にはこういう難題に取り組んでいる多くの研究者がいる、今回は、10人程度の研究者の業績の紹介があつたと思えます。日本では、この様な事を言ったらお叱りを受けますけれども、この分野の研究は若干遅れていたわけでございます、これから、どんどん研究を進めて頂きたいと思えます。

## 質問者

日本動物福祉協会 阪神支部 松田と申します。藤田先生にお尋ねをしたいのですが、犬の糞は条例とかで取る義務が課せられている割に、徹底しないんですね。説得力が無いんですよ。ほっといたら雨で流れますし、これはどういった科学根拠で取らないといけないかというような、踏んで気持ちが悪いというようなことはございますけれども、何か良い説得力があるのかなというようなこと、糞もアレルギーの原因になりうるのか。ということです。

それと、恐縮ですが、中嶋先生にお聞きしたいのですが、動物検疫所における検疫制度はすごくルーズだと思います。昨日もワンワンランド梅田がオランウータンを密輸入した判決の結果、控訴されて被告が高裁に持ち込まれたのですが、中でも度々出てくることが検疫所がフリーパスだったということです。サルだということでオランウータンということを立てないで通っているのです。検疫所でフリーパスだと、税関もフリーパスとなるようなシステムになっているのです。本当に、今後の人畜共通伝染病においても非常に危険な状況にあると思いますので、その点がどの様になっているのかお尋ねしたいと思います。

## 藤田

犬や猫の糞の中には犬回虫とか色々な卵があったり、バクテリアがあります。それで、糞を触る人は実際には少ないけれども、つまり、普通の人が飲み込んでも糞らないけれども、免疫力が弱っている人が糞ると重症になった例があります。でも、それを説得力を挙げる為に犬の糞は怖いというようにやると、これはそっちの方が効果が逆効果になると思います。うんちやおしっこはそんなに汚くないという方が、僕は必要なのではないかと思います。条例が決められたから、その説得力があるようなこじ付けのことはあまり言いたくないですね。犬のウンチは汚くないということ、私は言いたいのですけれども、でも弱った人が糞ると糞ってしまいます。そして、犬回虫・猫回虫に糞る人もいます。でも確率は低いんですけれども、処理した方がよいだろうという私の意見です。あまり説得力を持って処理をする必要は私は無いと思います。ウンチを踏んでも良いじゃないのというのが、私の意見でありますので、ちょっとお答えにならないかと思えますけれども、糞がアレルギーの原因になるかどうかは、山岡先生の方が知っておられると思います。

## 山岡

犬のアレルゲンについては、プレゼンテーションでは詳しく申しませんでした。何種類かあることが知られています。犬の唾液。唾液腺の中に、犬のアレルゲンの主たるものが見つけられておまして、唾液の中に多くあるのではないかと。勿論、自分の皮膚を舐めたり致しますので、そういった事からアレルゲンとして報告で読んだことがあります。唾液の中にどれ位のアレルゲンが含まれているかということについては、はっきりとしたことは私は今ここでお答えできませんが、唾液は飲みますし、それが胃の中で消化されれば、アレルギーの元であるアレルゲンとしての活性はなくなるのかも知れませんが、ちょっとはっきりしたこと

をお答えすることが出来ません。

## 植村

アレルギーの問題は、それほど難しいということかと思えます。それでは中嶋先生、第二の質問である検疫のことについてお願いします。

## 中嶋

あの、梅田の事件というのは、詳しいところは存じ上げていないのですが、去年の1月からサルについては全て検疫対象となりまして、然るべき日数検疫が終わらないものは日本に入れられなくなっています。もしかするとその梅田の事件というのは、去年よりも前にあったのかもしれませんが。去年からはその様な対策は立てておまして、この悪いことをしようとする人に対する法律ではなくて、残念ながら密輸とかこういふことは今もあるのではないかと指摘する人はいらしゃいますけれども、動物由来感染症対策としては、全てサルは検疫を終えない限り持ち込めないことになっています。当面の対策は、サルについてはそれで足りているのではないかと考えています。

## 質問者

私は神戸市民の1人で久保と申します。山岡先生のお話の中で、犬の種類によってアレルギーを誘発する犬の種類がありますという話がありましたが、出来たら参考としてその犬の種類を教えてくださいたいと思います。

## 山岡

私が申し上げましたのは、ある種の犬にアレルギー症状を示す子どもが、別の種類の犬にアレルギーを示さない場合がある、実際にそういう経験をしたことがあります。この犬は大丈夫とか、この犬は駄目とかどうもあるようなのです。ところが、猫にはそれが無いのです。猫は駄目という人は、短毛種だろうが長毛種だろうが駄目なんですね。私の経験ではそうでした。で、アレルギーを起こしやすい犬がいるとか、起こしにくい犬がいるとか言うのではなくて、子ども一人一人にとってアレルギー症状が出てしまう犬と出ない犬があるということです。

## 植村

この様な場合、相談に行くのはどこへ行けば良いのでしょうか。フロアーの皆さんで獣医師さんも何人かおられるんですが。

## 質問者

東京の柴内でございます。今日のお話は人の立場から感染症・そしてアレルギーといった立場になりますけれど、その対象は動物達です。ことに、何万年も一緒に暮してきた身近なコンパニオンアニマルとの関係が中心かと思えますけれども、その他の動物のことも兼ね合わせまして、先程回虫のお話しが出ておりますが、藤田先生のお話にございますように、一緒に暮す動物というのは、もう人間がずーっと一緒に暮してきたというのは、医学の世界では危



険なものや不潔なものは遠ざけてきたわけですから、今もつと一緒に暮そうということのテーマだと思わすね。それには、共に暮す動物が健康で衛生的であれば、多くのものは除けるという事が十分私達には考えられます。その場面は私共獣医師が完璧にお手伝いをすれば、ほとんど危険はないと思っています。例えば、回虫症などは、もう十二分にきちっと駆除の出来るプログラムもあれば、また薬もあります。それをきちっと飼い主と獣医師が、正しく家族としてケアしていればその様な事は心配ないはず。勿論野生にいたりとか、不幸にして飼い主のいない動物達は、手が届かない所にいるわけですが、その動物達にとっても日本の場合は多くの人達が心を砕いて、その動物達の為に手を貸そうという努力も沢山今されているわけです。その様なことで、子ども達とか人への感染は防げると思います。

またアレルギーの問題も、たまたま私共は1986年から人と動物のふれあい活動CAPP活動を、社団法人日本動物病院福祉協会で現在までに4,300回を越える訪問活動をしています。その中の活動に参加する動物達はきちっとした健康管理とそれから正しい陽性強化法のしつけをしております。4,300回の活動を全国的に行っていて、1回のアレルギーも1回の事故も起こしていません。それは何かあるのだろうかと思わすと、当然アレルギーは高齢者に少なく若い年齢ほど多いということは先生方よくお分かりだと思わすけれども、お訪ねしている対象の60%が高齢者であったことは一つの理由になるかもしれません。勿論、心身に傷害のある方、それから赤ちゃんからご病人の方、ホスピスまでお訪ねしておりますけれども、それでも起こらなかった理由というのは、何といたしまして、先生のお話の中にありましたふわふわと飛ぶような猫の毛、長毛種です、それはやはりとても痒みをおぼえたり、そうしたことがなりやすいと分かります。その様な種の参加する動物達は必ず前日までにシャンプーをする、健康管理をする、そして当日はブラッシングをする、勿論それまでに色々使っている日頃のケアの薬剤等も活動前には中止をするといったようなことに配慮しています。一番問題になるのは、汚れた毛です。そして汚れたフケです。最大のアレルゲンだと私達は思っています。この様なケアを十分に、そして腸内・外の寄生虫、そして腸内細菌までチェックをしておりますので、この様な事を飼い主がきちっと心がけて、それ



から外での排泄物をちゃんと拾おうという心がけを、動物と共に暮す飼育者と獣医療に携わる先生方が協力をすればもっと解決するのが早いのではないかと、こんなふうに思っています。

#### 植村

有り難うございました。本日のまとめのところでも少しその話に触れさせて頂こうかと思わしたのですけれども、我々は動物をこの社会の中に持ち込むに際しては、私共が責任を持って対応すると、これが基本でございます。先程、神戸の一市民というご発言がございましたけれども、獣医師は日頃からこの研鑽もしております。当局も最新の学識を出来るだけ早く取って、皆さん方に周知徹底するという形で進めてございます。ただ、学問としては、アレルゲンの物質がどうだこうだという事に付きましては、各論的にはやはりこれから取り組んでいくべき事やテーマも数々あると思わす。その中から、例えばアレルゲンの種類とかが出てきた訳でございますけれども、人の性格がそれぞれ違うように、人や動物の体の性状も多分違うと思わす。一人ずつみんな違う。人と動物の組み合わせの違いによってアレルギー反応の有無や強度に違いが出てくるかもしれない。それほどに複雑な世界なのかと感じた次第でございます。どうも有り難うございました。

#### 山岡

ちょっと、宜しいでしょうか。今のお話を聞いてて感じたことなのですが、人間の子どものアレルギーばかり私には診てまいりましたが、それはストレスとか環境によっても起こるわけですね。とするとそういう動物のアレルギー、(ちょっと本題からずれてしまうと思わすのですが、)というようなことも発生しうるのではないかなと思わすのですが、動物、例えば回虫を駆除するだとか、病気を防ぐとか、飼い主が感染を防ぐために(本来は動物はそこらで走り回っているのが普通だと思わすのですが)室内で綺麗に綺麗に飼うというようなことが行われた場合、動物のアレルギーが増えていくのではないかなという気もちょっとするのですが、実際に動物の病気を診ておられる獣医師の先生方でそういう印象の方はおられますでしょうか。

#### 柴内

これは私達もとてもよく感じていることですが、獣医療の中では勿論このストレスによる消化器障害とかアレルギーもストレスという意味から増えてくるのは当然だと思わす。現状で私達が最も多くみますアレルギー症状やアトピーといったことの最大の今の理由は繁殖です。間違った繁殖といわすか、日本では大変残念なんですけれども、動物、例えば犬と暮す方が個性が無いんです。流行にのりまして、流行にのった犬種は駄目になると言われる位に、例えばゴールデンという名前が出ますと一斉にアウトドアを夢見て皆がゴールデンを飼う。ゴールデンが沢山売れるので、遺伝的疾患等は全然考えないで、どんどん繁殖する。そういうことから、人と楽しい幸せな生活が出来るはずのゴールデン・レトリバーさえ、性格的な間

題が発生して来るようなことさえ起こってきています。アトピーなども、いわゆる遺伝性の結果からゴールデン・レトリバーとかシーズーなど、そうした人気犬種に殺到することによる繁殖の問題から起こるそうした疾病は非常に顕著に出てきているということを申し上げておきたいと思います。その狭い所でということになりますが、これは飼い主の意識の問題でして、狭い所でも群れの動物ですから飼い主と一緒に暮らすことはとてもよいことで労力も伸びます。あとは飼い主が選び間違えて運動もしてあげられないのに、大きな犬と暮らしてしまっ、動物が運動不足から来る行動学的または自分で自分の皮膚を傷めてしまったりするといったような、精神的・身体的病気は大変発生が多くなってきてもおかしくないこんな風に見ておりますが。

#### 質問者

防衛医科大学の横山というもので、私は精神科医なのですけれども、ヘッセルマー先生にちょっとお聞きしたい事があるのですが。アレルギーのところ動物を使うというこの考え方がですね、世界でかなり研究されて今から主流になっていくものなのかということ。こういう研究はすごく変わり者がやっているだけなのか、世界からいうと、もう皆がこれに注目をしていて、つまりアトピーだの何だのと今すごく子どもに多いですよ。ですから、これで将来的にはなるべく乳幼児は動物を飼うようにしようとか、そういうふうな未来があり得るのかどうかということを知りたいのですが。

#### ヘッセルマー

どういふ風な種類のアドバイスを親御さんにペットを持つために与えるべきなのかというご質問でしょうか。

#### 質問者

乳幼児はむしろペットを飼った方が良いと話を持ってきたのか、それともアレルギーのある人はペットを飼わない方が良いと話を持っていていわれているのか、そのところがちょっと知りたいのですが。

#### ヘッセルマー

わかりました。何年か前ですけれども、ペットを飼うということが簡単だったのだと思います。これは一つの答えでしたよね。しかしながら、今問題が非常に大きくなってきている。単に動物と住むだけではなく、ハウスダストであるとかそういう事によって喘息やアレルギーは起こるわけです。色々な研究を行いました。即ちペットを持つ方が良いというような研究も行った。そして実際にこれに対しても、例えばその様なアドバイスを只単に与えるわけではありません。犬や猫を新生児に対して与えることは良いのかどうかという研究は未だやっていないのであります。ですからスウェーデンでもう既に猫や犬を飼っている場合は、それを飼育しなさいと。子どもが産まれた場合でも飼育しなさいと。しかし猫や犬を飼ったことが無い場合はおそらく最初のアドバイス、即ち、少し待ってどういふ風になるかを見てから飼いなさいと言いたいと思います。犬や猫を飼って、そしてアレルギーになって、そして又犬を売らなけれ

ばならないということになってはならないのです。この様な研究は誰もやっていません。即ち子どもが産まれてから、犬や猫を飼ったらどうなるかという研究はやっていないんです。ですから、もう既に飼育している場合はそれを続けて飼育する事は良いかもしれませんが、プログラムの問題の中には、たとえば社会の中でたくさん犬や猫がいると、そしてアレルゲンに触れてアレルギーになってしまうと、そうしますと親御さんに対して、例えば老人用の施設であるとか、アレルギーでない高齢者が居る場合は、これらの問題を一緒に考えるということが出来ます。そして色々な問題をこれから解決していこうというのがその動きなのです。しかしながら、色々な側面があります。ですから、勿論それぞれの場合に応じて考えなければならぬ。既にアレルギーで、そして今まで飼育したことが無いと言うのであれば、それは薦めないということになります。

#### 藤田

今の事なんですけれども、多分ヘッセルマー博士は知っておられると思いますけれども、実はヘッセルマー先生と同じ様な仕事はアメリカでも色々な所でもやられております。ヘッセルマー先生とは多少違う観点からやっておりますけれども、小さい時に飼っていた方がアレルギーが少ないというデータが出てきています。それで、だから飼った方が良いという形で持っていくのかどうか分かりませんが、少なくともヘッセルマー博士だけではなく、アメリカでも最近そういう事をやっている論文が沢山出てきています。単にそのアレルギーになってしまった人はもう山岡先生がおっしゃるように飼うのはまずいかもしれませんが、その前から飼うということ、アレルギーになっていない状態で飼うということは、飼わないよりはアレルギーになる率が少ない。その理由がどうかという事で、ヘッセルマー先生に私お尋ねしたいのですが、宜しいでしょうか。確かに1歳未満の時、それからもつと後でも、動物を飼っているとアレルギーになる率が少ないというデータがアメリカでもいっぱい出てきていると思いますけれども、原因はいわゆるアレルゲンにクレランスになった結果なのか、あるいは動物を飼うことによって色々なバクテリアと共生することによってアレルギーが抑えられるのか、そのどちらだと思われませんか。

#### ヘッセルマー

非常に難しいですね。どちらもだと言えらると思います。共生するためにはバクテリアと触れますし、特異的な耐性があるとも考えられます。それから、この特異性の耐性ということもあるわけですよ。暴露されている。そしてどちらもが必要になってくる。即ち、特異性も、非特異性も必要になってくるということです。

#### 植村

従来から、動物がヒトに対してアレルギー反応を起こす危害因子であると言われてきました。それに対し、ヘッセルマー先生のお話は、子どもの頃に動物と身近に接していればアレルギー反応を減じることができると言う研究結

果のご紹介でした。藤田先生のお話にも同じような考え方が含まれていたと思います。また、医療現場における実情や討論の中でも出ておりましたようにアレルギー問題には、未解決の問題を抱えております。したがって、何でもかんでもワンちゃん飼いなさい、猫ちゃん抱きなさいと言う訳ではないのかなと思います。

それにしても、本日のヘッセルマー先生のお話は、子どもの動物飼育は有害とする従来の考え方への反証で、皆さま方の注目を集めました。今回のレビューは、世界における研究の現状を知上で大変役立ちました。日本の関係者も大いなる刺激を受けるものと思います。藤田先生のお考えもあわせて、人と動物の共生を目指す私共にとって、心強い限りでございます。同時に、私共が心しなければならぬこととしては、中嶋先生のご指摘がありましたようにやはり動物から来る疾病もある。これは正確に分析し、そして整理し、皆様方にお示しするという、そういう行政面の仕事がございます。又、山岡先生は医療現場で患者さんに対して、的確な治療指針をご提示されて大変なご苦勞をされているという事だったと存じます。本日は、4名のパネラーに於かれましては、遠くから来て頂きまして貴重なお話を頂きまして本当に有り難うございました。これからも、益々先生方のお仕事を更に発展させて頂きまして、私共の進めている動物と共生する健康な社会を作るために、今後とも、お力添えを頂きたいと思っております。

会場の皆様におかれましては、本当に長時間にわたりまして活発なご討議頂きまして有り難うございました。これで、私の座長としての勤めを終わらせて頂きたいと思っております。マイクを司会者にお返しさせて頂きます。

話題提供

『子ども、動物、人道教育』

ジュリー・バンク 米国マリコパ郡動物保護・管理施設 公衆プログラム  
&開発部 部長



皆さんこんにちは、ジュリー・バンクと申します。今日「りぶ・らぶ・あにまるずシンポジウム」でお話できることをとても嬉しく思います。今日プレゼンテーションをする時に私自身の人生を考え、動物が私にとってどれほど重要かということを考えていきたいと思ひます。もう15年も動物の仕事をしております。動物シェルターで働いており、6万3千匹の動物が毎日ここに行き来している訳なんです、この動物というのはストレスを持ってシェルターにまいります。家が無い動物、虐待されていたり、または動物の数が増やされたりという色々な問題があります。それ以外は私、とても幸せに暮らしてありまして一緒に家族と共にペットを飼うということはとても嬉しいことです。みんな笑って喜んでおります。そして動物の顔も人の顔も喜んでおります。またスタッフの人も喜んでおります。家族の人があどけない目をしたむく毛の犬を見た時、とても嬉しそうな顔をしております。



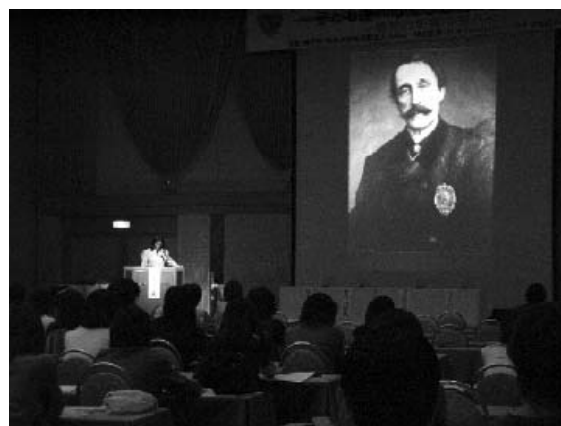
図表 1

どんな日でも家に帰った時にはとても疲れております。ストレスもありとても疲れているんですけども、しかしドアに入ってそして私の茶色のあどけない目をした「ペイズリー」という犬を見た時、気持ちが落ち着くんです。私の上に飛びかかって来てそして数分遊んでやりますと全ての私のストレスが消えてしまう訳です。とてもいつでもそして真剣な形で私を愛してくれております。彼女を見るだけで嬉しくなります。骨の折れる仕事を一時休止し、そしてその夜、楽しく過ごすことが出来る訳です。「ペイズリー」についてお話ししたいと思ひます。私日本に来ている間とても寂しく思っております。ですから「ペイズリー」を紹介したいと思ひます。これが「ペイズリー」です。(図表 1)「ペイズリー」というのは雑種でして特別の犬でもありませんけれども、でも私をとてもハッピーにしてくれる可愛い犬です。今日のお話で私が申し上げたいのは、人と動物の絆についてであります。そして人道教育プログラムについて動物と

人との間のプラスの関係を培うということについてお話しを致しますが、マイナスの関係についてもお話しをしたいと思ひます。野生動物などの伴侶動物などの関係についてお話しを致します。

この伴侶動物との関係というのはずっと昔からありまして、例えば狩猟の時にも動物も使われておりましたし、食べ物を確保してくれたりまたは敵から守ってくれたりしたものです。また我々の家族の一員にもなってくれた訳でもあります。このようなポジティブなことを考えた場合にはアシオン先生の新しい本を思い出しますが、そのリストの中に「無条件の家族の愛を提供してくれる」また「ユーモアを与えてくれる」これを見ただけで笑っちゃいますよね。動物は無条件の家族の愛を示してくれますし、また毎日毎日の責任感を負わせてくれます。ずっと家族の一員でもありますし、色々な人間関係に迷った時も、一時的に休息させてくれます。また、物理的なサポートもそして感情的なサポートも与えてくれ、また、一人ぼっちという気分も救ってくれる訳であります。動物はマイナスの側面もあります。例えば今日の社会で我々が直面しております暴力のサイクルに捕まって犠牲になっている動物もいます。このような問題を話す時にある程度のバックグラウンドの情報をお話ししたいと思ひます。

動物福祉愛護法というのがアメリカの方にあるんですけども、それと教育プログラムについてお話ししたいと思ひます。



図表 2

ヘンリーバーグという人ですがこの人はロシアへの米国大使でありました。(図表 2)1866年の当時であります。彼は馬車に乗っておりました。馬車が停まりました。馬が疲れていたからです。もうそれ以上一歩も進めなかったんですがドライバーが降りて馬を叩いて進ませようと致しました。ヘンリーはこの馬が痛がっているのがわかったんですが何もすることが出来ませんでした。アメリカに戻って、同

じような虐待の行為がみられているということで行動を起しました。力のある人にロビー活動をし、そして虐待禁止法を通過させたんです。また彼はまずアメリカで最初の動物愛護協会を作りました ASPCA であります。私は幸いこの組織のために 10 年間も働いており多くのことを学んでおります。ASPCA そして新しい法律では次のようなことが可能となります。人道的な条件で現在あるドッグシェルターなど、これはただ犬を寄せ集めて安楽死させるようなそういった施設を替えるということを致しましたし、また農場の動物、また労役動物、こういった飼育を放棄された動物を助けております。ここで動物が治療されているところを子ども達は見ています。また新しく通過した法律でありますけれども、これは意図的な動物虐待を違法としています。ご覧のように新聞の記事から取った物です。先ず最初にヘンリーはもう気が違ったんじゃないかと思いました。多くの人々がヘンリーのアクションを読みそして聞くことによって彼を支持するようになりました。また動物は保護が必要であると思いました。しかしながら動物というのはそれを表現する手段を持っていないんです。動物に対しての人道的な態度、行動というのがこの社会で始まった訳であります。この時代は子どもを保護する法律もありませんでした。



図表 3

1874 年～ ASPCA が作られて 8 年たった後～ヘンリーバーグスのオフィスでメリーエレンという女の子に同情を示しました。(図表 3) この子どもは虐待されそして養父にハサミで切られていたんです。これが実際に使われたハサミです。メリーエレンがハサミで切られたところですが、どうしてこんなことをされたのかということ ASPCA が行って、調査したところ見つけた物です。メリーエレンの安全を守る為の嘆願書を出しました。動物が保護されるのと同じように彼女も守られなければならない。我々は動物王国の一部なんだからということで裁判所は、メリーエレンを新しい安全な環境の元に連れて行くことを命令致しました。ジョージエンジェルはヘンリーのメッセージを更に延長して導入してまいりました。親切であるとか尊敬というメッセージを子どもに伝えるということでアメリカ愛護教育協会というのを創りました。ここに於いては人道的なメッセージを伝える為の文献の重要性を唱えました二つの古典があります。一つは「ブラックビューティー」です。これは虐待された馬の話です。もう一つは「ビューティフルジョー」という本でこ

れはとても有益なものであります。迷子の犬に対しての共感を教えるものであり、また犬の観点から書かれているものであります。法律が追加され、これによって動物愛護教育というのがカリキュラムの一部になりました。会議に於いて政治家、先生達にエンジェルは聞かれ、どうしてそんな法律が必要なのか彼は答えました。指導者の心が人道的な形で行動するようになり子ども達が人道教育を受ければこんな法律は必要無くなると答えました。1882 年ですがアメリカのコミュニティーに於いてはこの愛護教育のコンセプトを採用するようになりました。これは小学校で、ニューヨークです。これは 1900 年のものであります。この子ども達というのは動物を愛するというメッセージを受けております。1883 年ですが「バンズオブマーシー」というクラブが出来ました。メンバーシップは 7 万人の子ども達が参加してありまして、また先生達の部門もありまして動物に優しくするという、これが現代の使命の一部であるということ認識しております。このクラブのモットーは「神に栄光を地球に平和をそして全てのものに善意をそして危害を加えない生き物に対しては親切に」というモットーであります。1900 年になりまして、動物保護そして愛護教育というのがどの家でも聞かれる言葉になりました。最近のことですけれども全米の PTA で次のようなことを言っております。正義、親切、動物に対する慈悲ということに対して教育を受けた子ども達というのは人に対しても親切で正義を成しそして思いやりを持つものである。このように若い人達を教育することによって、同情心を持ち人道的になり、そして法律を守った良い市民になるということあります。もう沢山の人道教育が行われておりますけれども全ての人の教育であります。リスクを負っている若者達、また障害を持った人、また監獄に入っている人、学校の子ども達、家族の人達、どんな人達の為にも行われる教育です。

それではここで、少し立ち止まりまして皆さんと人道教育とは何なのかということ、同じ理解を持っているのかということを確認したいと思います。人道教育という定義ですけれども、これは数年前にアメリカ人道協会によって主催された会議でもって定義されたことを申し上げたいと思います。

次のようなものです。まず人道教育ですけれども人生の尊敬、そして同情、敬意そう言った価値を創造するプロセスである。いわゆる生物とそして世界のそうでない物との間の動的なダイナミックな関係を理解することです。そのネットワークの中の個人の役割、責任を理解すること、そして人道教育は戦略や方法論を持って、この個人の中の変化に影響を与える経験を提供するというものがあります。まあこれは非常に言葉でもってわかりにくいかもしれません。どういうことかということでトップテンのリストをここでお知らせしたいと思います。人道教育とは何なのかということ優しい言葉で説明したいと思います。

まず 10 番目から。学ぶ事、学習であるということ。学習は非常に個人的なものです。これは子ども達が動物と一緒にいる機会、これを提供する訳です。彼等が社会の中で動物に関して触れる機会を得ること、その前に

はそれ以前の知識であるとか、或いは学習スタイル、経験なども知っている必要があります。子どもがまず動物と一緒にいるところを見る。(図表4)ここでは介入もしない或いは話し掛けもせずただ単に彼らを見るということが必要です。



図表 4

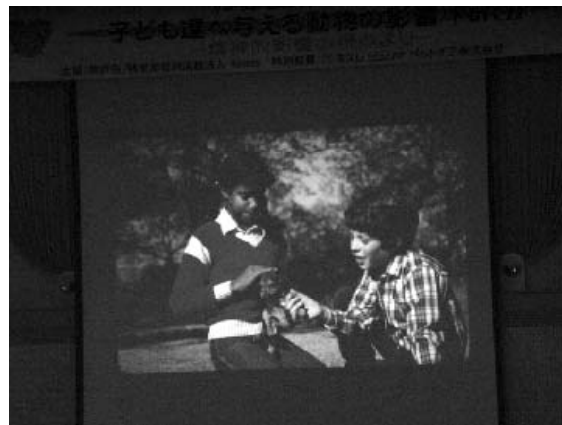
子ども達がどれほどワクワクして喜んでいるでしょうか、そこを見るんです。そして彼らがどういう事を話すかを聞くんです。そうすることによって子どもが自分達は何なのかということを理解することができます。生きている動物、これは子どもに学ぶ機会を与えそして感動させます。そしてこれは動物だけで無く自分たち自身も子ども達は学ぶことが出来る訳です。それでは我々の生活の中で見ていきたい訳です。勿論ですね動物は我々に対して喜びや楽しみをもたらしてくれます。そしてこの動物を我々のプログラムの中に組み込みます。特に困っている人々に対してのプログラム、例えば介助動物です。聞いたり、或いは見たりするようなその為の介助動物としての役割も持っています。彼らは療法士なんです。そして家族の一員でもあります。そしてもう一方では動物も家族が遭遇するような子どもの虐待であるとか、高齢者の虐待であるとか、或いは家庭内暴力などといったそういう暴力のサイクルにも遭遇する機会があるということなんです。まあ非常に悲しいですけれどもまあこの様なプレゼンテーションの中ではこういった事実を見せなければならぬということがあります。



図表 5

動物虐待という事が今起こっているということで事実をここで見せたいと思います。悲しい画ですけれどもここで見せなければならぬということなんです。(図表5)勿

論ワークショップはこの後あります。アシオン先生からのワークショップがあります。動物虐待であるとか動物虐待の背後にある理由などとかのお話があると思いますので、私は詳しくこれについてはお話し申し上げません。人道教育は子ども達が動物を理解する為のものであり、子ども達がただ単に社会問題をこれによって解決するという訳ではなく、個人にとっても非常に癒し、治療の意味があるということなんです。



図表 6

9番目ですけれども人道教育は優しさについての教育であります。まさにですね幾つかのスライドがありますが若者が、この迷った動物を助けるというようなところがスライドで出て来る訳ですが、(図表6)人道教育というのは即ち他の人を助けるということを教えるものなんです。即ちお返しを求めるから行う訳ではなく、これは正しいから優しくしようということなんです。親切を与えようということなんです。自分がやりたいからやるということなんです。子ども達が動物を助けた時は、必ず誉めてあげて下さい。子ども達が自分達が健全な成人になっていくというそのプロセスを助けて

くれます。しかし覚えておかなければならないのはポジティブ或いはネガティブ、プラスやマイナスの感情も呼び起こすということなんです。例えば家族がですね、動物に優しくしなくても良いというようなことを言えば、おそらく残酷的な行為が現れてくるでしょう。人間教育というのは子ども達がプラスの経験、動物とのプラスの経験を通して優しくするというのを学ぶ、マイナスの経験を通してではなく前向きなプラスの経験を通して優しさを学ばなければなりません。人間教育、人道的教育は人間のことを学ぶことでもある訳です。自分達自身を再評価することが出来る訳です。沢山の人がおられると思います。この二つのネズミのペットを持ってるんですけども、私は非常に楽しんでいますが、日本人の方にはどう映るかわかりません。ただ単にこのパーセプション認識を学ぶだけではなく、いわゆる動物や動物についての間違った認識を持っているのではないかということ、これを再評価しなければなりません。社会的に受け入れられるからといってこれが正しい訳ではない訳です。ヘンリーバーグの前は、その動物に対して無慈悲な行動をする事も良かった訳ですけれども、今日ではそれは法律で禁じられています。アメリカの社会も動物の

扱い方が変わってきました。或いは動物管理プログラムも変わってきたんです。過去はこのような形でした。今はこのような形ではありません。勿論、市民の安全、これが最も動物管理プログラムの中では重要なんです。勿論、攻撃的な動物から守らなければなりません。しかしながら二つの目的がこのミッションにあります。

私の働いている機関ですけれども、この様なミッションステートメントがあります。即ちマリコバ郡のペットと人々、人間の健康と安全と福祉を促進しよう。我々のテーマと致しましては、人とペットを共に調和させることによって健全な環境を作ろうというものなんです。動物管理プログラムも勿論、人々の健全、安全というものが必要でありますけれども、動物の福祉という観点も必要なのです。我々のミッションステートメントの中にも謳っています。我々は人間と同じように動物も我々の消費者、我々のお客様であるとみています。それから人道教育プログラムですけれども、これは人間によって作られているということが重要なんです。動物によって作られている訳ではありません。ですから動物管理の問題なども、ただ単に動物を排除するというだけでは駄目な訳です。

それからアダプションプログラム、これは非常に重要な養子縁組プログラムなのです。我々は昨年、我々のコントロールプログラムの中で二万一千の動物を養子縁組させたということに、誇りを持っております。これは最も良い、最もベストな年でありました。しかしながらまだ一万の動物が残っています、まだ家が見つからない動物も残っている訳です。

それでは、8番目の方に行きたいと思います。まさに動物と人間の関係を更に深めて行こうということ。どれだけ依存しあうかということになります。

7番目です。これは成人と子どもの関係でもあります。子どもはロールモデル、まぬけなロールモデルなくしては優しくなることが出来ないんです。余りにも多くの子ども達が今虐待の状況を見ています。そしてそれが、その子ども達が虐待する子どもになっているんです。ですから成人、大人は彼らの偏見を取り除かなければなりません。子ども達はあなたの言っていること、あなたのすることを真似ます。そしてあなたの言葉と行動が合わなければ、子ども達は非常に混乱してしまうんです。大人は適切な、そして不適切な例、どちらも提供する必要があります。そしてうまくいけば誉めてあげることが必要なんです。大人はケアリング、思いやり、そして尊敬ということを言葉だけではなく行動で以って示さなければならない。それこそがロールモデルなんです。

それではここで、ニューヨークで一緒に仕事をした先生についてお話申し上げたいと思います。動物に関して、動物の尊厳に関して学ぼうという子ども達のプログラムです。そして我々これを行いましてから、このグループに話をしますと、その教師がですね、沢山の虫が床に落ちていたところを見て教師が非常にわめいて怖がったということなんです。そして30人の子ども達が、結局その外に行ってしまうてクラスで学んだ事を忘れてしまったという経験があります。ですからこれこそが良い経験なんです。教師も

重要なんです。教師も認識を持つことが必要です。そして子ども達にその教育をする時に自分達の認識もしっかり持って教育をしなければならないのです。

それでは6番目です。人道教育なんですけれども、これは動物に関しての教育です。実際の事実、情報、動物に関しての情報を与えなければなりません。神話であるとか或いは安全でない行為を教えるはいけません。そして動物のニーズを知るといこと、その為に時間を裂かなければなりません。これは肉体的或いは精神的なニーズを含めてです。我々、動物は全て食べたり、息をしたり、そして苦しみを感じる事が出来るんだということを理解しているでしょうか、私自身もそれが当たり前だと感じていたんです。そうしながら動物福祉で15年働いてきて、今現在それこそ当たり前では無いということが今わかったんです。この中では我々が動物のことを描写する時の言葉に気をつけなければなりません。動物に関しての描写が間違っていると、それは意味の無いもの或いは価値の無いものになってしまいます。我々が使う言葉に気を付けなければなりません。アメリカでは今非常に話されていることにガーディアンとオーナーという言葉があります。我々コンパニオンアニマルを話す時にガーディアンか或いはオーナーか、その言葉の定義などで今論議が巻き起こされています。ガーディアンとオーナーで尊厳或いはケアという意味から全く違っている訳です。即ち所有者と保護者ということでは全然、定義が違っているからです。

それでは5番目です。人道教育は感情移入に関しての教育であるということなんです。人道教育のプログラムは、人間が動物のニーズがどんなものであるのかを理解するという教育なんです。そして我々のニーズも何なのかということも理解しなければなりません。人道教育のプログラムの前向きな結果と致しましては、子ども達がどんどん利他主義、即ち自己中心的で無くなってきており、そして自分達の周りを見るようになってきたということなんです。重要なのは年齢に応じたツール、或いは技術、テクニックを使わなければなりません。社会勉強であるとか社会経験なども入れていかなければならない。それによって感情移入を発達させていくことが必要です。感情移入を促進する上で人間と動物の間の類似点を見ていく必要があります。これは非常に面白いスライドなんですけれども、実際にここを見ますと古い「ランパルム」という米国の漫画で出て来たキャラクターなんです。ここでも動物と人間の類似点が見れると思います。例えば動物と話す時は余りに擬人化してはいけないという風にも言っているんです。しかしながら、この中でも非常に面白いところがあるんです。新しい、例えば動物にサングラスをかけさせたり、或いは、ネコに服を着させたりということもありますが、まあとにかく人間と動物の中には類似点があるんだということも教えていきます。そして犬も社会の構造の一部である、或いは家族の一部であるということも認識させていく。そして動物も薬であるとか、或いは栄養であるとか医療が必要であるということも教えていきます。それから母性本能もあるんだということなんです。そして動物にも喜びがあるんだということ、特に優しい手で触られた時がそうです。それから

恐れや恐怖も持っていること、これは人間と全く同じなんです。我々が理解しなければならない違いですけれども、どのようにコミュニケーションするかというところなんです。残念なことに多くの動物達は自分達で問題を管理してるんです。即ち人間がですね、動物とコミュニケーションする方法を知らないからです。例えば犬ですけれども、犬はですね自分のボディランゲージで教えてくれます。例えばストレスを感じているということを教えてくれる。ほっといてくれということを知っている訳です。しかしながらその言葉を読めない場合はどうするか、そのボディランゲージを読めない場合はその犬達は噛むでしょう。我々のプログラムの中にはその噛むことを予防したりコミュニケーションプログラムなども含まれている訳です。

人道教育は尊敬に関するものでもあります。子ども達に対して全ての生き物が大事だと教えるのです。重要だとか可愛いだとか或いは人なつこいとか目的があるから可愛がるべきではないんです。全てを可愛がらなければならない。最近ある研究を知りました。ある動物についてどう思うか、そしてそれは何故かと尋ねたものです。わかったんですけど、過半数の人はコンパニオンアニマルの方が野生の動物や或いは農場の動物よりも好きだということがわかりました。その理由として上がったのは可愛いから、だからそれが良いんだと、気に入っている、小さい、言う事を聞く、従うからと、だから好きだという答えでした。そこで野生の動物だとか或いは農場の動物について聞きました。すると参加者達は、醜い、汚い、臭いと答えました。調査した人達というのは農場の動物のそばに行ったことは殆ど無かったんです。これは動物のシェルターです。ロチェスター、ニューヨークの動物シェルターです。この牛なんですけれども、もう最初からこの牛はずっといます。新しい管理者が来まして、これはもう醜いからこういう動物シェルターをこの牛が代表しているのはおかしいと言いついたんです。(図表 7)しかし沢山の手紙が地域の人達から



図表 7

来ました。この牛はもうまるで家族のように、そして様々なことを表してくれるのだから、非常に大切な牛なのだというような手紙が来ました。そしてここを訪れた時に家族で写真を撮ったと送ってくる人もおりました。ですから今日に於いては、ただこの牛は汚いとか臭いとか醜いとかでは無く、本当に仲間になってしまった牛でありました。それからもう

一つわかったことは、農家の人達です。牛とかニワトリとか豚を自分達の好きな動物の内に入れておりました。何故でしょうか、これらの動物によって生活が係っている、この動物達によって自分達が生活しているからです。他に興味深いことがありました。明らかに動物と共に過ごす時間が長い方が、或いはその動物のことをもっと知っている方が、より良い印象をその動物に対して持つ、悪い印象では無く良い印象を持つということです。そして動物の経験とか知識により、その動物に対する人の考え方というのが変わることです。そこで人道教育のプログラムでも子ども達が動物の価値がわかるように、そして暴力を振るったり、無視をするのでは無く思いやりを持って行動できるようにということを目指しています。

人道教育というのは責任についての教育でもあります。コンパニオンアニマルというのは人が作ったものです。勝手に生れ出たものではありません。日本では約10種の犬、素晴らしい犬で、これは日本で作られたものです。何時も我々はそのような新しい種を作ったことに対する責任を忘れてはなりません。何もそれだけではありません。まずペットを持つ前に色々よく考える必要があります。自分で自問してみる訳です。この動物のニーズに応えられるか、どの動物が自分に適しているのか、そして一生この動物のお世話が出来るかどうか。一旦ペットを持てば、もし病気になった時に医療のケアが出来るでしょうか、或いは不必要な妊娠を避ける為に避妊は出来るでしょうか、餌とか或いはトレーニングだとか、また仲間という意識を与えられるでしょうか。そしてまた法律に従って例えばある所では公共の迷惑にならないように行動を制限しなければならない、そういうことに本当に何時も従っていけるでしょうか。これらは責任あるペットの保護者として必要です。またこれはペットを持つ人だけではなく家族全員が気を付けなければなりません。子どももペットの世話を自分なりに責任を持って、みていかなければなりません。忘れていけないのは大人の介入だとか指導がなければうまくいきません。

特に私が動物のシェルターで見る一番悲しいことは、両親と子どもがペットをシェルターに連れて来るんです。大体子どもは泣いています。大抵私は親が言うのを聞きます。お前が世話をしないから連れて来たんじゃないかと。親がわかっていないことがあります。そういうことで子ども達に教えているのです。責任をこれは教えていることではありません。彼らがこういうふうなことによって、動物は使い捨てで良い、もう連れて来たので子どもはもうこの動物について全然気にしなくて良いんだよということを教えている訳です。忘れてはならないことは本当に教育をする人だけではなく、親も責任が非常に大きいということ、いかに子どもがペットの面倒をみるか親が大きな責任を持っていることです。

その次 2 番目です。人道教育というのは批判的な考え方についての教育でもあります。これは即ち動物の自然の中での役割を理解すること、また彼らに対する人の役割は何か理解することです。子どもにツールを与えてそして動物がどういうふうになるか自分達の行動の結果どういうふうになるかわからせなければなりません。ですからクラ



スのカリキュラムの中で、色々ニーズによって修正していけば良いと考えております。その様なリストを皆様にも将来またお分け出来ればと思っております。動物について、またその福祉についての情報というのはどのようなクラスのプログラムにも組み入れてゆくことが出来ます。

一つの例をお見せしたいと思えます。飛行機の中で考えたんですけど、例えば人道教育をこの読み物のクラスに入れる。人道的或いは愛護をテーマにした本、或いは動物の事実に基づいた情報を読ませる。そして沢山の本がありますが、多くの本で間違った情報を持っているものがあり、気を付けなければなりません。例えば私の住んでいるアリゾナ州でも美術館や或いは博物館があります。そして私はそのアリーナについて知らなかったので、アメリカでもニューヨークにアリーナが無いのでそれを調べたいと、美術館、博物館に行きました。そうしますとこのアリーナというのは豚の仲間だと書いてあります。もう一つは豚の家族ではなく仲間ではないということです。二つの本が一つの動物について、豚の仲間か或いは豚の仲間ではないかということで、私は二冊の本を手にとらなければわからなかったんです。こういう事が出ている訳です。しかし幾つか素晴らしい本はあります。素晴らしい本を使ってそして子ども達の愛護心を育ててやって下さい。更に作文のプログラムに動物愛護のものを入れてもいいかと思えます。即ち子ども達に動物を観察させて何か書かせるということです。何をしているか、動物が何を考えているかと思えますかというクリエイティブライティングのプログラムと言えます。こういうことで非常に動物を使って、色々子ども達に対して動機付けすることがあります。地理では、世界で動物がどういう風に扱われているのか探させましょう。地図を使って世界の異なった所に異なった動物が住んでいるとわかります。数学でも沢山の数学の授業におきまして動物をトピックとして使っていくことが出来ます。例えば絶滅とか或いは過密状態について、どういう風にしていけば良いか、一匹の犬、一匹の猫がいてそこに更にまた一匹来て、七匹来て七かける七で更に増えていく、本当に過密状態になってしまいます。その様なことを教える訳です。コミュニティにそんなに猫が過密状態になってしまつては困りますから。非常にこれは大きな本です。これは博物館にある物ですけど、これはメリーランドだったと思えます。子ども達が色々なことを動物について学ぶ訳です。政治も考えてみて下さい。法律の勉強です。動物を世界の様々なところで保護する為に、守る法律があります。日本の動物愛護法はどうか比較してみる訳です。様々異なった法律が世界中にあります。しかし段々と同じようなものの方向に向かっています。即ち動物に対して尊重してそして大事にしていきましょうという方向に向かっています。

さて人道教育というのはプログラムの開発でありましてそして適切な教え方によりまして、動物について理念も組み入れて行くことが大切であります。様々な異なった方向からこのようなプログラム開発を行って頂けます。様々なことを自問してみてください。このプログラムは学術ベースのものでしょうか、それによって動物を様々な系統だったカリキュラムとして紹介していくものなのでしょうか。このプログラム

は動物介在活動或いはセラピーベースのものでしょうかそして生きた動物をプログラムとして使うものなのでしょうか。或いはこのプログラムはセラピーについてというプログラムでしょうか、様々な動物を使って、そして個人の病気の治療などに使おうとするものなのでしょうか。このプログラムは上のものを全てを組み入れたものなのでしょうか。

さて、最後に我々がアリゾナで行っているプログラム TLC というものをご紹介します。これはティーチング・ラブ・コンパッション、即ち「教育・愛・共感」というものであります。これは元々は暴力予防プログラムでありました。シェルターの動物とそして問題行動をクラスで起こしやすいような子ども達とパートナーを組ませます。そして1か月子どもが犬のトレーニングをやりませます。そして引き取れる状態になるようにトレーニングする訳です。1日2時間1か月の間、色々なことを行います。最初の1時間はクラスで教えます。例えばいかに動物を家族の中に組み入れていくか、地理とか或いは作文とかそういうものに動物を組み入れていく。それから後の1時間は実際に教室の中で子どもに動物と触れ合せて貰うということです。そして1か月经ちますと犬も子どももこの TLC プログラムで非常にうまくいくことが多いです。その例を幾つかご紹介いたします。

ジェニファーという子です。

ジェニファーはもう学校をドロップアウトしかけの子でした。TLC というプログラムを始めました。非常にうれしいことに1か月後 TLC が終わった時にジェニファーは学校に来るようになりました。時間通りにそしてちゃんと宿題もするようになりました。

ライアの例です。

ライアは何時も家族のペットを虐待していました。更に調べますと過去にも動物虐待をしたことがあるということです。しかし後に最後になってお母さんが言ったんです。非常にびっくりしたと。ライアが非常に静かに猫を撫でながらテレビを見ていたということです。以前は猫を追いかけまして、いじめていたんです。1か月で変わったのです。TLC を行いました。ライアは猫を撫でるようになったのです。おそらく毎日動物で少しづつマッサージさせる、動物を少しづつ撫でさせる、静かにさせるということで動物と子どもとの間の撫で方がわかって来たんだと思えます。

それからビリーとウェスです。

いつもケンカをしていました。TLC を行いまして、チームとして一緒にチャンスという犬～非常に大きな雑種なんです～トレーニングするように言いました。一緒に協力しなければならなかったんです。そしてついにチャンスは言うことを聞いてくれるようになりました。

次にアンディという子の例です。

アンディは誰とも口を利きませんでした。先生によると自尊心も低かったということです。しかしこの最後の日にクラスの皆の前で立ち上がり、皆の前で発表しました。非常に元気な声でした。ハンバーのトレーニングをしたということです。新しい動物が新しい友達になったからです。このプログラムは本当に力があると思えます。

そしてジョンで特に効果が現れました。

ジョンは恥ずかしがりやの子でした。彼が5歳の時、両親

は彼を捨てて立ち去りました。今12歳でおばあさんと一緒に住んでいました。お友達を作ろうと努力しましたが、それが難しく学校の勉強も中々うまくいきませんでした。そこでルービーとパートナーを組みました。ルービーというのは中くらいの雑種の犬でした。ある日はクラスに来てルービーとの話をしてくれました。昨夜、夢を見ました。怪獣が僕を追いかけて来たんです。お母さんと呼んでも来てくれなかった。お母さんは絶対来なかったんだ。でも、ルービーが来たんだ。ルービーは怪獣を僕の為に追い払ってくれた。次の朝、この夢を見た翌朝のことです。ジョンはスクールバスに乗り遅れてしまいました。おばあさんは言いました。もう休んでも良いんじゃないかと。学校がそんなに重要だと思わなかったの、明日行けば良い、今日は休んだら良いと言いました。ジョンは、いいやそれは絶対駄目だ、休みたいくない、学校は休まない、と言いました。そしてカバンを引つつかんで2マイルも走って学校に行っただす。ちょっと遅れました。そこでドアからクラスに飛び込みました。そしてクラスにいるルービーに抱きつきました。そして抱きしめて昨夜君がいてくれたから今日は僕がここに来たんだよと言いました。僕たちはチームなんだから、もう引き取られて行くかも知れないけど、君が引き取られても僕は忘れないよということです。本当に力を与えてくれたということです。これが人のペットと目覚しい素晴らしい関係だと思えます。

いつも人々はこれは奇跡的だと不思議だと言います。もちろん不思議な部分、奇跡的な部分もあるかもしれませんが。しかしそれだけではありません。動物介在活動、或いはセラピーのプログラムというのは非常にうまくいっているケースが多いです。もちろんマジックのようです。しかしそれは魔法のように起こりません。色んなエネルギー、色んな努力、また色んな考えがあつて。またプロの方々が介在して、そして色んな人が、心理学者から、先生から、両親から、また子どもから皆が参加して一生懸命やる。チームとしてやる。そしてこのプログラムが成功する訳であります。

私は人道教育ということを経験して来ました。そして個人的にも色んな変遷を経験してきました。私の仕事の仕方自体も変わってきました。先ず最初に私が思ったのは先ず事実とか情報を与えるということ、様々な資料などを子ども達に与えると、本当にそれを子ども達が吸収して優しくなってくれたということです。長年経ってわかってきました。でもそれだけではだめです。一杯するべきことがある訳です。エネルギーも必要です。それは必要です。そして本当に驚くべき結果を生み出すのです。私思うんです。振り返って自分の経験、動物の経験そして如何に自分達が動物に学んだか振り返って下さい。我々の成長期、そして我々が今ここに在る状態になるまで、本当に動物が重要な役割を担ってきたと思えます。そこで是非皆さんにこういうことを考えて頂きたいと思えます。即ち出来るだけ動物を家族の中、或いは社会の、組織の中、クラスの中、或いは他の所でも良いです。コミュニティー全体でも、クリエイティブな形で動物を組み入れる、そして共存できるような形で考えて頂きたいと思えます。そのようなプログラムを考えて頂ければと思えます。私達のこのマリコバ郡にお

きましては、常に色んなことを考えております。動物をもっともっと、動物のシェルターが在りますけれど、そういう所の動物をもっと組み入れてあげようということです。それは非常に行くべき所は非常に良い所です。必ずしも悪い所ではないんです。博物館のようだと考えて下さい。私はまあ美術館、博物館の教育もやっておりました。そこで教えるべき事がシェルターでも可能だと思います。より創造的に考える訳です。そして動物をもっともっと前向きに捉えるということです。そうしますと、動物のシェルターももっと良い印象を持たれる所で、沢山の人が訪れてくれるようになると思えます。そして動物のシェルターを博物館のようにする。そしてみんな家族連れで是非行きたいと思うような場所にするということです。行きたくない場所ではなく行きたい場所にしたいと思えます。そうしますと、また人々の考え方、態度、そしてまた引き取りの状態とかも今後良くなってくると思えます。こういうことを将来考えていきたいと考えております。

それでは私の話はこれで終わらせて頂きたいと思えます。皆さんご清聴有り難うございました。

### 山崎

どうも有り難うございました。ジュリー先生の大変色々な情報にとんだ講演、皆様も非常に心とそれから頭両方で受け止めて下さったことと思えます。私の方からのコメントをちょっと手短かに致しますと、先生のおっしゃったことで一番大事なものは愛護教育、或いは人道教育というのは社会問題に対する根本治療であるという概念を、みんなが忘れないということだと思うんですね。実際の虐待の事例をみてこれは誰がやったんだ、どうしたんだというそういった具体的な例に対する対症療法というのは当然必要ですが、何故そういったところが起こって来たのかというところの根本治療というのは、やはり子どもの教育の中でやっていかなきゃいけない。根本治療は自然保護にも繋がり、動物愛護にも繋がり、それからひいていえば、人間社会を大切に作る人間を育てる為の根本治療にもなるということです。先生のおっしゃったことで皆さんにこれ一つだけ覚えて欲しいということは、ロールモデルという概念だと思えます。言葉で根本治療を語っても大人がロールモデルを示さなければ教育にはなりません。一番その中で気になるのは、例えば学校の先生の例をジュリー先生おっしゃいましたけれども、私をもっと気になるのは親御さんの例ですね。拾ってきた子ねこ・子犬に対して、家はアパートだから飼えないと言い切ってしまう。アパートだから飼えないの次に続く言葉は戻しておいでなんですね。でも戻しておいでというのは子どもはそのまま額面どおり受け止めません。行間にある或いは親の心にある面倒臭さ、これ私ひとつ係わり合いたくないなという気持ちは必ず読んでいます。ですからもし飼えなければ、それとも非常に状態が悪くて安楽死をしなければいけないということであれば、お子さんを親が説得して獣医師の所へ連れて行く、或いは愛護センターへの助けを求める。でも子どもと手をつないでその動物に自分達は飼えないけど、どう対処しようかというのを現場の親がロールモデルとしてやらない限り

は、命に対する感心というのは子どもの中では育たないと思います。やはりもう一つ最後におっしゃいました、マリコバ郡の愛護センターにずっと関わっておられて、現職のうちに、例えば去年は2万1千頭の里親探しに成功したという大変な業績を残しておられますけれど、おっしゃった博物館としての或いは、展示の場としてのシェルターの役割というのも今後の日本の課題だと思います。日本で一番必要なのは愛護のマーケティングなんですね。愛護センターというのは処分という、みんな暗い言葉で捕らえる。そうじゃないんですね。情報を得る場所、それからもしかしたら自分がまたない伴侶と出会える場所である。だから愛護センターに行くんだと、貰いたくなくてもただ見に行こう、職員の方の話を聞きにいこうという愛護のマーケティングが成功すれば当然、動物の貰われていく数も増えていく訳ですから、これから先生がおっしゃった博物館学に基づいた愛護のセンターの建設というのも日本の課題として、今は日本では民間でそれだけの資源を持ってやれる所は無いですから、当然行政の課題になってきますけれど考えて頂きたいなと思います。

#### 質問者

どうもお話有り難うございました。全米の動物シェルターの、まだ日本はこれからだと思わすけれども、状況とか、公的なものなのか、私的なものであれば連邦政府とか支援ですね、どうなっているだとか、それから数だとか規模だとかちょっと教えてもらいたいですけれども。

#### バンク

8千のシェルターがアメリカにはございます。この8千のアニマルシェルターの中で、プライベートなものもパブリックなものもあります。私が働いている設備というのはパブリックなものでありまして、マリコバ郡が所有しているものであります。またプライベートの愛護協会もありましてこれは寄付によって行われて、また他の協会は政府の援助によって行われているものもあります。また政府の機関がセンターになったというものもあります。政府の方が動物の福祉愛護が必要であるということを感じて、政府の機関がそういった役割を担っている所もあります。これは動物の管理だけでなく動物の福祉ということもやっている訳であります。これはコミュニティーにもよりますし、こういったセンターのサイズは違う訳であります。我々のセンターでありますけれども、マリコバ郡では、600万人の人口があるんですけれども、約4つのアニマルシェルターがありまして500匹の動物がそれぞれのシェルターに住んでおります。この数を申し上げてお分かりとは思いますが、6万3千匹の動物がいます。プライベートのところでは4万匹おります。他にも小さなグループで動物を救済しているグループがありまして、そこには1万匹の動物が保護されております。動物のシェルターだけでなく教育というのが大事であります。こういった所に、動物シェルターに動物が来ないように教育をすることが必要です。

話題提供

『子ども、動物そして感情移入(エンパシー)・感情の共有  
～虐待、暴力防止につながるか』

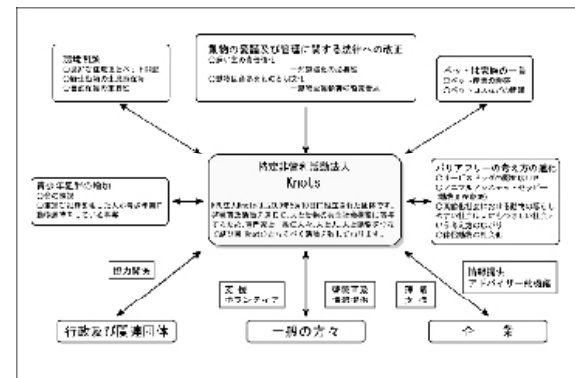
フランク・R・アシオン 米国ユタ州立大学心理学部 教授



皆さんお元気ですか、どうも今日の天気の良い日に室内での講演会に来て下さって有り難うございます。まず最初に申し上げたいと思いますのは、富永さん Knots の方にお礼を申し上げたいと思います。今日招待頂きまして、話をする機会を与えて頂き有り難うございます。私出来るだけ早くお話しをしたい。出来るだけ多くの情報をお伝えしようと思っています。まず最初に説明したいと思いますのは一体私がどこから来たかという事です。ユタ州のローガンという所ですが、これはロッキーマウンテンの端っこの所にありまして、ローガンという場所はソルトレイクシティのオリンピックが開かれた所から 80 マイル北にあります。谷があるんですけども、まあこのような神戸のような海は無いんですが、山に囲まれた所でありまして、谷はローガンという町があるところなんです。9万人の人口がございまして。そして大学がありまして2万2千人の学生がおります。とても大きな大学になっております。最初に1973年に来られた時には7万でしたけれども、今2万2千人となっております。ユタ大学では大学院そして学部と両方ありまして、また多くの外国からの国際学生が来ております。私自身の仕事の場所でありまして、これは教育学部にございまして。教育学部の中には先生の教育プログラムも含まれております。小学校、中学のレベルであります。また心理学の部分もあります。家族・人道教育といったものも含まれております。ローガンは私が生まれた所から離れた所でありまして、私今も遠く離れておりますけれどもローガンは私が育った所からとても離れた所にあります。

私が生まれ育ったのはニューヨークでありまして、ニューヨークのシンボルというのはこれは世界的なシンボルとなっておりますが、歓迎する意味、そして新しい人生という意味のシンボルでありますけれども、私のプレゼンテーションは私のお祖父さんに託したいと思っております。お祖父さんは自由の女神が元々建てられた時にはいませんでしたけれども、イタリアから移民でアメリカに1900年代にやってきました。お祖父さんは石を切る職人として育ちまして、この自由の女神の周りに作られた壁の石を作った人なんです。私はお祖父さんの思い出としてこの写真を持ってまいりました。何ヶ月も私の母が仕事をしておりまして、お祖父さんが私の世話をよくしてくれました。ですから私にとっては私を世話してくれ、そして愛してくれた人なんです。ですから私にとってもモデルである訳であります。この様に自己的でなく自分の時間を孫のために献身してくれたという良いモデルなんです。私の家族ですけれども家内も今日一緒に来ておりますけれども、3人の子どもがおります。もうみんな大人になっておりますが、我々青春時代をみんな切り抜けてまいりました。ティーンエイジャーの時というのはとても問題が多いものですが、まあそれを

何とか切り抜けて来る事が出来ました。そして10年以上の間、家に飼っております犬がいます。フレックルであります。フレックルは子犬の時に家に参りました。そして私達の子どもと一緒に育ちました。私達の家族の活動と一緒に参加して来ました。数年前ガンで亡くなりました。今は裏庭に埋められ、セントフランシスの像の元にあります。私の家族についてちょっとご紹介致しました。



図表 1

このプレゼンテーションをやります為に、私最初に申し上げたいと思うんですが、この情報を全部覚えて頂かなくてもいいんですけども、Knots の活動の表が出ております。(図表 1) 富永さんが Knots の情報を送って下さいました。そして Knots が取り扱っている色々なプログラムというのは環境問題であるとか、動物の愛護及び管理に関する法律の改正であるとか、ペットは家族の一員であるとか、また動物とどう風接したかということが青少年の犯罪と関係があるということ、こういったことを示して頂きましたけれども、今日私がお話ししますことというのは、この Knots の活動の一つ又はそれ以上に関わりがあるものです。私この分野で仕事をしておりますので、Knots もこれから社会の一員として動物を愛護するという活動もこれから成功して頂きたいと思っております。ジュリーさんが私の前にお話をされましたけれども、彼女が言ったことを参考にして私のプレゼンテーションを更に追加してお話出来る、又は抜かすことも出来るということで、ジュリーさんがもうカバーして下さいましたところもあります。私自身自分に聞いてみますと、この愛護教育、人道教育とは何なのかということなんですが、この質問の答えと致しまして目の見えない人で動物が何かという事を説明しなければならない時、12人の人がそれぞれ動物の色々な部分を触ってそして動物はどういうもの、この象はどういうものかというのをみんな違った意見を言った訳であります。この愛護教育というのは動物園みたいなものであると思っております。またはクラスに行って、そして動物の福祉プログラムのクラスに行って学ぶような

の、また身体的な、また感情的なものを学ぶものであります。そしてペットをクラスルームに置いて、そして動物のことを書いた本を読むとかということがあります。また象についてであります、こういったことの全てを含んでいると思います。ですからジュリーさんが言われた定義とよく似ていると思います。愛護教育、人道教育というのはこれは社会化するプロセスである、そして生きている人に対して思いやりを持ち、そして責任や尊敬するというそういった気持ちが発展する過程であるといえると思うんです。このような社会化のプロセスというのは我々自身の子ども達にも望むことであります。子ども達にも経験して貰いたいと思いますし、この世の中で達成して貰いたいと考えていることだと思えます。

我々の共通の夢でありますけれども、どの国でも同じだと思えますが、我々の子ども達には家に於いてはとても安全な場所であるという風を感じて貰いたい訳であります。また学校に於いては学ぶ所そして夢をみる所であって欲しいと思います。また自分自身の体についてこれは運動のプログラムなどを通して尊重するというのを学んで貰います。これは社会化にもつながるものであります。子ども達には他の人の体も尊重するというのを学んで貰いたいと思います。違いが在ると理解すること。そして障害があってもそういったものを理解する、そして思いやりを持ってグループのニーズを満たす、そして適切な時には責任を受け入れ、他の人には親切にすることです。

また子ども達には暴力という形を取らないで問題を解決して貰いたいと思います。他の人と協力して貰いたいと思います。また建設的な形で感情を表して貰いたいと思います。破壊的な形では無く更に私達の子ども達には動物に優しくして貰いたいと思いますし、また他の人の持ち物を尊重する、そして人と正直に接するというのを望んでいる訳であります。この様に我々は子ども達に対して望み夢見ている訳であります、こういったことが可能なのは社会の全てのレベルに於いて、個人のレベルに於いて、また子どもの家族、そして近所の人、学校、教会、そしてまた信仰グループそして社会のレベル全てに於いて協力が必要です。文化的な価値、社会の価値というのは我々大人がお互いに示すことによって、子ども達に示される訳であります。ですからこの様な協力関係というのが全てのレベルに於いて起こらなければなりません。

子どもと動物という問題であります、ここで皆さんに警告したいと思うんですけれども、今日一時間の時間では二つのプレゼンテーションをしたいと考えています。辛抱強く聞いて頂きたいと思えます。まず最初の部分でありますけれども特に焦点を絞りたいと思えますのは、愛護教育プログラムであります。そしてその評価であります。二番目の部分として申し上げたいと思えますのは、動物虐待の問題そして動物虐待と人間の他の問題とどのような関連があるかということであります。発達心理学の教育を受けた者と致しまして申し上げるのは、まず最初に発表された考え方というのは1800年後期、または1900年の初めにG.スタンレーホール(G. Stanley Hall's Adolescence)という人が考え方を示されました。動物の役割というのは子

も達の成長に於いても非常に重要なものであるということ、これは発達心理学の分野に於いても他の発達科学に於いても述べられたものであります。G.スタンレーホールは若い子ども達にとっても子どもの心とそして動物の心との間にギャップは無いと考えました。子どもというのは好奇心の強いものであります。世界をいつも好奇心を持って見ております。好奇心というのは動物にも向けられます。そして動物も同じような世界に好奇心を持っている訳であります。このように探索心を持った好奇心というのはこれは普遍的な現象であります。我々はこの様なフレッシュなエキサイトメントを子ども達の顔に見る時、幸せに思えます。今まで見たことの無い動物を見た時の嬉しい顔を見ると嬉しくなります。子ども達は動物に対してとてもオープンな形で愛情を示します。子ども達は大人よりもっとオープンな形で愛情を示しております。これはKnotsのシンポジウムが先月開かれましたその時に、話し合いがありました子どもと動物の関係に於いてのアレルギーの問題でありました。そして子ども達が動物から感染する病気があるという話が出たと思えます。ですから今日の聴衆の方でこのように動物から伝染する病気があるんじゃないかと、この写真を見て心配される方がいたらその心配はありません。

色々な情報が過去に於いてもございます。20年位の間私のこの問題について注意深く研究するようになったんですけれども、これはどのようにして子ども達と動物の関係が、子どもとそして人間関係に於いて慈しむ、他のものを察するという関係に於いてどのように関係するのかということの研究してまいりました。まず最初にお話ししたいと思いますのは、一般的な特徴と致しまして子どもが育った環境であります。これは動物に対してまたは他の人に対して親切にする、優しくする、そういった性格が育つかということなんです。子ども達というのは先ず自分自身が経験をすることが必要であります。優しくケアをされるという経験をすることが先ず必要です。先ず最初に大人の人がいちわりを持って子ども達に接する、そして家に於いてこの様な環境に育つと親がそういった役割を担っている訳であります。これはとても大事なものであります。この様な慈しみを育てて貰うという経験が無ければ、他の人の福祉ということは考えられない訳であります。これは家という環境の中で起こることです。また子ども達は規律も必要です。また責任も必要です。今朝ちょっと心配してたんですけれども、このプレゼンテーションをすることこれは日本人の方達ばかりにする訳なんですけど、何故心配していたかと言いますと、日本における文化に於いては何十年の間、感情的、他の人の感情的なニーズに合うような形で反応することが必要であると強調されてまいりました。特に日本の子ども達というのは責任、他の人に対する責任ということが、強調されています。日本の文化の中に於いては私とても謙虚な形でお話しをしているんですけれども、私専門家がここに来て話しているというのでは無く、実際の専門家の人は皆さんの中にいるのだということなんです。ですから皆さんはしばらく私と一緒に日本の文化についても完全に理解できるようにお助け頂きたいと思えます。

規律というのは彼らが自分達の行動に対してどのように

責任を負わなければならないか、他の人に対してどのような行動を取らなければならないかに責任を持つことであります。このような責任感というのは自分の家庭の中に於いて生れてまいります。そして家庭の外に於いてもその様な責任を遂行致します。

また、我々が理解しなければならないのは、子ども達のムードまたは感情的な状態がどういふものであるか、そういった状態が他の人にどのように与えるかであります。例えば子どもがとても悲しかったり落ち込んでいたりした場合には、子ども達というのは自分のニーズだけを考慮して他の人の気持ちを推し量ることが出来ません。子ども達を守り、悲しい状態または落ち込むような状態に置いてはなりません。子ども達のその様な感情というのが慢性的なものになった場合には、これは子どもが他の人を思いやるのがとても難しくなります。同じような形で子ども達が認識しなければならないのは、自分達の行動によって何らかの結果がもたらされるということです。例えば動物のケアであるとかまたは動物の治療をするとかありますが、マーガレット・ニードという病理学者が言っておりますけれども、最悪の事態というのは子どもが動物を虐待をして、そしてその虐待をした結果を見ないことであります。適切な行為をした結果マイナスの結果になったのか、またそしてプラスの行為をしてプラスの結果が得られたかどうかの認識が必要であります。

発達状況の中にいる子どもにとって、或いは思春期の子ども、それよりも若い子どもにとっても、動物は非常に大きな影響を与えます。例えば子どもだけがいるという場合、コンパニオンアニマルを自分の兄弟のように扱うということがあります。即ち孤独から抜けられる為に、一人っ子は特にその動物を兄弟のように思う訳です。それからもう一つ重要な因子、重要なファクターですけれども自立に対しての信念を持てるということです。子ども達に教えていくことで、彼らは、ポジティブな前向きな自信を持てる訳です。そして自分達も変化する、向上出来るということになります。それに自信を持つ訳です。ジュリー・バンクさんもおっしゃいましたように子ども達はモデルが必要なんですね、即ち自分達の周りに何か例が必要なんです。どのように行動するか他人にどのように優しさを表現するかというモデルが必要なんです。こういった例を示されて初めて、自分達は練習する機会を或いはハサルする機会を与えられる訳です。時には、他人に優しくする或いは助けるというのは自然にやってこない場合もある訳です。そのためのトレーニングも必要になるということになります。特に親切、或いは人々に対して思いやりを持つという、そういう気持ちを発達させるプロセスの中には、色々プロセスを分けることができます。

まず他人の苦しみを理解することなんですけど、これは人間であれ動物であれ同じなんです。まず他人の苦しみは子どもが理解しなければならない訳です。即ち知的レベルでもって理解する、認知しなければならない。どうしてこの動物が苦しんでいるのかということを理解しなければなりません。それからもう一つ必要なんですから、感情移入しなければならない。即ち感情でもって理解しなければならないということなんです。それはどのように動

物が感じているか、失望感或いは苦しみをどのように感じているかという感情移入ということになります。これらが一緒になる訳ですね。そうしますと子どもの中の個人的な苦痛になる訳です。即ち子ども自身が自分自身で苦しみを感じたり、或いは悲しみを感じたりするようになる訳です。動物の気持ちがわかるようになる訳です。ここで何かが起こります、即ち子どもがこういった気持ちを避けたいという気持ちになってしまうことがあります。時には例えば人の苦しみ、他人の苦しみ、或いは動物の苦しみというのが非常に強い場合は、子どもが抱えられなくなってしまいます。このような状況の場合は子ども達はそれから逃げてしまいたくなります。例えば大人でもそうですね、非常にひどい事故があった場合、そういった経験を忘れてしまいたいと思うでしょう。しかしながらその中で実際に対処していこうという、そういう部分もある訳です。即ち同情を持つ、或いは共感を持つ、或いは助けたいという気持ちになるということです。それでもって行動に向かう訳です。即ち認知し、そして感情移入をするということが必要です。感情的な理解も必要であり、そして知的なレベルでの認知が必要、そしてそれが更に同情、共感へといきそして社交性のある行動へと向かうということになります。



図表 2

例えばここですけれども、この真ん中の赤ちゃんを見て頂きたいと思います。(図表 2)この幼児ですけれども、もう一人の幼児が泣いているところに対して反応しています。感情的なコンポーネント、構成要素が既に働いています。しかしながら知的に認知することはまだ理解出来ない訳です。行動でもって助けることも出来ない訳です。即ちなんとか手を差し伸べているのは事実ですけれども、まだ助ける行動まではつなげていないことになります。これは初期の段階です。しかし更に年齢が上がっていくにつれて共感を持つようになってくる訳です。即ち彼らは能力が出てくる訳です。何かが出来るという能力、感情を感じそれを行動に結びつけられると、他人の苦しみを理解しそれを助けていけるという能力が出て来る訳です。まあこういったことが私のプレゼンテーションでお話したいことです。

さてここで、いつも我々が直面する問題なんですから、例えば動物に対する共感、それから人間に対する感情移入というふうにある訳ですけれども、これらがいつも両方があるものなのかとか、大体同じレベル、程度でもって

それが存在するものなのかということなんですけれども、これはいや、そうではないというのがお答えなんです。同じ程度でもってある訳ではありません。ですから可能性がここに色々示されている訳ですけども、例えばどのようになっているかという、人々の中には人間に対しては非常に感情移入は激しいけれどもしかし動物には余り興味が無い、動物はちょっと怖いんだという人もいます。或いは動物との経験が少ないと、動物がまわりにいなかったからだという事もあるでしょう。まあ動物に対する感情移入というのは非常に少ないということになります。或いはもう一方の人々は非常に動物に対しては感情移入は激しいんだけど、しかしながら人間と相互作用しようとする、あまりうまく出来ないという人がいます。あまり人間に対しては感受性が豊かではないという二つの可能性がある訳です。それからもう一つ別のカテゴリーです。非常にコンパッションは大きいんです。即ち人間に対する感情移入も動物に対する感情移入も同じぐらいあるという人。こういった我々のサークルはこれが同じように広がっていけばという風に思います。これが左の上の所です。最後右の下の所ですけども残念な数字、残念な所なんですけれども、これらの人々は人間に対しても動物に対しても共感が無い感情移入が無いという人々であります。おそらく今まで発達しなかったのかもしれないし、或いは最初の感情移入が懲罰にいつてしまった、或いは無視された、或いはあまりにも苦しみを経験するような環境にいたからというのがあります。それで結局、自分自身しか見なくなってしまったという経験があります。ですからシンプルな形ですけども、人間に対する感情とそれから動物に対する感情、それらの程度がどの程度のものかというのを示したものであります。(図表 3)

		Human-Directed Empathy	
		YES	NO
Empathy toward animals	YES	Generalized	Specific
	NO	Specific	Absent

図表 3

それでは一つの例なんですけれども、どれだけ共感、種の間でもこれだけ共感が保てるということ、同じ種でなくても即ち動物に対しても、これだけ人間は共感することが出来るという例であります。

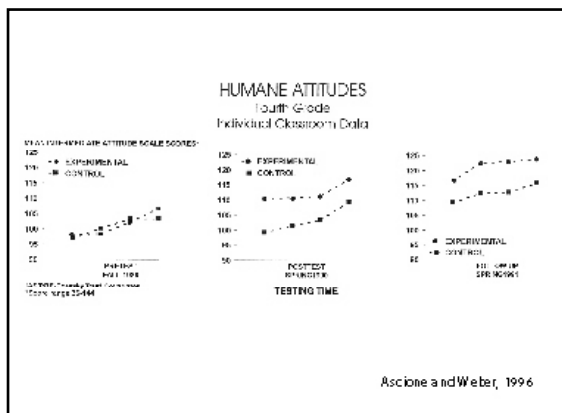
さて、人道教育、愛護教育では勿論数多く家庭で行われるということなんです。動物がどのように扱わなければならないかという教育は家で行われることが多い訳です。コンパニオンアニマルがいるかどうかというの、それは家庭にあるかどうかになりますから、家庭で或いはその保護者によって行われることが多い訳です。しかしながら子ども達は、この教訓を学校でも学ぶことが出来るのです。この画

ですけどこれは日本の学校では無いというのが明らかです。日本の学校というのはもっとオーガナイズされてもっと綺麗ですよ。特にこの画とは違っている訳ですけども、実際にその愛護教育、人道教育が学校で行われているところもあるのです。ジュリーさんがおっしゃいましたように学校のクラスルームで行われる、或いは社会環境で行われるプログラムがあります。数年前ですけども米国の団体から、評価するように頼まれたのです。彼らの人道教育のプログラムはどうかという、その評価をしてくれということだったのでそれについてこれからご報告したいと思います。

さて、我々が色々インタビューしたのですけれども、学校で行われる人道教育は、前向きなプラスの影響、即ち子どもの人間や動物に対する感情共有の発達に関して、プラスの影響があるかどうかなんですけれども、全米人道教会のカリキュラムによるものを評価致しました。このカリキュラムは、小学校のカリキュラムなんです。学校で行われているカリキュラムでありまして、我々が調査致しましたところで、我々の調査に携わった4年生の子ども達を対象にしたものだけを今日お話申し上げたいと思います。他の年齢或いは他の学年になりますとわかりませんが、4年生であるということです。そしてこのプログラム、或いはカリキュラムもブレンドされた形であるということなんです。ジュリーさんもお話されたように、この別のトピックスとしてこの教育、人道教育を行うのではないのです。動物愛護であるとか、人口過剰であるとか、動物の扱い方、様々なことはこれは相互に関係があるのです。数学的なものもあるし、読書の時間でも良いし、地理の時間でも良いし様々なこととつなげて行うというのがこのカリキュラムなんです。そして実際、我々はこのような実験的なメソッドを使った訳です。無作為に、4つのクラスルーム、無作為の4年生の生徒、人道教育を受けている4つのクラスルームをあてまして、それを実験クラスと致しました。それから4つのクラスルームこれは特に人道教育を受けなかった通常授業を受けた子ども達ということでこれらを較べた訳です。実験グループと対照グループというふうに分けました。人道教育、愛護教育のグループ即ち実験グループのところですけども、大体人道教育を40時間位受けている生徒の集まりです。1年の学校の1年度のコースで行われたんです。これによりまして教師も実際この活動に参加した訳です。そして焦点を当てたところですけども、ジュリー・バンクさんもおっしゃったところで人道教育のゴールというのは、人間以外の動物のニーズに対する感受性はどうかという点に、焦点を当てたんです。動物に対する人間の感情移入はどれぐらいか、これにフォーカスを当てて調査を行いました。全てのクラスルームの子ども達とその質問用紙、アンケート用紙を配られます。動物に対する感情移入、或いは人間に対する感情移入に対しての質問です。そしてこれは通常は年度始めのプログラム、カリキュラムが行われる前にこのテストを与えます。それから今度は年度の最後の方に、このプログラムがみんな終了してからこのアンケート用紙が渡されます。それで皆がこれに記入する訳です。それからこのプログラムが終わって、1年後にまたこの調査を行います。そして実際1年後にも影響力があるか、

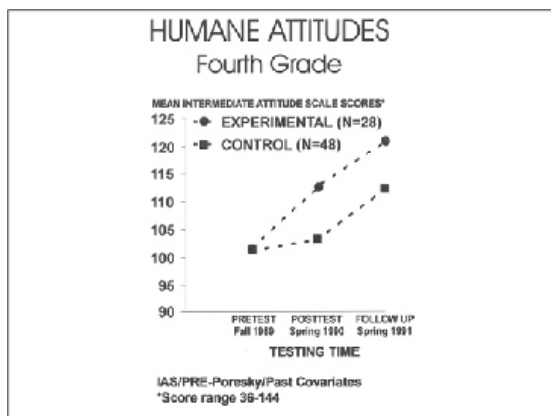
改善されたことは維持されているかというのを見る訳です。そして勿論この評価の対象となりますのは、動物に対する共感と人間に対する共感であります。

このプログラムを始める前です。これがそれぞれのクラスルームでもって示されたデータです。(図表4左のグラフ)



図表 4

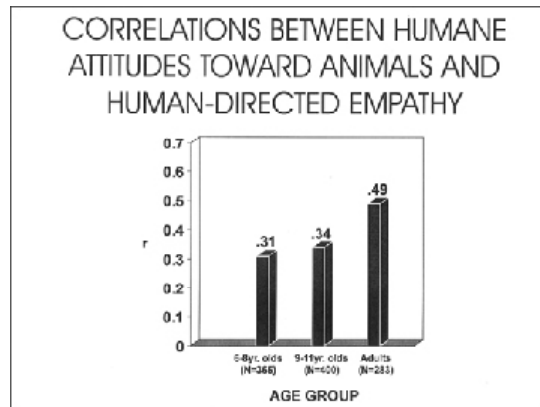
ここで見て頂きたい所はこのデータの中でプログラムが始まる前はどうかだったかなんです。8つのクラスルームでは大体同じような挙動を示していたんですね。動物に対する共感、感情移入も、この8つのクラスルームが大体同じ位でした。しかし、実際にこのプログラムが終わってどうかというと、実際にこの人道教育、愛護教育を受けた子ども達はかなりこの動物に対する感情移入が高まっている、共感が高まっていることがわかります。(図表4中央のグラフ)そして受けて無い方も、それ程上がっていないけれども上がっていますが、受けた方が非常に劇的に上がっている。そして人間に対しての感情移入の方も上がっています。さて1年後はどうかというと、4年生から5年生に上がって5年生の最後にもう一度評価致しました。(図表4右のグラフ)そしてこの人道教育の影響は、まだ維持されていた、効果が維持されていたということになります。まあ実際に子ども達の感情移入というもの、これが変化している訳です。これは一時的なものではなかったとわかります。即ち少なくとも1年間は維持されているということで、非常に我々にとってはわくわくする結果でありました。



図表 5

全部見てみますとプログラムが行われる前、そして行われた後はこのように上がっています。(図表5)そしてまだ

高くなっているのが、動物に対する共感も1年後も上がっていることを示しています。これは平均的なことを示している訳です。即ち非常に相関関係が上がっているというのがわかります。成人は勿論、動物に対する共感と人間に対する共感の相関関係というものが高い訳です。ですから我々この図から致しますと、(図表6)子どもの時に経

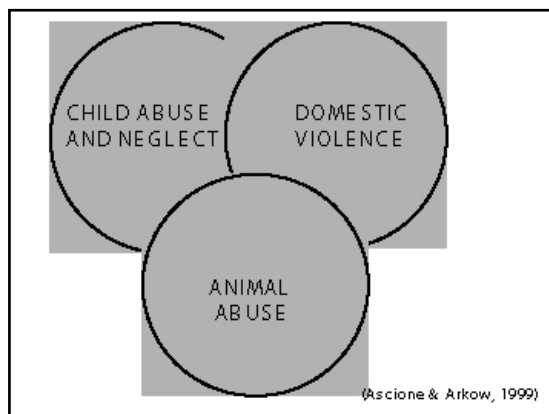


図表 6

験したその寛大さというものが成人になっても非常に改善されている、伸びているというのがわかる訳です。

人道教育、愛護教育は何なのかということ、これはいわゆる保健衛生に対する認識を高める為としても使われています。既にジュリーさんが学校のお話をなさったと思いますが、子どもはその動物に対しての慈しみという気持ちを学ぶことによって様々な動物に関する問題も解決することが出来る、社会に於ける動物に対する問題も解決することが出来る訳です。保健衛生ですけれども、まず一次予防、それから二次予防、それから三次予防と保健衛生には3つの予防があります。まず一次予防では何をするかというと、我々は全てのコミュニティーのメンバーに対してのプログラムを与えるというものであり、最初から問題を解決していかうというものであります。即ち米国におきましては、スモールボックスが例えば予防接種等を行うという、新しくペットを飼う人にとって狂犬病に関する予防接種を行うようにというふうに教育を与えています。ですからこれは非常に重要な一次予防のところなんです。それから二番目のところですけれども、クラスルームベースの人道教育と書かれています。これも一次予防の領域に入る訳です。それから二次予防ということになります。二次予防とは何かと。ここでは先ず問題を起しそうなリスクのある人は誰かと、そしてこういった子ども達に対してフォーカスを当てて二次予防をしていこうということなんです。例えば動物虐待ですけれども、実際自分達が虐待を受けている子ども達は動物虐待を起すというリスクがある訳です。全ての人がそうだという訳ではありませんけれども、このリスクが非常に高いと言えます。ですから私は、いわゆる一次予防の方法のアプローチでは、これらの危機に瀕する子ども達を助けることは出来ないと思し上げたいと思います。即ち二次予防をしなければならぬのです。それから三次予防は何かと。もうすでに問題を抱えている子ども達、既に動物虐待をしている子ども達に対して、どのようなアプローチをしていかなければならないかというのが三次予防なんです。非常に重





図表 7

篤な問題を抱えている子ども達です。こういった子ども達というのは更なる介入が必要となってくる訳です。

私のプレゼンテーションの2番目のところに移りたいのですが、動物虐待です。これは人間の暴力にも関連するところなんです。さてここで皆様にご提案したいのは、例えば子どもが虐待を受けている、幼児虐待を受けているということ、それから家庭内暴力が右側の円の所、そして下の所には動物虐待とそれぞれがオーバーラップしているのがわかります。(図表 7)我々としてはまさにこの動物虐待を他の部分とオーバーラップしているのを科学的な手法で調べ始めたところです。これが、どのような現象を持っているかご報告したいと思います。



図表 8

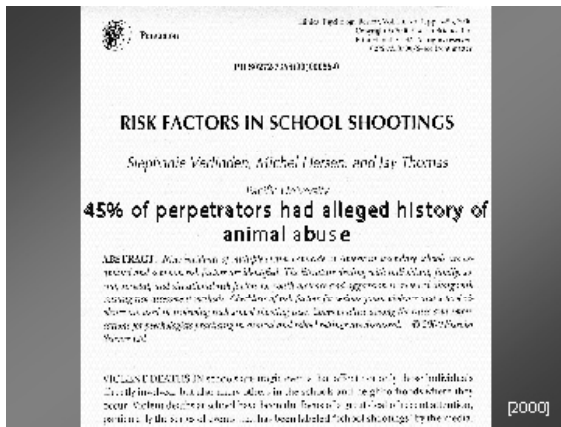
4つの記事のタイトルなんですが、1年前に出版された物です。(図表 8)これはイギリスの獣医ジャーナルによるものですが、ヘレンマンローサが出版したものです。彼の同僚も一緒に行ったのですが、どういことをしたかという、スコットランドの1千人の獣医、英国の1千人の獣医に対して質問した訳です。彼らの所に持ってこられた動物達の状態はどうだったかと。獣医はこの動物が傷を侵したというのは、偶発事故による損傷では無いという疑いを持っている場合です。そして最初のスタディ、この調査ですけれども、質問することによって調査を始めた訳です。そして約半分の獣医がこの統計に答えて、はいあります。オーナーが動物をクリニックの方に連れて来たけれども、これは偶発事故による損傷では無いということがわかった。誰か人工的に損傷を与えたというものであると。そ

してこれは小児科に対しても大きな衝撃でありました。小児科の方では、何年間も親が自分達の子どもを意図的に病気にさせて、そしてドクターの方に連れて来るというのが信じられなかったんですが、本当に起こっているんですね。例えば親の方が自分の子ども達を意図的に病気にさせて、メディカルケア医療の場に連れて来るというような、うそつき癖とか作弄的な病気をを行うのです。これが動物にも同じように表れている。即ち犬や猫が病気でもないのに病気にさせて、その獣医の所に連れて行くということがある訳です。そしてこういったことを検証して、実際にまた動物が性的虐待をオーナーから受けているということもあると言われています。最後のパーパーなんですけれどもマンチハウゼンシンドロームという、ミュンハウゼン症候群というものであります。これは人間の子どもでもそうなんですけれども、介護者ケアテーカーの方がまさに子どもを病気にみせるというものです。子どもを意図的に病気に見せて、メディカルスタッフ、医療スタッフに診せるということです。これは実際獣医の方でも、動物に関しても同じようなことが行われているのがわかった訳です。そういうことを獣医の方が答えている訳です。これらの記事が載せられている訳ですが、この記事を見ますと実際に動物の福祉、或いは児童の福祉というものが非常に損害を受けているというのがわかります。

それでは一般的に研究結果で今までのところどういう風になっているか、この分野での予想をご紹介したいと思います。まず動物の虐待でありますけれども、これは対人暴力と関係がある。人同士の暴力と関係があるということです。なにも常に動物の虐待の結果、対人暴力が生れるとは言っておりません。しかし強い関係があるということでもあります。二つの形の暴力では共通点があると。アメリカでは残念ながら1990年代、あまり遠くない過去でありますけれども、非常にショッキングな学校での銃撃事件がありました。その中で最も酷かった例、忘れられない例というのが、若い男の子ルーク・ウッドムという男の子が出て来まして、自分の母親をまず殺してしまいました。それから学校へ行っただけです。そして学校で2人殺人しました。他にも沢山の人が怪我を負わせました。1997年の10月1日に起こりました。多くの人達は知りませんでした。実は同じ年の4月だったんですけど、ルーク・ウッドムと友人達が犬を虐待して、この子の、自分のペットの犬を虐待して殺してしまっただけで、それを日記に書いていたんです。彼は如何に犬が苦しんでいるのを見るのが素晴らしかったかということを書いてます。そしてこれが初めての犬を殺した経験だという風に書いています。このように自分の犬を殺してしまっただけで、虐待してしまっただけで、これは近所の大人達が見ておりました。しかしこれを警察にも報告しませんでしたし、或いは動物愛護局の方にも報告が一切ありませんでした。そこで我々自問しなければなりません。もし、誰かがこの男の子に何とか注目していれば、こういう風に動物虐待をしているところで何とかしていれば、母親を殺してそして他人を殺すということを予防することが出来たのではないかと。答えはわかりません。しかしここで非常に慎重にお話していかなければなりません。謙虚にならなければいけま

せん。皆様方もやはり同じように子どもが動物を虐待して殺してしまふ。それがまた更に対人暴力の方に行ってしまうというケースがあるでしょう、ですからこういうことを覚えておいて下さい。これを注目しておくべきであります。

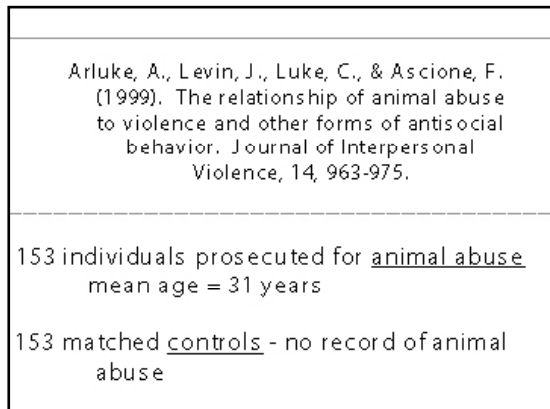
これはアメリカで出された研究ですけれど、(図表 9) 学



図表 9

校での銃撃に対するものです。ここでわかったのは、この様な学校銃撃を行う子どもの約半分は既に過去、動物に虐待を加えていたということでありませぬ。ですから常にこういうことがあるというのではありませぬが、しかし起こりがちということでありませぬ。

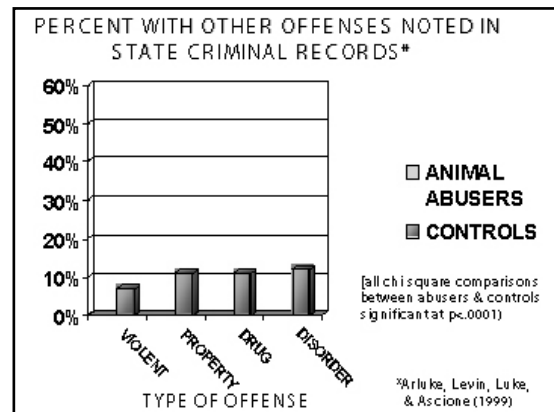
更にまたこの重要性を強調したいと思ひます。マサチューセッツの方で動物の虐待予防という研究が行われておりました。そして記録を 10 年間に渡ってつけていたのでありますけれど、この 10 年間の間に 153 名の個人が動物虐待で訴追を受けていたというのです。(図表 10)



図表 10

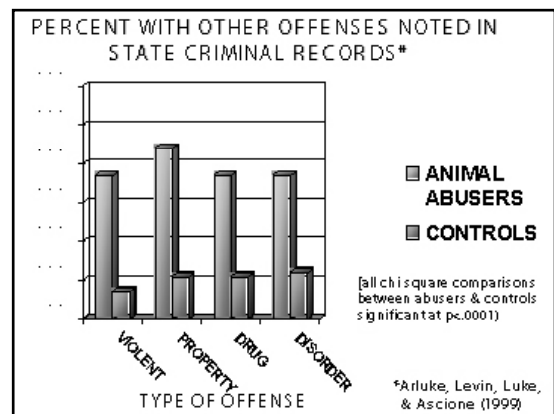
動物虐待です。これはそれぞれが物理的にそして積極的に動物に対して害を与えた、ニグレクトとか無視をしていたことではありませぬ。飼い主としての世話をしなかつたのではなく、色々危害を与えてしまったということ、起訴された訳です。そうしますとこのような場合は非常に罪としても重いことになりませぬ。そしてマッチングとしまして、153 名という人達がコントロールとして選ばれました。そしてこの動物に虐待を加えた人は殆ど男性でありました。そしてそれぞれの住所で、ランダムな形で 153 名のマッチング出来るコントロール群、或いは対象群として、教育の背景はどうか、経済状況はどうか、住所はどうか、住んでる住所

はということと同じように全く動物虐待の記録が無い人達を選びました。コントロールとして選びました。勿論本当のところはわかりませぬ。しかし記録上このコントロールとして選んだ人達は、動物愛護局によつても動物虐待の記録が無かつた訳です。そこでコントロール群と虐待したグループを較べました。マサチューセッツのこの州の犯罪記録を遡って調べた訳でありますけれど、その結果次のようなことがわかりました。暴力的な犯罪であるとか、財物に対する犯罪、麻薬とか、或いは不正行為などで逮捕された、そのような犯罪記録を調べていきました。



図表 11

これはコントロールグループ、即ちこの人達は動物虐待をした記録が無かつた人でありませぬ。(図表 11)10 人当たりの 1 人が逮捕されておりました。10%です。しかし同じような逮捕記録を調べてみました。



図表 12

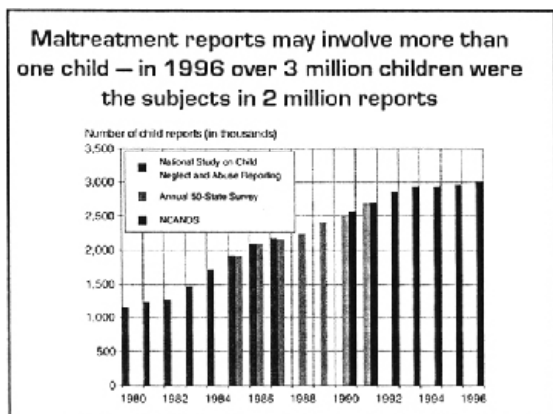
こちらは動物虐待をした人達でありませぬ。(図表 12) 3 倍から 5 倍犯罪を犯したという記録があります。同じ犯罪でも 3 倍から 5 倍多くなつておるといふことなんです。これはさほど動物が大変好きだということでも無くても、動物を虐待するのであれば気を付けなければならぬ。動物に対する罪が今度は人に対する暴力ということに加速される心配があるからでありませぬ。また動物虐待は問題行動、例えば放火等とかとも関連付けられて考えられておられます。例えば心理学とか、或いは精神医学、或いはソーシャルワーカー等をしていらつしやる皆さんであればもうご存知かもしれませぬ。放火というのは問題行動の一つでありませぬ。特に

若い子どもにとってはこれは非常に重要な問題です。更に大変若い小さな子ども達が放火するというのは好奇心からということがあります。或いは十分な監督が無かったからです。しかし、心配すべきケースとしては放火がやはり何らかの心理的な障害から起こってしまう。そこは私達十分考

**"He's had a history of setting small fires as well as chaining neighborhood dogs in his backyard and abusing them. His mother...claims she never knew about the dogs because she never went out in the backyard."**  
(14 yr old, p. 83)

図表 13

これは若い男の子、少年の記録でありますけれど、(図表 13)この子は小さな放火ですけれども起こす、そのような経験がありました。それと同時に近所の犬を裏庭に連れてきて虐待するという癖もあった訳です。そんな犬のことは知らなかった、私は裏庭には行かなかったから知らなかったと母親は言っておりました。ここで二つのことがわかります。即ち時には動物虐待と放火というものは関連付けて考えられる。それからもう一つ、時には親が知らないというケースがある。子どもが何をしているか親が知らないという場合がある。親にこのことを聞いても、もしかしたら親も知らないということでわからないかも知れません。動物虐待は今、様々な社会的な問題などを診断する時に社会心理学とか或いは精神医学で使われております。1987年からこの動物虐待というものが、この様な診断マニュアルでアメリカ精神医学協会が使われるようになりました。またこれは今、WHOにおきましても国際的な分類として載っております。これが非常に大きなインパクトをこの分野に与えました。この様に記載があるというので、やはりこういう子ども達に対して我々はもっと注目しなくてはならない。また、こういう傾向がある子ども達に対して我々はもっと気を付けなければならないとなっております。また子どもで自分



図表 14

が虐待を受けている子どもも、また動物虐待に関わっている可能性が高いということです。アメリカにおきまして子どもの虐待というのは大きな問題です。皆様もご存知だと思います。こちらのデータで出ていますけれども、益々多くの子どもの虐待が行われております。

最近の研究としては1996年のものでありますけれど、既に300万人以上の子ども達が被害者であります。(図表 14)虐待の被害者です。しかしこれに関しましての記録が動物虐待に関してはありません。わからないんです。どれだけの動物が虐待されているか数はわかりません。そこでこの問題が良くなっているのか、益々悪くなっているのか、或いは変わっていないのかわかりません。そこで私が一つ勧告したことは、やはり記録を取っていくことであります。アメリカでは、我々は子どもの虐待に対して記録を取るまではこの問題の深刻さがわからなかったんです。同じようなことを動物虐待に対しても行っていく必要があります。皆さんはやはり子どもの福祉では一生懸命努力は行われていると思います。中村先生とか或いはその他の先生方と会議でお会いすることが出来ました。子どもの福祉に関する報告が約1年前に厚生労働省の方から出ました。(図表 15)

約1万7千例の様々な形の子どものニグレクト或いは虐待などが行われている見本であるということです。ですから勿論、状況は細かいところは違うかも知れませんが、アメリカも日本も共通点があるのです。

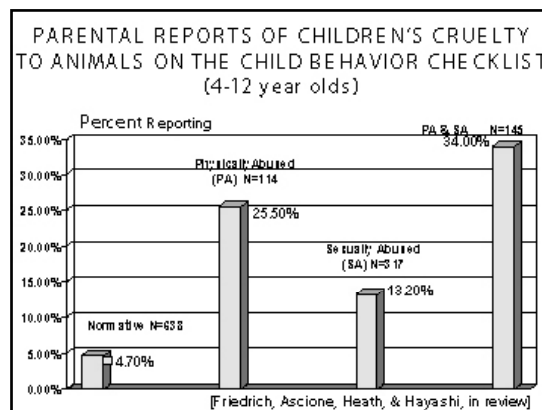
次にご紹介したいところは一つの評価の結果です。(図表 16)子どもの動物に対する虐待で親に対して聞きまし

JaSPCAN Report (2002) : Yasuhide NAKAMURA, Yoshiko HIRATA, Toshihiko YANAGAWA, Yumiko KIRINO, Koji MINEMOTO, Yuka OKADA

[Report from Japanese Ministry of Health, Labor, and Welfare, 2001]

In the year 2000, there were 17,725 cases of child abuse and neglect: 50% physical  
36% neglect  
10% psychological  
4% sexual

図表 15



図表 16

た。正常な子ども、この精神障害などの問題が無い子ども達に対して、子どもが動物に対して今まで過去6ヶ月間いじめたことがあるか、虐待したことがあるかを聞きました。正常な、或いはその様な臨床問題を持っていない子ども達におきましては5%の親が、聞いた親の5%は子どもが動物をいじめたことがあると言いました。そしてこれは5%というのは十分考えられる数だと思いました。今度は同じ質問を肉体的に或いは性的に虐待を受けた子ども達、そしてまた両方の虐待を受けている子ども達はどうかと調べましたところ、そのパーセンテージは動物虐待のパーセンテージが非常に優位に高くなってきています。全ての虐待を受けた子ども達が動物を虐待するというわけではありません。しかし虐待された子どもの方が虐待されなかった子どもより動物虐待に関わりやすいということです。

もう一つご紹介したい例があります。それは更に別の例ですけれども、動物が身体的に虐待されるというだけではなく、動物が実際に性的に虐待されるという時もある訳です。そこで皆さんにもお話しておきたいと思います。何故このことを我々、深刻に考えなければならないのでしょうか、私は考えております。この獣姦、或いは獣性と言いますか、人間とそれから動物との性的関係ということは本当に嫌なトピックだと思います。しかし何故これが大切か三つの理由をご紹介したいと思います。まず一つ目、子ども達の中にはもしかしたらこのようなことにさらされている、例えば大人のポルノ、ポルノグラフィ等によってこういうことに実際にさらされている子どもがいるかもしれない。そうしますとそれを真似をする可能性がある。ポルノグラフィ等を見て真似をする可能性が出て来る。二番目の理由と致しましては女性で例えば家庭内暴力の犠牲になっている女性、そういう人達からの報告があるんです。夫、或いはボーイフレンドが彼女達に対して強制的に動物に性的関係を持たされたということです。勿論これは本当に恐ろしいことです。動物にとっても本当にこれは忌まわしい出来事です。そしてもしこれを他の家族とか子どもが見ていたらどうすれば良いのでしょうか。本当に深刻な問題です。三つ目の理由、時によって子どもの少年性犯罪者がいます。まず最初に性的に動物を虐待する事を始めた。それから他の子どもとか、或いは青少年期の人間に対しての性的虐待を始めたということが報告されています。ですから本当に嫌なトピックですが注目していかなければなりません。私、ユタ出身なんですけれども最近この様な事件がありました。若い男性なんですけれども、この人が非常に美しい鳥類舎といいますが、珍しい鳥が飼われている所に入り込み、2羽の珍しい鶴に襲いかかりました。そして性的暴行によって殺してしまった訳です。10年後、この人はまた逮捕されました。若い女性をレイプして逮捕された訳であります。これはおそらくこういう関係というものを私達しっかりと考えて行かなければならないと思います。

動物虐待ということを考えますと、やはりまず何故子どもがこういうことをするか理解しなければなりません。子どもがこんなことを行う動機とは何なんでしょうか。介入のプログラムを行っていくにしても、どの子どもにも当てはまるような一つだけの介入プログラムというのは不可能です。例え

ば同じ医療法が様々な異なった病気に効くという訳ではありません。やはりそれと同じくそれぞれの動機によって介入方法を変えていくというのが大事です。そこで資料として作り出したものがあります。こういうことがご必要でしたらご連絡頂きたいと思います。何故子どもは動物虐待をするのか。好奇心がある、知りたいというのがあります。それからまた例えば、仲間がやるから、仲間こそそのかされてとやるというもあるでしょう。更に動物虐待をするには退屈したからとか、或いはエキサイティングでそして面白いから虐待するのも知れません。そして更に麻薬等を使って、他のことも使って更に加速するかも知れません。更に大人にもあると思います。様々な動機によって動物虐待が起っております。そこで先ずこれを理解して、それから如何にこういう子ども達を助けていくか考えていく必要があります。

#### DEVELOPMENTALLY-RELATED MOTIVATIONS FOR ANIMAL ABUSE

- ◆ CURIOSITY/EXPLORATION
- ◆ PEER REINFORCEMENT [e.g., gangs]
- ◆ MODIFICATION OF MOOD
- ◆ FEAR/COERCION
- ◆ FORCED PARTICIPATION
- ◆ IDENTIFICATION WITH AGGRESSOR
- ◆ POSTTRAUMATIC PLAY
- ◆ IMPLEMENT OF SELF-INJURY
- ◆ REHEARSAL FOR HUMAN VICTIM
- ◆ INSTRUMENT OF EMOTIONAL ABUSE

図表 17

こちらにはプログラムをご紹介しております。これはTLC。先程ジュリーさんからご紹介のありましたプログラムと非常に似通ったものであります。(図表 17)こちらは子ども達、リスクの在る子ども達に対して行うものです。(図表 18)これは二次的な予防プログラムです。リスクの在る子

De Grave, J. (1999). People and animals learning: The PAL Program [pp. 410-423]. In F.R. Ascione, and P. Arkow (Eds.), Child abuse, domestic violence, and animal abuse...

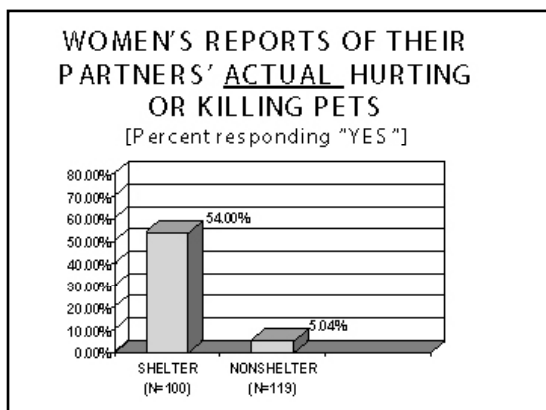
• at-risk children train abandoned shelter dogs to be more adoptable

図表 18

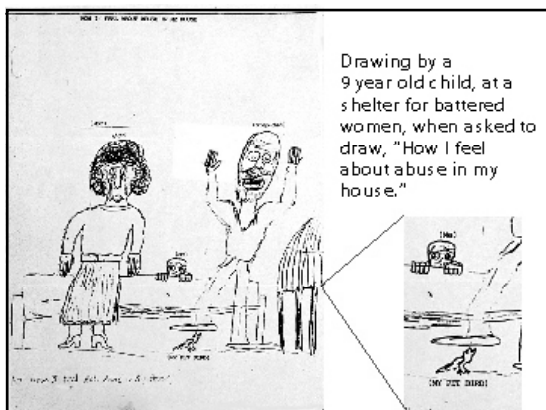
ども達に対して今までのやり方を替えるように、より健全なそしてより成長方向として好ましい方向に替えていってやろうとすることです。そして如何に動物の虐待が家庭内暴力と結びついていくかというお話をしてみたいと思います。

私、あるリサーチを行いました。これはドメスティックバイオレンス、家庭内暴力のシェルターに安全を求めて来

た女性達の調査をしました。もう酷い虐待を受けていて、夫に或いはボーイフレンドに虐待されて安全な所を捜して来た女性達です。この問題は非常に重大な問題としてアメリカでは捉えられております。1,500以上のシェルターが既にアメリカにはあります。本当に重大な問題です。こういう人達に対してインタビューをしました。約100人の女性に対してシェルターに来た女性、大抵子どもを連れていますが、こういう人達にインタビューをしました。それと同時に100人以上の女性で、こういうDVの家庭内暴力の経験したことが無いという女性に対しても調査をしました。そこで色々な質問を聞いた訳です。一つの質問の例をあげますと、あなたのパートナーは今までペットを傷つけたり殺したりしたことがありますかという質問をしました。(図表19) そうしますと、虐待されていない女性では5%がYESと答えました。しかしながら虐待されている女性におきましては、半分以上がYESと言いました。パートナーが動物虐待もしたということです。非常にこれは高いパーセンテージです。そして子どもやはり悪い影響を受けているということです。



図表 19



図表 20

これは家庭内暴力の状況を描いて下さいと言われて描いた訳です。(図表20) 自分はソファの後ろで泣いています。女性も泣いています。そしてこれは継父、義理のお父さんなんですけれども叫んでいます。そして右の所を見て下さい。この義理のお父さんが子どもの鳥、ペットの鳥を踏みつけにしているのです。子どもは非常にペットに対して愛着を持っています。一体心を持っています。この

子どもにとって最も酷いことはこういう家庭内暴力の在る家庭に住んでいるということです。そしてペットの鳥はどうなってしまうだろうと何時も恐れた暮しをしていかなければならないということです。

もう一つの例ですが、これはまた別の子どもが書きました詩です。(図表21)「あまりにも沢山のペットが死んでしまいました。だからそのことは書きたくない。そのことはもう言えない。

**I had too many pets that died.**  
**I really don't want to write about it.**  
**I can't tell you about them either.**  
**I just don't want to.**  
**It makes me too sad.**  
**The door is closed.**  
**Don't ask me anymore.**  
**I will cry into the ocean.**

Sasha, Grade 5

[Raphael, Colman, & Loar, 1999]

図表 21

そういうことは言いたくない。書きたくない。悲しくなるから。ドアは閉められた。もうこれ以上何も聞かないで。私は海で泣きたい。」この子どもは段々と自分の心を閉ざし始めています。そして人の思いやり優しさからも心を閉ざそうとしています。このようなタイプの子供達というのは共感する心が、もう押しつぶされてしまった。自分の生活の中で暴力をあまりにも目の前で見たからであります。家庭内暴力のシェルターにいた女性の中で約25%が言っていました。彼女達は大変ペットのことを心配している。だからペットを心配しているあまり、中々思ったよりも早くシェルターに来れなかったのです。即ち危険な家庭に留まっていた訳です。自分達が出て行ったら動物に何が起こるか心配していた、恐れていたのです。アメリカの家庭内暴力のシェルターにおきましては、コンパニオンアニマルを飼うことが出来ません。大抵の所はそういったことが無理なんです。こういうところにもニーズが在ります。

また最後になりますけれども、申し上げたいことがもう一つあります。これはアメリカの問題だけではなく、カナダでも問題があります。カナダの研究があります。私の研究と同じような結果が出て来ました。これはイングランド、オーストラリアでも同じようなタイプの問題があるということです。また非常に強いニーズがこここの分野にあるということをお忘れてはなりません。即ち女性がペットを安心して預けて置ける、そして家庭内暴力の為のシェルターに子どもを連れて行ける、そのような場所が必要だということです。この様なプログラムというのが今全国で様々考えられています。私は思うんですけど、やはり良い例としては色々な協力関係が必要だと思えます。即ち人の福祉で働いている人、それから動物の愛護、こういう人達が協力し合って強いメッセージを子どもに送れると思えます。「動物の命は非常に重要である。」大人も時間をかけて、そしてこの様なプログラムをしっかりと作り上げていかなければなりません

ん。ペットが安全に過ごせるようにしていかなければなりません。シェルターから帰った後ペットも安全であるように考えなければなりません。

ジュリー・バンクさんも彼女のプログラムの話をすると思うんですけど私も同じようなことをやっております。そこでちょっと手早く進んで行きたいと思います。と言いますのは私が非常に心励まされる、そしてまた触発させられると思う言葉をご紹介したいからです。また私が何時も私の心の中に思い浮かべる言葉、例えばこの必ずしも子どもに対して良い例を示していない時も私、あります。或いは必ずしも子どもに対して忍耐力を持っているということも無いかもしれない。そこで反省の面もあってイントウ・ザ・ウッド (Into the Woods) という言葉です。

"The Witch" [Act II, Finale, Into the Woods  
Sondheim and Lapine]

Careful the things you say, children will listen.  
Careful the things you do, children will see.  
And learn.

Children may not obey, but children will listen.  
Children will look to you for which way to turn,  
To learn what to be.

Careful before you say, "Listen to me."  
Children will listen.

図表 22

これを読みます。(図表 22)「発言に気をつけましょう、子ども達が聞いています。行いに気をつけましょう、子どもが見ています。子どもはそれを見て学ばんです。子どもは従わないかも知れませんが、でも聞いています。子ども達はあなたがどちらを向くか見ています。そして自分がどういう風になろうか、なるべきか学ぼうとしています。聞きなさいという前に気をつけましょう。子どもは聞いているんです。」どうもご静聴有り難うございました。

### 山崎

アシオン先生有り難うございました。大変最後、心にぐっとくるような言葉で締め括って頂きました。6月に人と動物の共生を考える連絡会で全米人道協会のこの人間に対する暴力と動物に対する暴力のパラレルを扱った特別シンポジウムに多くの皆様がいらっしゃったので、この問題提起には大変深い関心を抱いている方が最近、日本ではメディア等のお陰もあって増えて来ていると思います。これはけして軽視出来ることでは無いんです。先程先生が語られました約10年前にやられました、MSPCAの153名を扱った調査に関しても153という母集団は非常に少ないとお思いかもしれませんが、あれはただ一ヶ所でやっただけであっておそらく米国色々な所で繰り返したら同じような結果が出て来るであろうということが十分に予測できます。

ちょっとここで動物愛護に関して一言申し上げさせて頂ければ、先生がおっしゃった公衆衛生問題として動物虐

待を扱いましょうというのはまさに今後の動物関係者が動くべき方向であり、2005年に新愛護法の見直しが迫っております。その見直しの中で新しい罰則として罰金を増やすのではなく、禁固刑を入れるのではなく、むしろ動物虐待をやって起訴された人に対してはカウンセリングを受けるとか精神的な評価、心理学的な評価をするという、裁判所命令が下る罰則規定を愛護団体の方は求めております。日本の刑法上それが可能かどうかというのは難しい所とは思いますが、その辺はやはり先生方がおっしゃったアメリカ等でおっしゃっておられることをベースに是非ブッシュをしたいと思いますので、皆様もその点に関する社会啓蒙も是非やって頂きたいと思います。

それと最後のこの女性の駆け込み寺に於いて動物が受け入れて貰えないので逃げ遅れる女性が非常に多いという課題に関して、アメリカ、カナダ、英国の事例をお話になりましたけれど、日本ではただ統計とか報道が無いだけで、この問題、存在しない訳ではありません。私の知っております多くの愛護関係者には、そういった方からのお電話や相談は今でも来ています。「自分の動物が旦那に虐待されているんだけど、動物共々逃げる術は無いんだろうか。」というような相談というのは日本の女性の中にもある訳ですから、統計上とかメディアの報道から出てこないからと言って存在しない訳では無い、ということも皆様にも認識して頂きたいと思います。

### 質問者

北海道大学教育学研究科の大学院で心理学を学んでおります者ですけれども、先生のお話を聞いてとても面白くてワクワクしながら聞いておりました。私が考えてますのは傷ついた子ども、不登校を中心に、今不登校というのは日本でもとても問題になってまして、そう言った不登校をしているお子さん達というか傷ついた子達と動物を介して関わることに意義があるのではないかと。ここに着眼して研究を進めていこうかと思っているんですけれども、不登校に長い間関わっている方から伺ったことなんですが、不登校の子達は先ずは可愛がるのがとても不得意だと。下手だという訳では無いし動物が好きなんだけれども、とても不得意だというも聞きました。一つのケースとしてなんですが、不登校している男の子が動物を飼いたいとそれでハムスターをお母様が買い与えられ、ハムスターって寿命が短いですね。結局その子が大事に飼って2年間生きたんなんですけども、最後の方でそのハムスターが何も食べなくなったら、そのお子さん本人も食べなくなりました。栄養摂取を自分で拒んでしまっただけで移入というよりもそこまでいくと投影になってしまっただけで、自分がケアされたいことを動物を通して他に多分訴えていたと思うんですが、物を食べなくなって。その子はどうしたかという、そのハムスターが死んだ日からその子は本当に食べなくなって、結局病院に入院して点滴で栄養を摂取して今だに入院中なんだそうです。移入と言っても健やかでない形のちょっとこう病的というのは、余りにもネガティブな感じでの移入というのはどんな風に受け止めれば良いんでしょうか。

### アシオン

この様な情報をお聞かせ頂き有り難うございます。そうですね一つの例と致しまして私思ふんですけど、あなたがおっしゃった点と言いますのは色んなことがあると思います。なんでもバランスが大事だと思います。例えばですね、自分自身のニーズ、他の人達のニーズ、動物のニーズ、そういうことのバランスをとるのが大事だということです。飼い主と動物のニーズ、そのバランスを取る為には努力が必要だと思います。時にはインバランスが起こります。おっしゃったようなケースというのはちょっとアンバランスが起ってしまったということなんですね、ですから本当にかかりってしまったということで大変だったと思います。しかし、こういう事が日本であるかどうかわかりませんが、アメリカではあります。動物の福祉で心配していること、プログラムで今心配していることがあります。それは、人が余りにも沢山の動物を飼っている、家で沢山飼っているという場合。アニマルホーダーと言ってるんですけども、沢山の動物を飼い過ぎてしまいますとそういう風に動物の群れを自分の家に持っているということで、それは所有欲が余りにも強くなりすぎる、そういう障害ではないかと言われております。また、もしかしたらそういう動物を助けているんだと自分で信じ込んでいる、動物愛護協会のところから切り離して自分で一杯持っているから守っている気になっている。でも沢山飼い過ぎて世話が行き届かなくて死んだりするのがいたりするということです。或いは共感が誤った方向に行ったりする。そういうことになりますと動物にとっても大変ですし、又それはその飼い主にとってもやはり精神問題だと思います。そういうことがあります。どうもお話頂き有り難うございました。

### 山崎

日本でもこれは大きな問題です。我々は、この様な目立ったケースを知っております。ですからやはり先生方の研究などを見ておまして色々感じております。コレクターの問題というのは決してアメリカだけの問題ではなくて、日本でも最近山梨での男性の例を初めとして、色々行政の方の頭の痛い御仁が色々な都道府県におられる様ですが、これもやはりアシオン先生のような心理学の専門家が、心理学的に或いは精神医学的にどのように解析すべきかという角度から見て行かないと、動物行政や動物の専門家の角度から愛護問題として捉えるよりも早急にそちらの人間問題として捉えてもらう方が大事ではないかと思ひます。

## パネラスピーチ

## 『心を育てる動物飼育体験』

宮川 八岐 文部科学省初等中等教育局 視学官

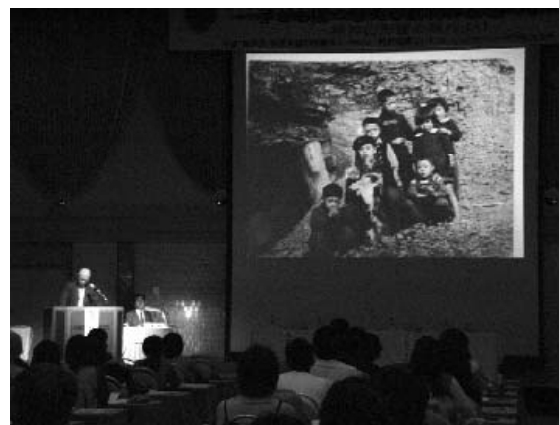


皆さんこんにちは、只今ご紹介頂きました宮川と申します。初めに自己紹介からちょっとさせていただきます。私は1969年、昭和44年ですけれども埼玉県公立小学校の教員になりました。その時に新任教員でありながら色々な主任もやらなきゃならないような学校でございましたが飼育委員会、後でまた表を出しますが、特別活動、児童会活動の中の飼育委員会、図書委員会とか色々ありますけれども、その飼育委員会を担当して教員時代19年、管理職5年程の間ずっと飼育担当をしてきた人間でございます。そして私は1994年、平成6年、埼玉の小学校長から文部省教科調査官へということで校長経験で文部省に入ったのは最初で最後でございます。2000年、平成14年、文部科学省になりまして、視学官で現在に至っております。視学官とは何ぞやということですが、幼・小・中・高等学校の学習指導要領（国の基準）を踏まえて全国の小学校は教育課程を編成するその基準を作成致しまして啓発に努めること、或いはこれがちゃんと行われているかということで学校教育実施状況調査をします。或いは学校経営、教育活動の指導、助言に当たるそれが視学官でございます。そんな立場でございまして今日は時間が余りありませんので簡単に私の体験それから学校教育に於ける動物飼育はどうなっているのかという事についてご紹介したいと思います。

冊子の方にもありますけれども私自身、北海道で生まれて非常に極貧の生活を致しまして、家庭環境も複雑で住居も点々とするという生活を致しました。そういう中で多感な少年期を心豊かに生きる魂というものを培ったとするならば、それは一つは動物体験があったというふうなことを実感しております。それでまあ小学校の2年生位の頃だったでしょうか。亀を拾った訳ですね、道端で。それを驚きと喜びで持ち帰りました。そうしましたら祖母がですね、飼いたいんだろうけども亀さんは向かいにあるあの大きな池で生活するのが一番幸せなんだということを言われてね。しかしお前が折角拾ったんだから、亀さんもお前の事を忘れないようにするためにお酒を飲ませてあげよう、亀さんはお酒が好きなんだと、祖母が大事に取ってあったお酒を飲ましたら本当に飲むんですね。そしてその亀さんを祖母と一緒に池に行き行って放してあげました。するとですね、ずっと水中に入って、そうですね10メートルも行かないでしょうか、ひよいと上がりましてこちらを向いたんですよ。そしてまた入っていきました。その後出てきませんでしたけど、私にはどうもね、有り難うと言っているような風に見られたんです。50も後半になって今でもはっきりその光景覚えております。まあそういう経験を致しましてですね、小学校3年生後半から鉾山に行く訳です。母が再婚して私が連れ子で行った訳ですけれども、血のつながりの無い

兄弟が増えたり長屋暮らしで大変だったんですけど、そこで実は犬を貰って来ることになった訳です。

それがこの、私がいるのであります。（図表1）本邦初公



図表 1

開であります。あのワンコちゃんを抱いているのが私であります。中学校1年の時でありますがこの犬を貰って来た訳ですね。そうしましたらお袋は泣くんではあります。おまえねえ家はどんな生活か分かっているだろうと大変なんだよという話。で私は言いました。母さんね俺が食べるご飯を半分やるからいいだろうと。お袋はそうかそこまでいうならということで飼うことになりました。そうしましたらですね、山間道々登下校する訳ですけれども、長屋があって道があって、ずーと100m位手前のとこを崖っぷちをまわって我が家が見えるんでありますけれども、その道端にちよこんと座って待っているんですね。学校の帰りを、あれ時間わかるんですね。それで点の様に見える所で私を発見して、見て下さいあれ、足が短いんですよ。あれがですね夢中になって走って来るんです。転がりながら走ってくるんですね。まあ、そういうすいませんねえどうも・・・、まさかこうなるとは思わなかった。（編注：先生の犬は、この後、狂犬病予防法により、処分されたそうです。それを思い出され、しばし、言葉につまりました。この犬との経験は、それ程先生にとって大きなものであったのです。）

まいったねえ。まあそういう触れ合いがありましてですね、真冬になると北海道ですから、寒いであります。近所からノコギリを借りたり致しまして、犬小屋を作りました・・・。そういう少年期の体験がありまして、先程言いました昭和44年に教員になって・・・。飼育委員会の担当を率先して受けた訳でございます。そういう少年体験が教師になってもずっと飼育担当をするようになったと。そして28になりまして結婚することになって子どもをもうけて家族をもうけました。子ども男子二人いる訳ですが血を引いておりましてね、私の。やはりあの近くで捨て犬を拾って来るん

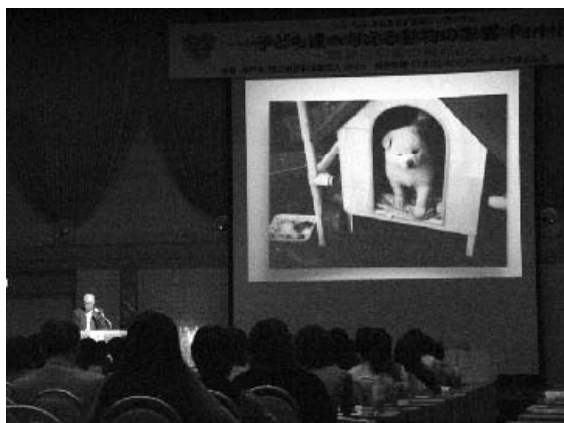


であります。で飼いたいんだというふうに言う訳です。それは家族が増えるということは良いことだと、しかしお前ねえ本気になって世話をするんだよという話をしましたら絶対するということで飼うことになった、という訳でございます。



図表 2

まあこの犬でございます。(図表 2) だいぶ大きくなったんですけども、実の子どもは二人ですけども貰いっ子が増えましてね。三人子どもがいます家内は中に入りますよ。そういうことで家族四人でスタートしたという訳でございます。で次のワンコちゃんは、これが年老いて、この次新しいワンコちゃんを飼うようになった訳でございます。(図表 3)



図表 3

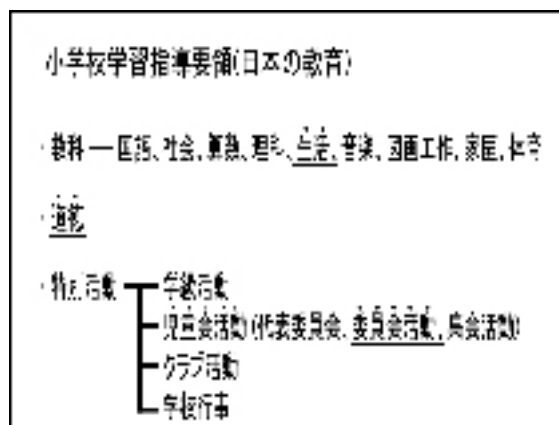
けれどもこういう風な生活をして自分の少年期の体験、やはり家族を持ってまたそれが生きているということがございます。

学校教育でございますけれど、今の子どもたちは非常に体験不足。自然との触れ合い、人間関係もそうでありまして、動物との体験というのもですね、今の子どもたち触れ合いの機会が少なくなっております。しかし日本の学校教育に於いては動物の飼育体験というふうなことを行うようになっている訳でございます。これはただ単に道徳の時間に読み物資料でそういうものに触れるだけじゃなくて、実際に命を実感する教育、これを充実させる形になっている訳でございます。

この写真は見えにくいでしょうかね。下の方にモルモットがいるんですけども、このモルモットを生活科という教科の中で飼っている。これが大変多くなっておりますけども、こ

ういった活動が触れ合いの活動が学校教育の中にあるということでございますが・・・。

今日は学校関係者じゃない方もいらっやると思っていますので、ちょっと分かりにくいでしょうか。教科これは国語とか社会とか算数、理科、生活というのがあるんです。(図表 4)

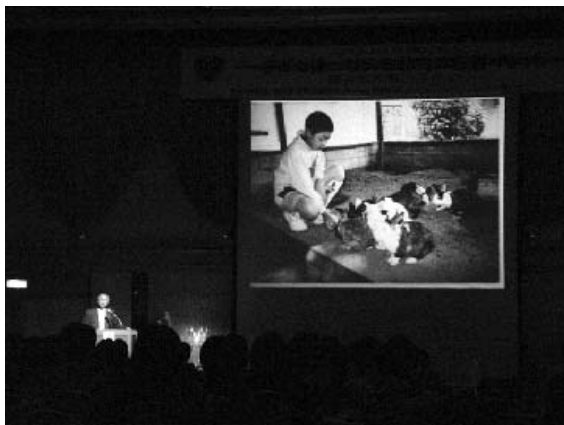


図表 4

生活科というのを1・2年生で学習することになっておりまして、その中で動物や植物を飼ったり育てたりするというふうな学習内容として設定されている訳でございます。そして道徳という欄が次でございます。道徳の教材の中ではやはり命の大切さを教える教材、或いは動植物に触れ合うことの大切さ、優しく接するというふうな主題で授業することになっております。これは1年生から6年生までの各学年段階で指導することになっております。実体験と心の内面化を深める教育、これが道徳であります。そして次が特別活動というのがありまして、特別活動は学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事というふうな4種類あるんであります。でこの中で私、飼育担当と申したのは2番目の児童会活動の中の委員会活動というのがあります。これは全国的に必ずどの学校でも飼育委員会があるかという、必ずしもそうではありませんけど、多くの学校でありますね。学校は小社会です。ですから教えること、お世話をしたり、掃除をしたり様々な人間形成をする教育が行われる。その一環として子ども達が自分達で飼育活動もして、そして成長していくような仕組みになっているんです。この委員会活動は高学年でございます。高学年の子ども達が学校を代表して私達はじゃあ飼育の担当をする。私達は図書委員会の仕事担当をする。その様に分れていてやっていく。そうしますと大体、飼育委員会に入ってくる子ども達は1年生或いは家庭で様々な動物体験をしている子が率先して入ってきます。学校によっては希望者が多すぎるのでじゃんけんをして決めるとかですね、そういう所もあるぐらい飼育委員会は人気があるのでございます。そういう風な状況がありまして、学校行事などで動物体験を仕組む学校もございまして、或いは子ども達は、今委員会活動の話まで致しましたけども、飼育委員会が全校の子ども達に触れ合ってもらおうようにする為にはどうするかと話し合いをしている。代表委員会というところで話し合って、そして触れ合いデーという日を決めたりですね。様々な工夫をしながら活動している、そういう学校もある訳でございます。そういうことが出来るシステムになってい

る日本の教育とご理解頂ければと思う訳でございます。

先程はモルモットを飼っている話を致しましたけど、これはある学校ではヤギを飼っているという。これは少ないですけどね。良いか悪いかは別と致しまして積極的に先生が考えている学校の例でございます。ワンコちゃんを飼っている学校もあるんであります。これは獣医師さんの専門的な立場からするとちょっと待てよという部分もあるらしいんですけども、まあ一応そういう学校もあるということ。



図表 5

これは私がいた所の飼育小屋でございましたけども、飼育委員会がウサギを飼ってる。(図表 5)この他にチャボを飼ってる、或いはインコを飼ってる、こういうことが各学校で、多くの殆どの学校で行われている。この活動は教科の学習で学ぶ生活科、それから道徳での学習、そして子ども達の自主的な活動、実践活動としての特別活動という形で今日の学校教育の中で動物飼育体験学習が行われている訳でございます。しかしこの生活科で動物というふうなことをいっておりますけど、基本的には小動物、或いは虫や水棲動物とかそういったかなりその学校の実態等に応じてお考え下さいという仕組みにはなっていて、これじゃだめ、これにしなさい、これが良いですよ、といったような事は余り言っておりません。教科書などで取り上げられるものを積極的に取り入れる学校が多い訳でございます。一応そういうことで日本の学校、小学校の中に於いて動物飼育に関わる学習をしておると、で私は自分の教えた子どもが今農学校の方に進んで、そして獣医師の免許も取って、保健所に勤める子どももおりますし、アメリカの方に行って、これは飼育委員会で頑張った子どもですけれども、アメリカで向こうの方と結婚されて動物を色々飼ってニュースを私に下さいます。学校での動物体験、学習体験は命の学習を致しますし、抱っこしてみても先生暖かいよとか、心臓動いているよとかいうふうな学習をし、そしてそこから自分の生き方を考えたり、或いは将来進路を考えたり様々な学校での学習が生き方を動機付けしている。動機付けの役割がある。例えば低学年で私の家内の姉の子どもは学校へ上がって、生活科でモルモットを飼っていると、家でも飼いたいというんで早速お家で飼っている。それを親戚が集まった時に大事に持って来てましたよ。まあそういうふうな形で理想的な形で進んでいる所もある。しかし学校によっては中々この動物飼育に関しては専門的な知識も無くて悪戦苦闘している

ところもありましてね。ですから生活科の学習指導要領を解説している解説書というのがあるんです。その中では獣医師さんとの連携を図って充実するようにして下さいというふうな事を書いているのであります。まあそういう意味でこれから学校も様々な課題があつて、たとえば教育相談関係に関わつてはそういう方面の専門の方、動物飼育に関わつては獣医師さんのお力をと、そういう形で様々な専門的な方が学校に入って手を取り合つて、人間教育をしていくという方向で新しい学習指導要領、教育の方向が作られた訳でございます。まさに学習指導要領を作る時に国民の皆さんにお約束したことがあります。四つのねらいを持ってこれを改善しますよと。その場合に何を一番重視するかといった時に、豊かな人間性や社会性の育成を第一に重視して改善致しますよということを教育課程審議会が提言しました。その結果、道徳と特別活動の教育課程は変わらなかった。もう良いんじゃないか、道徳は家庭に返せ、特別活動は地域に返せと、そういう意見も沢山あった中でそれではいかんと言つて我々もまあ頑張った訳でございます。そういう意味で動物飼育と豊かな人間性、生き方を考えるという教育が充実するようにという願いを持ってこの本年、14年の4月から新しい、学習指導要領の元での教育が全国でスタートした訳でございます。もう少し色々とお話ししたい事があつたんですけども・・・こんな変わった人間も文部科学省にはいるんであります。以上であります。

#### 山崎

有り難うございました。盛大な拍手をお願い致します。視学官、本当に有り難うございました。宮川先生のような方が文部科学省におられるということを皆さん実感して頂いて、今日は本当に大変良い勉強をさせて頂きました。先生がおっしゃいました、特に私が非常に大事だと思う点、最後の方におっしゃいました、どういう動物を飼うかという定義を厳密にしては駄目だということをおっしゃいましたが、まさにその通りだと思います。これは学校だけでなく家庭でペットを飼う飼わないという議論が出た時に、多くの親御さんは犬猫がペットだと思っている。小鳥であろうともっと小さな、例えばてんとう虫やチョウチョの幼虫を育てるだけであろうとも、これは非常に重要な生命尊重教育につながり、且つ子どもにとっては実は生き物というのは本当に集中できる対象なんです。ですから私も既に成人しています子どもの子育て中には、よく春先になるとてんとう虫の幼虫を探して隣近所のバラの垣根を掻き分けて歩いたものです。てんとう虫の幼虫が成虫に育つていくと、またそのバラの垣根に戻しに子ども達が行くというような、そういったことなんかもしましたし、そういったことがやはり動物と接することの本質的なものではないかと思えます。ですから学校の先生方も家庭の親御さんも犬や猫或いはウサギだけが子ども達にとってのペットであるというよりも、むしろどのような生き物であっても実際にちゃんと飼えるものであればそれを子どもにどの様にして与えるかという親の賢明な選択が非常にこれから必要になってくる。或いは学校の先生の選択が非常に必要になってくるかなと思えます。

パネラスピーチ

『子ども達へ与える動物の影響』

飯倉 洋治 昭和大学医学部小児科 教授



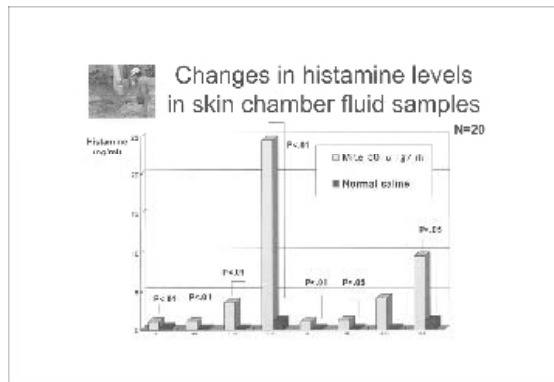
### はじめに(1)

- ・ 欧米諸国では、動物介在療法のひとつとして自閉症児や知的障害をもつ子どもを対象にイルカ介在療法が行われている (B.A.Smith,1984,D.E.Nathanson,1993. )。
- ・ その効果に関しては主観的な有効性ではあるが、自発的行動の増加、認知能力の改善などが報告されている。

図表 1

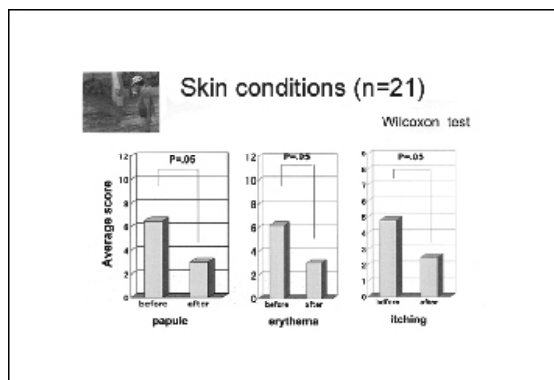
皆様こんにちは。ただいま紹介頂きました飯倉でございます。実は何故我々がドルフィンセラピーをやったかというこの経緯はですね、(図表 1)このスライド、これ私なんですけど丁度今年、胃がんで胃を 2/3 取りましたけど、その前は少しお腹が出ていたんですが今はべっちゃんこでこういう面影が無いと思うんですけど、こういうドルフィンを使う理由は、アトピー性皮膚炎児のそのキャンプをやっておりまして、そしてアトピー性皮膚炎児の海に行く時に塩水に浸けると大変痛がって泣く。それをイルカがいたらどうだろうかというようなところでスタートしましたら、なんとイルカの力というのが凄くて子ども達の痛みに対する感情というのが凄く薄れていったと。そういう結果である程度、アトピー性皮膚炎児とイルカの治療のデータが出ました。免疫学的にも色々検討致しました。そういう意味で欧米では自閉症に対するドルフィンセラピーというのが行われていて、しかも日本からもう何百万もお金を出して行くだという話を聞きまして、それなら日本でイルカについて少しは習ってきたんで我々がやってあげた方が良いんじゃないかということで、臨床心理士と一緒にやってイルカのセラピーをやるようになりました。1996 年ですから、もうアトピーキャンプと自閉症含めまして6回やっているんですけど、私は何時もプールサイドの外に居てイルカの動きを見ながら今ちょっとみんな離れて、イルカが凄く機嫌が悪そうだよというふうなことが分かるようになってきてまして、そういう大きなトラブルも無く進んでると。その前にちょっとアトピー性皮膚炎とドルフィンキャンプの結果はどうだったのかというのをお話しておきたいと思います。

これは実際アトピー性皮膚炎児がドルフィンがいると、塩水にアトピーの子が触るといことは傷をしている訳ですから、痛い訳です。ですから非常に嫌がるんですが、居ると大したことなく入って行ってしまし、免疫学的にも、初日のこの特殊なチャンバーを作ったダニ抗原をチャンバーの中に入れますとヒスタミンが沢山出てくる。(図表 2) そのヒスタミンの出方も非常に少なくなってきて免疫学的に一週間の



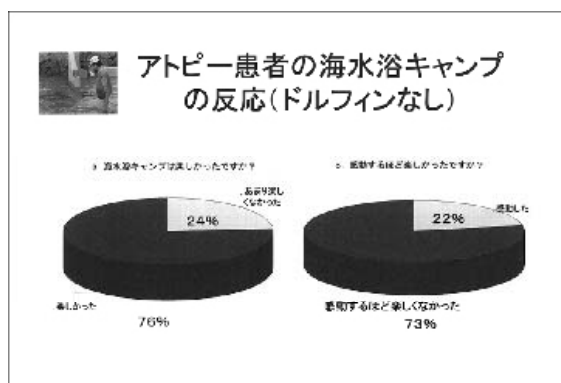
図表 2

アトピー海水浴でアトピー性皮膚炎も凄く良く治る。今アトピーの方では一つ注目されているところでございます。そして結果的に皮膚の症状はどうかというと、たったの一週間で色々な治療をしても治らない様なアトピー性皮膚炎の子どもさんの皮膚が、非常に良くなっていくということが分



図表 3

かりました。(図表 3) そういう意味では海をうまく使うとステロイドを使わなくても、アトピー性皮膚炎のうまいコントロールができる免疫学的にもかなり証明出来てきている。ドルフィン無しの場合ですね、(図表 4 次ページ) 楽しかったか、その余り楽しくなかった。それから感動するほどでなかった。この感動ですね。海に行って遊ぶ訳ですから感動しても良いはずなんですけれど、中々感動してくれない。ところがですねドルフィンがいるとどうだったかと申しますと、とっても感動したと。(図表 5 次ページ) そして痛みもまったく忘れてしますと。こういう風に何ていうんですか、ドルフィンが存在することによってこの子どもさんの痛みに対する考え方も変わってきたし、我々も実際キャンプをやっていて非常に疲れるんですけども、自分も朝から晩まで何時も夜中もいる人間で病気になっちゃったんですけど、ほんとに夜中に12時か、じゃそろそろ帰ろうかという位な生活してました。



図表 4



図表 5

それを 35 年もやってまして結局罰が当たったんですが、まあこういう自分達の気持ちも癒されてキャンプをやって疲れているのに疲れているという感じをあまり受けにくいぐらいな気持ちでした。

これから自閉症のキャンプに入りますが、これ自閉症の子どもさんなんですけれど色々なタイプの自閉症にはこんなに幅があります。ですから最初から興味を示す人もいれば、全然興味を示さない、だけどやっぱり何処かでちらちらドルフィンを見ながらその後の会話が変わってくるという、色々な方が自閉症のタイプにも色々あってそして色々な対応の仕方が在るんだということをこれからお話し、我々のデータのまとめをお話していきたいと思います。

**これまでのキャンプの概要(1)**

	第1回 2008年 2泊	第2回 2011年 2泊
日程	7月4日～7月7日	6月30日～7月3日
参加者	2名	2名
参加施設	2施設	1施設
スタッフ	医師2名、心理士2名、作業療法士2名、ドルフィントレーナー1名	医師2名、心理士2名、作業療法士2名、ドルフィントレーナー2名
ドルフィン	3頭 (性別不明)	2頭 (性別不明)
実施場所	世にも有名な「海」の立派なリゾート施設	世にも有名な「海」の立派なリゾート施設
セッションの形式	1泊2日	1泊2日

図表 6

まずこれ今までのキャンプの日程なんですが、(図表 6) 大体どういことが起こるか分かりませんので医師と臨床心理士とそれから作業療法士、ドルフィンのトレーナーこんな

感じでチームを組んで行いました。そして沖縄の場合は自然の海をちょっと囲ってありますんで、背が立たないですから、ライフジャケットを使ってこのキャンプをするというのは子ども達にとって大変恐怖であり良くない。こっちも溺れてはいけないということで、ライフジャケットをうまく使えるか使えないかによっても、また年齢によっても違ってくるので、沖縄

**これまでのキャンプの概要(2)**

	第3回 2008年 3泊	第4回 2008年 3泊
日程	7月7日～7月10日	8月31日～9月3日
参加者	7名	7名
参加施設	2施設	2施設
スタッフ	医師3名、心理士2名、作業療法士1名、ドルフィントレーナー3名	医師3名、心理士2名、作業療法士1名、ドルフィントレーナー3名
ドルフィン	2頭 (性別不明)	2頭 (性別不明)
実施場所	世にも有名な「海」の立派なリゾート施設	世にも有名な「海」の立派なリゾート施設

図表 7

も少し高いということで沖縄をやめました。そして次は鴨川シーワールドです。(図表 7)これ大変安くて鴨川シーワールドの館長さんという方は大変面白い方で実はドルフィンを使ってドルフィンセラピーを自閉症にやりたいんだと申しましたら、今まで人様にそんなに役に立つ様なことをやったこと無いからどうぞ自由に、お金はいいから自由に使ってくれというようなことで。しかもですね、このイルカのいるプールがバートと上がって来るんですね。上がって来て 80センチ位の高さまで上がってきますから、イルカには非常に不愉快な環境なんですけど、子どもは溺れる心配も無い。ライフジャケットを一応着させますけれど、子どもが自由にさっきの様に立ってイルカにタッチが出来る。それでセッション、プレイセッションを午前と午後に分けたんですけど、色々この中では観察する人、僕みたいに外でじっと見ている医者とか、臨床心理士と一緒に入っている、トレーナーと子どもと遊ぶとかいう意味でこんなにスタッフが居て何をしているんだと思うかも知れませんが結構観察したりするので必要なんです。どうしても一回のキャンプに7名位しか連れて行けないし、この3泊4日というのは後でもお話ししますが、ドルフィンキャンプするのはこの位で十分かなと。そして今年もうニーズが大きくなりまして1年に2度もやることになりました。例えば7月のこの時期とこの時期にやりましてそしてやっぱり同じことでやりました。大体こういう状況です。

日程なんですけれど、(図表 8 次ページ)ドルフィンセラピーをした後にやっぱり子ども達にドルフィンのレクリエーション。どんな感じで子ども達が遊ぶのかを見ながら子ども達の特徴をつかんで、あの子どもはこの絵を描かすとドルフィンの絵を描いて来たりするのがいる、この子は何か感じているんだなという意味で、このレクリエーションの時間を観察の期間という意味でも大変重要視致しました。そしてここで親も連れて来ますので、親はどう感じてたのかというのを担当のスタッフと子どもの状況を親子と全員とで話し合っ、次の日のプログラムに織り込み変えていくという様な形

**ドルフィンキャンプ日程表**

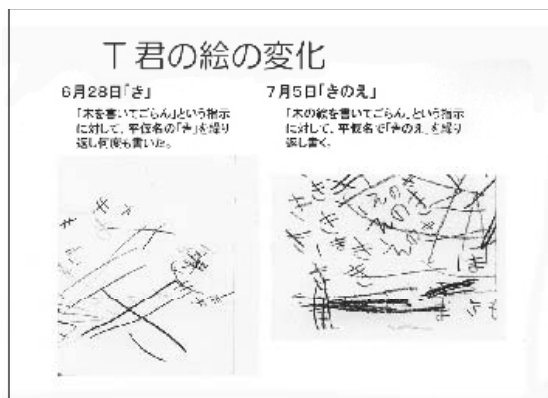
	7月12日(金)	7月13日(土)	7月14日(日)	7月15日(月)
6:00	起床	起床	起床	起床
7:00	朝食	朝食	朝食	朝食
8:00				朝晩練習
8:30	ドルフィンプログラム	ドルフィンプログラム	ドルフィンプログラム	ドルフィンプログラム
9:30	自由	自由	自由	自由
10:30	プログラム終了 お風呂	プログラム終了 お風呂	プログラム終了 お風呂	プログラム終了 お風呂
11:30	昼食	昼食	昼食	昼食
12:00	ポイント集積点 開閉			
12:30	練習	練習	練習	練習
14:00	自由	自由	自由	自由
14:30	ドルフィンプログラム	ドルフィンプログラム	ドルフィンプログラム	ドルフィンプログラム
15:00				
16:30	プログラム終了 お風呂	プログラム終了 お風呂	プログラム終了 お風呂	プログラム終了 お風呂
17:30	夕食	夕食	夕食	夕食
18:00	レクリエーション終了 お風呂	レクリエーション終了 お風呂	レクリエーション終了 お風呂	レクリエーション終了 お風呂
8:00				

図表 8

での、こういう親子ミーティングを重ねていきました。そして本当にドルフィンセラピーは有効なのか自閉症にも幅があるし、確かに有効だという例もありますが、どうなのかなという例も無い訳でもありません。そこで今までどんなことをやってきたかと申しますと家族の観察ノート、それから絵を描かして見る。子どもの行動をビデオ3台でチェックしてまして、そしてその子どもの行動をチェックしていくと。それから今年なんですクラークテストで自閉症の子どもの行動評価をしてみた。ビデオ分析をやって親子との遊びの場面等が増えているか増えていないかというような事をやっていきましたし、容積脈波で緊張すると脈が小さくなるんですが、そういうことで客観的なデータを色々脳波を取ったりなんかしたんですが、中々客観的なデータが採りにくいので、今いかに客観的なデータを採るかということこれから一生懸命やっていこうと思っています。

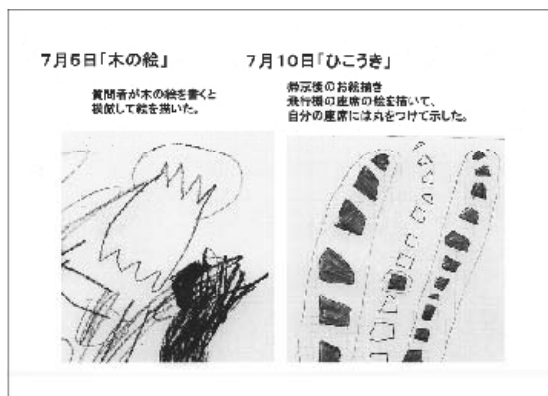
そして何回も参加しているK君についての話をお話させていただきますと、この子は2歳までは普通学校に行っていたんですけど、3歳から自閉症と診断されて特殊学級に行くようになった。4回のドルフィンキャンプに参加をして妹さんと一緒に参加するようになりました。この子は6歳、小学校の時から普通学校に通っていましたが自閉症とされアトピー性皮膚炎もあって中程度の精神の遅滞があると。そしてここで面白いのはですね、イルカのセラピーの2日目、初日目ですと余り関心を示していないようなんですが2日目位になってくると何か意識してくるということが見えてまいりますし、1年後ではもう確かに言葉も段々増えてまいりますし、人の名前も覚えるようになってくる。今まで中々こういうことは短期間には出ないんですけど、自閉症の子どもさんというのは何年たっても中々進まないんですが、かなりこの子もひどい子だなと思いながらも進歩がかなり見えてきた子であります。もう一つは一見イルカに対して全然その興味を示していない様なふりをしてはいるんですけど、やっぱりこのお子さんも2日目にはもう家に電話をかけたりする。もう親がおばあちゃんが泣いて喜ぶ位な変化が起こったりですね。もうどんどん言葉が言える様になってくる。そして短い感想が述べられる様になってくるという様な変化が出て来ておりました。ですからイルカのキャンプをやってると皆が自閉症の子どもがイルカを触るかというところでもない。全然そっぽを向いているのもいるし、イルカにしがみついたり放さない子もいたりする。その辺のこのイル

カの興奮度を見ながらちょっと放してという様なアドバイスをする。そういう様なことをしなきゃいけない子もいました。



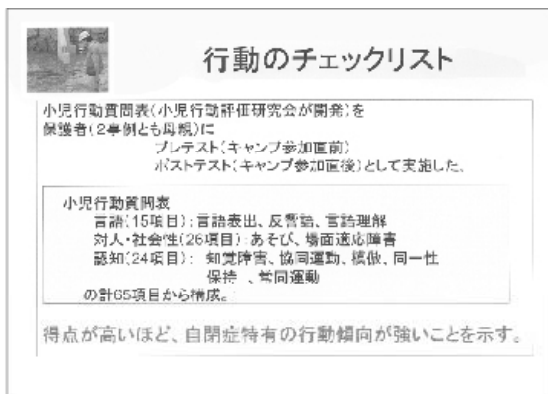
図表 9

そしてこのT君にですね、木というのを描いてごらんという漢字の木ばかりをこう書くんですが、(図表9)木の絵を描いてごらんという今度木の絵を、字が増えるんですね。まあそこまではいいんですが、そして今度はその木の絵をこのキャンプの時こう描いて、帰りの飛行機の中では自分の座席にこう飛行機の絵に座席を描いて、自分の席に丸を作るとか何かすごく意味のある絵を描くようになった。(図表10)



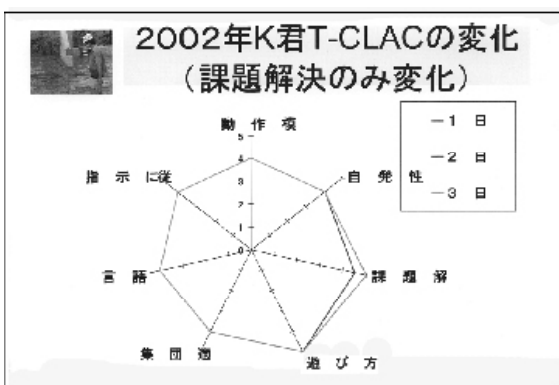
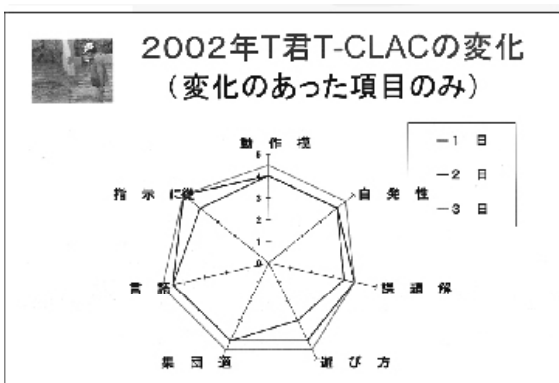
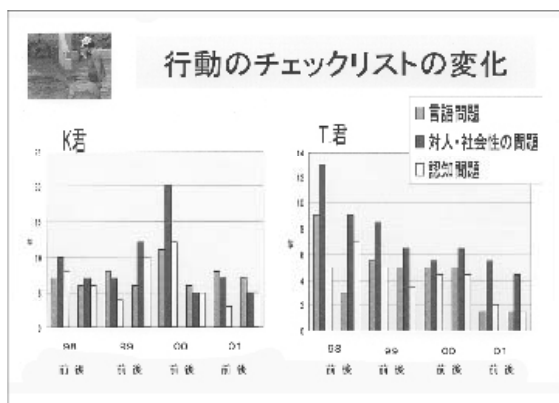
図表 10

今まで意味の無い絵が多かったんです。自閉症の子多いんですけど、一つの絵を描くとそれしか描かないとか、そういう意味では何か進歩が出てきている。それからチェックリストでの色々な項目、(図表11)こんな項目について子どもの言語とか言語の出し方とか協調性が有るか無いかとか、



図表 11

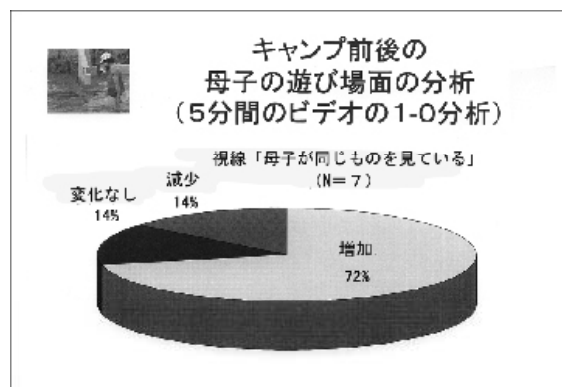
得点が高いほど自閉症の特徴傾向が強い特有の行動を示すということなんですけれど、その結果を見ていきますと、(図表 12) K君の場合とT君の場合、T君の場合というのは年々この対人関係等がこう少なく、問題が低くなってきていますね。ということは何回もリピートしていることによって何かこの子は問題がどんどんどんどん軽くなってきている。この子はこの時は非常に高いんですがその後非常に低くなってきているという意味で、色々な行動面それから対人関係、言語の問題等を検討していきますと、繰り返すと減ってきているなということがわかります。



それから T-CLAC での変化のあった項目なんですけれど、(図表 13、14) 動作とか遊び方、最初は頃はこんな1回目は非常に低かったところが、色々な言ったことをすぐ、集まろうというすぐ集まってくれたりですね。たったの

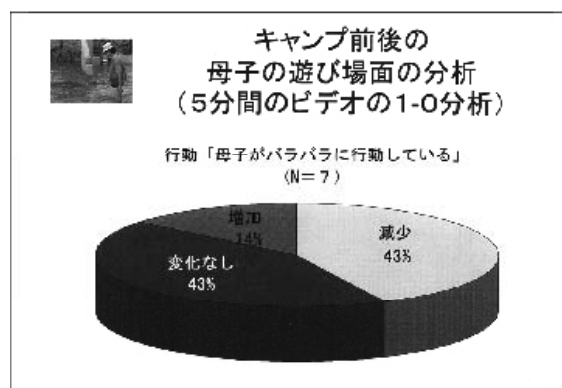
3日、3泊4日ですが凄く違ってくる。子どもが素直になってくる。そういう意味では非常に面白い結果が得られたと思います。

このお子さんも最初から非常に良かったんですけど、課題解決についての問題点というのは初日は駄目だったけれど、3日目になってくると非常に課題解決についても改善が見られた。ビデオの分析ですね(図表 15) それか



図表 15

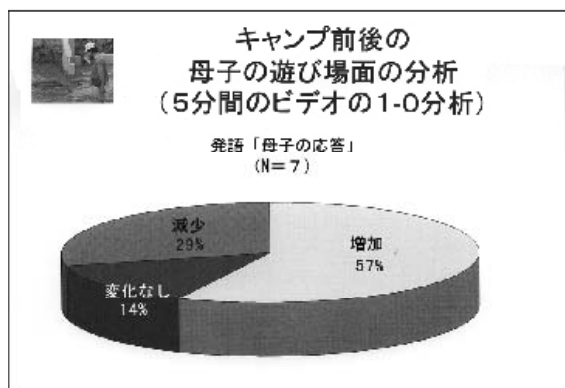
ら母子が同じものを良く見ている。お母さんと殆ど自閉症の子は一緒に居ますから、それがどうだったか七題についてまとめて見ますと、今年のキャンプですが、増加しているというのが72%で、それからばらばらの行動をしているというのは凄く減ってきているということがわかりました。(図表 16) 発語、母子の対話、言葉の会話の回数ですなこ



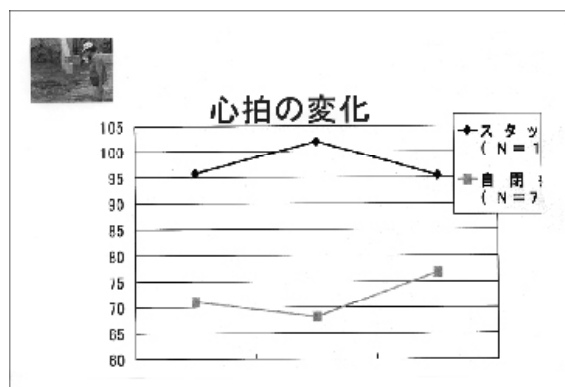
図表 16

れがやっぱり今回のビデオ分析によると非常に増加しているという結果が得られました。(図表 17 次ページ) 容積脈波なんですけれど普通のスタッフだとなってくるのが自閉症児では少しか緊張気味なのかなあという感じでした。(図表 18 次ページ)

そして今後なんですけれど、アトピー性皮膚炎、自閉症等に何らかの変化があることは分かったんですが、これを今後どの様に伸ばしていくかと一番の問題はデータの分析を如何にこれからやっていくということで、今回ビデオの三方向からのビデオ解析をやったり、そして子ども達の1年後の発達、成長とかそういうものをやったんですが、やっぱりもう少し客観的なデータが欲しいという様なところで、ドルフィンキャンプの今後の問題点が隠されているということと、ドルフィンキャンプの要因と関連に関する検討、結果



図表 17



図表 18

的にアトピー性皮膚炎の場合はもう皮膚が良くなってくると免疫学的に良くなってくると、コントロールもあってわかるんですけど、自閉症の場合のそういう客観的な指標、それから自閉症の程度というのが非常にアトピーに比べてばらばらであるということで今後の大きな問題点がここにもある。どの位のキャンプをやっていったら良いのかというと、私はキャンプ3日で取り敢えず十分。2日目位から子どもさんの変化というのが急激に現れてくる客観的な指標を、今神経内科の先生達と一生懸命検討し、それから生理の人達と相談しながら頭の中の変化をどう、どのような変化が起こってくるのかということこれから検討しようとしております。ですから小児科は勿論なんですけれど、こういった人達が居て頂かないとですね、心理療法士の方々の観察は、また医者と違いますし、そういう意味で色々な職種の方の共同でこういうキャンプが出来ている。ところが簡単どこでも出来るとことでは無いということでこれからドルフィンセラピー研究会というものをスタートしまして、ドルフィンを飼ってらっしゃるところは、こんなことでも効果があるんですよと少しでも多くの方がドルフィンを触ることで、やっぱり触ることに意味があるんです。触って唯見ているだけでなく、触ってそして感動して、或いは音を聞いて感動して、次に変化が来るといふ風に私は感じてますんで、やっぱりどこでもできるマニュアルを、これから安くできるようにしていきたいという意味で、外にパンフレットがありますけれど12月にドルフィンセラピー研究会を開催することに致しました。

これは最後に参加した子ども達が最後に描いてくれた絵でございます。ご静聴有り難うございました。

### 山崎

飯倉先生どうも有り難うございました。ドルフィンセラピーに関しては世界各国で賛否両論色々ありますけれど、一つ動物側の理論から言わせて頂ければ、今世界的に海洋哺乳類を飼育下から解放しようという、最早増やすのをやめようという傾向が非常に強いので、今後そういった問題に先生方がどう対応していられるかということとそれからあのちょっとベティスミスの為に申し上げますと、先生が最初にご報告なされた1984年のベティスミスのペーパーでございますが、もう10年程前にベティスミス本人がドルフィンセラピーの分野から撤退しているんです。これは色々な意味で彼女自身がこの分野を見切ったということであろうと思いますので、そういったベティスミスが何故撤退したかという様な理由も先生方の研究会でぜひ追って頂きたいと思います。一つご提案させて頂ければ、アトピーの子は塩水に浸かると良いというのは前に先生のお作りになられたビデオ等も私見せて頂いてお話を伺ったんですけど、例えば塩水に浸かると嫌がるというのであれば、じゃあそのイルカ以外のメソッドはあるかといったら、例えば水の好きな犬は沢山います。水難・海難救助犬に適している犬種等もございますし、水難・海難救助犬のトレーニングというのはもうすでに欧州やアメリカ等では定着しておりますので、私なんかが見た子どもの遊びの中では、小さな浮き輪に乗せた子どもをそういった訓練を受けたニューファウンドランド等が引っ張りまわしているという様なそういったレクリエーションを見たことございますので、ドルフィンではないものが塩水に接するという助けをすることが出来るのか、出来れば私のちょっとあのバックグラウンドとしてアメリカの動物介在療法のデータベースであります、デルタ協会のインストラクターとしての立場から言わせて頂ければ、やはり脆弱なポピュレーションに対しての野生生物をセラピーに持ち込むというのは実は人畜共通感染症や行動管理の問題で大変リスクがあるので、余りお奨めできないということもございますので、こういった様々な世界の動き等を研究会の方で是非ご検討頂ければ幸いであると思います。

## パネルディスカッション

座長

山崎 恵子

ペット研究家

パネリスト

ジュリー・バンク

フランク・R・アシオン

宮川 八岐

飯倉 洋治

バンク

はい、このような機会を頂きましてどうも有り難うございます。素晴らしいシンポジウムに参加出来て嬉しく思っております。本当に幅広い意見や考え方が出てきております。そして特にですね、如何に動物、或いは動物介在療法というものをプログラムして使っていくか非常に重要です。我々は動物をどんどんと色々なものに組み込んでいく、そしてそれがまたプログラムの開発には大切だと思います。そしてインコーポレートという表現を私は使うんですけど、様々な関係を考えて、そして動物のニーズも考えつつ人のニーズも考えていくということでインコーポレート、この組み入れていくという表現を私は使っております。ですからドルフィンセラピーも非常に素晴らしいプログラムと私は認識しております。動物のニーズというの、しかしやはりそれなりに注目を払う必要があると思います。それからアシオン先生の研究に関しましては本当に一緒にパネルに参加するというに非常に嬉しく思っております。先生と同じ様にディスカッションのステージに立てるということ、非常に嬉しく思っております。本当に出された研究というのは素晴らしいものですし、社会として前に進むにあたって非常に重要だという風に考えております。如何に動物が社会の中の重要な存在として、欠かせない存在として特に虐待などに対して我々がどういう風に答えていくかということでもあります。そして、様々な動物の恩恵であるとか、様々な考え方、動物の影響力は大きい訳ですから、そういう方向にもっと前向きの変化を見ていきたいと思っております。どうも、有り難うございます。

アシオン

はい。有り難うございます。私もこのような素晴らしいグループの一員として、お招き頂き嬉しく思っております。



ここで、ちょっと一言ずつ順番に申し上げます。ですが、私なかなか考えが、まとまらない時があります。ですから、お話になった方々の順番通りにいきたいと思っております。私、ジュリー・バンクさんのお話をまず、最初に聞きました。その時に思ったんですけど、やはり歴史を忘れてはいけないと思っております。彼女は素晴らしい仕事をされて、それを我々に分かち合ってくれている、そして初期の考え方、動物の愛護に対して、福祉に対して、そして、子どもの福祉と動物の福祉、その二つの考え方が発達してきたということ忘れてはなりません。一つ重要なことは、やはり彼女が愛護教育或いは人道教育の10個の重要なポイントをお話されました。やはりこういうことに関しまして、もっとより高度なコンセプトとして色々検討を加えていかなければならないと私は考えています。そして、ジュリー・バンクさんのお話は非常に素晴らしいスタート地点になっていると思っております。そして、重要なプロセスの中での要点、ポイントとは何か、スターティングポイントとして彼女が色々なことをお話されました。そして、それぞれのポイントに関しまして、我々ももっと突き詰めて考えなくてはいけないと、非常に私にとって重要なお話を頂いたと思っております。

それから、教育関係のスピーカーがお話になりました。どうも有り難うございました。素晴らしいお話を聞かせて頂きました。こちらで分かりましたことは、ただ言葉の内容だけではなく、言葉だけではなく、このお話を聞きまして、我々が話している全ての事、例えば動物の重要性、そしてまたその人間との関係の重要性を非常に心から分かち合わせて頂いたと。愛着、愛情、そして素晴らしい思い出を持っていらっしゃる。そして、また、様々な子どもの頃からの経験、家族にも大事にされた経験、そして、それが生きています。そしてそれをどんどん引き継いで次の世代に分かち合われたということで、非常に様々な感情を表現して頂いて有り難く思っております。また、このような形で非常に素晴らしい能力を持っている、この日本の教育制度の中でこういう能力を持っている素晴らしい方がいらっしゃるということ、特に動物の重要性、また動物と子どもの関係の重要性ということ、非常に重要に考えていらっしゃるような方、そして動物に対する態度、クラスとかその他で非常に好ましい方向で考えていらっしゃる方がいらっしゃるということは素晴らしいと思っております。

それから、次にもう少し時間があればなと思ったんですけども、やはりこの小児科の先生もご参加頂きまして、もっと時間が長ければと思っております。やはり、時間も限られてはありましたが、しかし様々な介入の仕方ということでご紹介がありました。いつか、ビデオを是非、見せて頂きたいと思っております。お話になっておられたビデオ、素晴らしいものだと思います。やはりそれ自体がまた、様々なお話になられた変化というものを表していると思っております。また、もう一つやはり我々がやっている仕事を今後、如何に進めていくかということが非常に大切だと思います。私も時に色々な話を致します。しかし、例えば子どもに対する虐待の結果、どういう風になるか、例えば動物自体も傷ついている訳です。忘れがちですけどそうなんです。そして、私にとってそのあたりのバランスをとることが非常に



難しくなったりします。ですから、人の影響を受けている、そしてまた、非常に同じく動物も嫌な形で影響を受けているということでもあります。それから、ドルフィンセラピーのお話がありました。これによりまして、気が付きました。こういう可能性は、15年前或いは20年前、その時は想像もしていなかった訳です。こういう介入ということがあるのかと。子ども達に出来るかということも想像していませんでした。そこで、やはり、本当にこの近年様々なことを我々が学んだということでもあります。例えば、象は人が聞けないような声を出すということも研究結果で分かった訳であります。象の間でコミュニケーションが行われている、象とコミュニケーションを行った研究者のグループで分かった訳です。



それから、1週間ほど前ですけれど、キリンが非常に特殊な音を出す、キリンが本当にほぼ超音波に近いようなそういう音でコミュニケーションをしている。人間には分からない。2週間位前に分かったんですけれど。やはり様々な革新的なプログラムがあれば、将来が明るいと思います。我々やはり全てこの問題に直面しなければなりません。即ち我々のしてきた仕事を如何に評価していくか、そして、我々が行ってきたことを聞いていらっしゃる方或いは様々なところで、示していき実証していくことが大切であります。良い効果があるのか、本当に価値があるのか、これから実証、検討が必要だと思います。そのような形で我々のやり方が更に高度なものになり、また資金も入ってくると思います。お聞き頂きまして有り難うございました。

### 宮川

先程は、大変見苦しい姿を見せまして恥ずかしい限りでございますが、今日はアメリカの方から非常に研究されている状況についてお話を伺いましたし、また、飯倉先生の方からはアトピーの子ども或いは障害を持つ子どもとの動物とのふれあいの話もありまして、色々これからの文部科学省の教育行政にも具体的に生かしていかなければいけない、そういう様々な示唆を頂いたと思っております。ジュリー・バンクさんは色々その動物に触れる機会というのは各教科の中でも、読書活動の中でも色々出来るというふうなお話がありまして、まさしく日本の教育、例えば国語であれば動物物語、これが教材になって子ども達がそれに感動し、もっと読んでみよう、教科書にない教材をもっと読んでみよう、また、そういう時間を確保して工夫している

というふうな実態もあって、一層この意義というものをこれからも充実、発展させなきゃいけない、という感じを持ちながら聞かせて頂きました。それから、虐待問題を取り上げて頂いたアシオンさんには色々広くご示唆を頂いた訳です。今、日本の教育制度的には私非常に良い形になっていると思うんです。教科、道徳、特別活動、このシステムは大変私良いと思っているのであります。それが、各学校で本当にその学習指導要領の趣旨を実現するための素晴らしい教育課程を実施しているかな、という色々課題もある訳でございます。

いじめ問題、不登校、暴力行為、これが極めて深刻な状況で毎年増えているのであります。しかし、13年度の調査では、暴力行為もいじめ問題も少なくなりました。それが何なのかというのは、これからまた、今年の9月不登校問題の研究協力者会議というのを立ち上げてね。そこで、道徳教育の状況はどうなんだとか、或いは、特別活動の体験が少なくなっているんじゃないか、とかそういうふうな検討を今しているところでもありますけれども、分析をきちんとしなきゃならない。ただ、不登校が増えているんです。3.3%増えておりましてね。これは、国をあげて何とかしなきゃならないという検討をしている段階でございます。そういう状況もありまして、動物飼育体験、これらが学校現場で国が示していることが十分に生かされているかどうかについて、国としてのやはり実態調査もしていかなければいけないのでないか、今実感したところでございます。極めて文部科学省では専門家の方が考えるような具体的で分析的な研究はなかなか出来ないものでありますけれど、しかし実施状況調査は、どうなっているかということについての調査は出来るのでありまして、飼育状況がどうなのか、施設、獣医師との連携推進はどうか、或いは、不登校等の問題との関係、学校はどう認識しているか、様々な事を今後、今回の提言等を受けて文部科学省のこれからの行政に反映するように私の立場からも努力しなきゃなんないなということを実感したところでございます。ただ、この4月から、学校週5日制完全実施と土曜日が全部休みになりました。ふれあい活動の体験が時数的に少なくなってきたとか。或いは飼育栽培の活動が後退してきたとかそういうことの報告等も色々聞いています。ところでございまして、困ったもんだなと思っております。

そして、学習指導要領の精神、先程申しました、豊かな人間性、社会性を重視して改正したと言いましたけれども、このところどうも、学力、学力、学力育成をどうするんだ、5日制で学力が低下するんじゃないかということが、マスコミ等から色々ご批判、ご指摘を頂いている訳でございますが、私はこういう飼育体験等も含めて学ぶことも学力の一つだということを教育関係者はもっともっと強調していかなければいかんと、こんなふうにいるところでございます。お願い致します。

### 山崎

有り難うございました。それでは、飯倉先生よろしくお願致します。

## 飯倉

私、小児科医でしかも専門がアレルギーと免疫で、もう国立小児病院に27歳のときから27年間アレルギーに青春を捧げてきた人間が、こういう事を、心理的な事を喋るといっても一見不思議かもしれませんが、アレルギーの子どもって長いんですね。長いとどうしてもそこに心理的な問題があるので、実は昔から臨床心理の人と自分達のポケットマネーで雇いながら臨床心理の人と喘息児の心の問題等は、やっけていて素地はあった。ところが、このドルフィンを何故やりだしたかということは痛み、アトピー性皮膚炎の痛みに対して、まず感じたこと、それをたまたまドルフィンだったらどうかになっていて感じて沖繩の海は綺麗だしやってみたら変わったと。でも、アトピー性皮膚炎を治すのは何もドルフィンがいなくても良い。でも、自閉症を治すのに日本から何百万も出してアメリカに行って自閉症の治療をしていると聞いたんで、これは日本でやってあげた方が良くないかなということ、日本でスタートしました。色々批判があります。でも、私が見ている限り今まで6回やっけていまして、何かやっけてドルフィンの特殊なものというのが人間に影響しているということは感じて、これを科学的なところで解明できるまでちょっと続けていきたいなと思って、これからもやっけていこうと思っています。それが、自分の補足でございます。

それから、今日伺いまして、バンク先生とアシオン先生のお二人の、何ていうんですか、昔からの心の問題を子どもに取り入れて発育に如何に重要視しているかという考え方が、日本に欠けている面をすごく強調なさってお話頂けたと思うんですね。そういう意味で日本もアメリカの方の心のケアと実際、そしてそれが病気に如何にうまくつながり、それをケアしていくシステムを充実しているかということで反省させられました。特に小児科の問題もアシオン先生は犬にも虐待があると。小児科の虐待というのも日本は気がついたのが10年位前であり虐待ということは言っていなかった。たかが10年、たったの10年位、日本で虐待ということに対して問題がクローズアップされ、今もう社会的な問題になってきているという意味では、小児科医がもう少し小さい頃からお二人がお話していたように赤ちゃんの頃から、その、動物を愛することによって、そして人との学校での集団生活で上手くいくような方向への道付けというのが学校以前にあるんだということをお話していらしたと思うんですけど、私は日本でそういうことを言葉にしながらか教育してらっしゃる方が何人いるか、非常に少ないと思いますね。そういう意味で今後重要なことじゃないかなと思って伺っていました。

特にその、実際私病院に来る患者さんというのは出来上がった病気が来る訳です。出来上がった病気を診察して治しているということは、非常に問題があるなということに、国立小児病院を離れて、昭和大学の教授になって初めて分かったんです。というのは、色んな患者さんを診なきゃいけない。そうしましたら、大学の隣に公立の小中学校がある。校長さんにお話してその不登校を或いは保健室学級に行っている子どもを我々がどうにかするから教室を一つ貸してくれと。その代わり臨床心理士が毎

日4時間、で、私も週に2回は必ず行くということにしまして、そして、その教室を借りました。一般の公立の教室を借りて健康相談室を開設して、そして、その学校の不登校がゼロになった、という位健康な子ども達をより健康にしていこうなことも小児科医が必要だろうと。ところがこんなことをやっている小児科医はバカに近くて、小児科医っていうのは忙しくて、データを出す方がよっぽど出世が早いんですが、データはアレルギーでいやというほど持って来まして、アレルギーっていうえば売れますんで、実にだめですけど、そういう意味では、これからそういう意味で少し心理の方の或いは心の問題も小児科医として、声を大にしてあちこちの教授に、教授が一言「お前一日でいい、一時間でいいんだから学校に行って来いよ。」ということで、かなりの学校が救われるんじゃないかなということ、残された教授の5年間を声を大にして言い続けようかなと。その時は、是非先生よろしく願います。そんな感じで今日はアメリカの先生方の幅の広さとそれを実践してらっしゃる活かし方ということを大変勉強させて頂きました。有り難うございました。

## 質疑応答

### 質問者

泉と申します。ある自治体の保健所に勤めておる獣医師でございます。今日は休暇で参加しておりますのでそういうことでお許し下さい。まず、虐待ということで我々の方は非常に色んな所で話題になって、我々の取り組むべき課題だと考えておるんですけども、今、我々の方の虐待というのは、今まで何人かの方がお話になったようなコレクターの部分での虐待行為、これで非常に苦勞をしております。これはあの、心理面の障害を持っておられる、精神的に障害を持っておられる方というのが多いように、私は医者じゃないのでなんとも言えませんが、思います。この対応について、行政組織内での対応が非常に難しいというのも現状であります。それともう一つ、今家庭内暴力と動物虐待のこの部分についても、若干情報は我々の方に入ってくるんですけども、これを一歩進めようとするなら、これは行政の我々がどこまで介入出来るのかという組織内での色んな議論があって非常に難しい。そしてこれは警察の方の対応にというような話があって非常に難しいというのが現状であります。それについて行政の縦割りの中の難しさを感じております。それがまあ虐待についてなんです。

後、視学官の宮川先生がここにおられるので、若干私あの小学校に動物愛護の啓発ということで行っております。私は前の方にこの分野の先生がおられますので、色々聞いておられると思いますが、非常に私自身は問題の部分を感じております。というのも、20㎡足らずのところ数十匹のウサギがいたり、そして、餌をやるということだけで、あと糞掃除と死んだウサギの片付けとか、見てもそういうようなことをやっている子どもがいます。その問題っていうのは先生も多分ご存知だと思いますけど、予算化されてない、避妊手術が出来てない、現場に行ったら泣いてしまいます。よろしくお願ひしたいと思います。以上です。

## 山崎

コレクターとかそういった人間のメンタルヘルスの問題に関しての介入のしかたに関しては、多分ジュリー・バンクさんが一番適任だと思いますので、よろしいでしょうか。

## バンク

このコレクターの問題というのはとても問題だと思います。今、言われましたように教育者の人また、法律がと言われましたけれどもそれだけが問題ではありません。

これは一人の問題、または一つの分野の問題ではありません。アメリカにおいて伝統的に動物の管理ということ、これは行政当局が問題だと感じておりまして、また、その法を実施するという観点から言っても問題がございます。そういった個人が動物を飼うということを抑えることは出来ません。その時点で抑えることは出来ません。5年、10年経ち、同じ人が同じ問題を持っている場合があったと致します。これは、協力的な形で法律を実施していくという事をします。心理学者、教育者、ソーシャルワーカーの人、動物管理局の人達が協力致しまして、その人にとって何が重要かということを見ます。例えば、一般的に申し上げて法律を実施することは必要であります。法律そのものがその状況によって解釈されます。例えば、一つの家には、1匹しか持てない、または100匹持ってもいい、そういったことをいうのではなく、重要なことは、ソーシャルワーカーの人、または精神分析医の人がそういった情報を持って前に進めていくということでもあります。このような精神的な心理学的な介入をするということなしに、法律を実施することは出来ません。動物管理局の人が家を訪れて、そして動物を連れて来るといようなことをする場合もあります。ソーシャルワーカーの人が心理学的な介入をするということもございます。一つこの分野においてはあまり十分に行われていないと思います。このような人、コレクターの人への介入ということが十分に行なわれておりません。アシオン先生が言われましたけれども、強制的な執行を行うことが必要になってまいります。これは、心理学的なまた、ソーシャルワーカーの人の協力をもって行なわれると思います。

## 宮川

ただ今、ご指摘がありましたことね。文部科学省もそういう自覚がありましたので、今回の解説書に獣医師さんとの連携、関係機関との連携をするようにという文言を入れたのであります。そして、今日も沢山獣医師さんの方、関係者来ていらっしゃいますけれども、この方達のお力添えの元で連携が図られている市町村は随分改善されております。我々教員時代もそうでしたけども、広いところに沢山飼うことが良いことだと思っていました。だけど、専門家の話を聞いて初めて様々な問題があるんだということを知ったという状況は確かにある訳でございます。ということ踏まえて、市町村によっては学校関係者を集めて獣医師さんの講話、つまり研修を充実している、そういうことが広がっております。これは、そちらに中川先生という獣医師さんがいらしてまして、この方達の大変強い指導力と協力、支援でもって随分変わって来ております。次に今の中川先

生の話をしましたけども、文部科学省の手引書、参考資料、指導資料、これを作ったのを近々学校等に配布する予定でございます。そういうふうな方向で、とにかく徐々に管理或いは正しい飼育の仕方などについて徹底をしていくように、また、改めて今のご指摘を受けて頑張りたいと思います。以上です。

## 山崎

有り難うございました。

## 質問者

恐れ入ります。動物福祉協会 松田と申します。バンク先生にお尋ねした方が良いのかなと思いますけれども、見えない場所での虐待ということですね。結局見ている人が特定の人物で、その通報者が特定されることによって通報者に被害が及ぶ恐れがある。そういう虐待に対する対応の仕方というのは、本当に動物が死ぬまで手が出せないというような現実が日本ではあるんですね。そういうことに対して、先進国の皆さんではどういう対応をしてらっしゃるのか、要するに通報者保護ですね。これは、経済問題でも日本では非常に遅れているんですけども、たかが動物っていう観念がまだ日本にはあるものですから、そういう点でも非常に私達対応に困っております。例えば、隣の2階からしか見えない虐待。隣の2階の人が見ない限り犬の虐待が分からない、そういうものを告発するのにどういう方法をもって出来るのかなど。

## バンク

まあ、色々違う状況があると思うんですけども、まず第一に私が申し上げたい問題というのは、通報をした人というのは、あまりしたくないと思うものです。実際に我々がアメリカでやっていることというのは、これは動物虐待をしていることをメディアを通して報告するというのであります。動物虐待をしているのを見た場合には、それを報告する。そしてそれを予防しようとする訳です。まず最初に近所の人が見ていきます。そして、皆がそのように感じた場合には、それをいう場所を作るということを致します。メディアキャンペーンをやりまして、テレビであるとか、ビルボードであるとか、そういったところで動物虐待というのは見過ごしてはいけないということを訴えます。そして、それについて何か言わなければならないと訴えます。そして人道教育をやり、メディア教育をやることによりまして、人の態度が変わってきております。もう一つ、法律が変わっております。これは、動物虐待というのは軽犯罪と考えられております。食べ物や水を与えないとか、または、獣医に診せないというのは、または、叩くということこれはまだ、大丈夫だと。しかし、アニマルコントロールのオフィサーが来ます。これは、動物虐待をしている場合、そういった苦情を受け付けるということも彼らの責務であるというふうな考えております。また、法律を実施すること、強化することとは人々の協力なしには行われません。こういった状況も変わってきております。動物を虐待することによって言い訳は出来ません。このようなスローガンを立てて、こういった人々の態度

が変わってきており、明確になってきております。私の個人的な考えなんですけれども、動物虐待を見て黙っているというのはいけないことだと思います。ヘンリー・バーグのお話を先程致しましたけれども、動物虐待防止法というような法律があります。ですから、こういった虐待をしている人を見ているということはいけません。ヘンリーの考えに同調した人が次々に増えてきて何千人もの人が増えてそして、SPCAに参加してきました。一つの事を受け入れてそれを止めないということはいけないと思います。明日、自分が何らかの行為を起こすということ、そして、友達も一緒に態度を変えていこうということをしております。

### 山崎

これで、一応のクローズをさせて頂きたいと思います。皆様、長い間本当にご静聴有り難うございました。今回のこのシンポジウムに一つ非常に重要なメッセージがあるとなれば、やはり学校動物であろうと動物介在療法、或いはレクリエーション等で一緒に我々と参加する動物であろうと、そういった動物のケア等に関しては動物福祉上ではなくて、むしろそれを見ている子どもに対して影響があるのだという観点から、ケアを考える或いはまっとうな参画状況を整えることを考えるということが、非常に重要なメッセージかなと私個人的に思っております。今日は本当に先生方色々有り難うございました。

### 富永 (Knots 代表)

各パネラーの皆様、どうも有り難うございました。そして、長時間座長をお努め頂きました山崎先生、本当に有り難うございました。

この一連のシンポジウムを通じまして私も感じたことがございます。子ども達のためにも動物達のためにもプロフェッショナルと呼ばれる方々の連携及び私達大人の連携というものが大変重要であると思います。そのことを皆様も十分にご実感されたことと思います。大変心強いことに、このシンポジウムは各方面の方々の様々なご支援により実現することが出来ました。簡単ではございますが、こちらでご紹介させて頂きたいと思います。

まず、ご後援を頂きました団体をご紹介します。

環境省／厚生労働省／文部科学省／兵庫県／兵庫県教育委員会／神戸市教育委員会／神戸市PTA協議会／社団法人 神戸市医師会／社団法人 日本獣医師会／社団法人 兵庫県獣医師会／社団法人 神戸市獣医師会／社団法人 日本動物福祉協会 阪神支部／スウェーデン大使館／駐大阪・神戸アメリカ合衆国総領事館 関西アメリカン・センター 以上の団体より、ご後援を頂いております。

また、財団法人 中内力コンベンション振興財団／ポートピア 81 記念基金 より助成も頂きました。そして、最後になりましたが、特別協賛として、ネスレピュリナペットケア株式会社様からは格別のご支援を頂いております。この場をお借り致しまして、ご支援下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。本当に有り難うございました。

発行：2003年3月10日

**特定非営利活動法人 Knots**

〒650-0004 神戸市中央区中山手通 6-6-7-405

TEL/FAX:078-341-5884

URL: [www.knots.or.jp](http://www.knots.or.jp)

E-mail: [info@knots.or.jp](mailto:info@knots.or.jp)

Copyright (c) 2003 "NPO Knots" No reproduction or republication without written permission.